
ポケットモンスターBW 白き少女と黒き少年

アンネン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターBW 白き少女と黒き少年

【Nコード】

N85320

【作者名】

アンネン

【あらすじ】

イッシュ地方で活動していたプラズマ団を見事撃退したブラックとホワイト。そして二人の舞台は、イッシュからカントーへと移す。

0 プロローグ

カントー、ジョウト、ホウエン、シンオウから随分離れた地方、イツシュ地方。

ここには、4地方にいないポケモンばかりで、カントー、ジョウトなどに住むポケモンは、いない。

そのイツシュ地方に四人の少年少女がいた。

4人は、旅に出ているいろんなポケモンと出会った。

しかしそんな4人の前に現れた謎の組織プラズマ団が「ポケモンの解放」を呼びかけた。

そのプラズマ団のボス——Nは、4人——特にブラックによくちょっかいを出してきた。

そしてNは、イツシュの伝説のポケモンレシラムを復活させてしまう。Nは、ブラックにゼクロムを復活をそそのかす。

そしてポケモンリーグにやってきたブラックとホワイトは、急いで四天王を倒しチャンピオンのアデクのところへやってきたが時遅くアデクは、Nに敗れそしてNは、ポケモンリーグの後ろに突如城が出現する。ブラックとホワイトは、城に侵入しそしてNが待つ部屋にやってきた。

そしてNとブラックがどちらが英雄に相応しいか最終バトルが始まり勝負の結果ブラックが勝利する。しかしそこにゲーチスが登場しブラックに勝負を仕掛けようとするがブラックの手持ちは、Nとの激戦で疲れ果ててしまう。しかしホワイトがブラックに代わりゲーチスと対決する。ゲーチスのポケモンは、強敵で苦戦するホワイトだが最後は、ポケモンたちを信じて見事勝利する。そしてゲーチスは、連行されてNは、レシラムに乗りどこかに去って行った。こうしてイツシュ地方の平和を守ったブラックとホワイト。そしてブラックとホワイトのその後の物語です。

0 プロローグ（後書き）

今回は、ブラックとホワイトの過去のお話を簡単にまとめたお話でした。次回ブラックとホワイトは、新たな旅に出る。

1 新たな冒険へ

ここは、カノコタウン。

この町のとある家にホワイトがいた。

ホワイト「暇だわ」

ホワイトは、そうつぶやいた。

あの決戦から2週間近く経ちホワイトは、家でのんびりしていたが何もなく退屈に過ごしていたのだ。

ホワイトの母「ホワイト、アララギ博士が研究所きて欲しいって」

ホワイト「ハ―イ。一体何の用でだろう？」

ホワイトは、部屋を出てアララギ博士の家へ向かった。

アララギ研究所につき玄関開けるとアララギ博士のほかにブラックの姿があつた。

アララギ「いらっしやいホワイトちゃん」

ブラック「遅かったなホワイト」

ホワイト「ブラックも来てたんだ」

ブラック「ああ、アララギ博士に呼ばれてな」

ブラックは、ホワイトにそう言った。

アララギ「さて、君達を呼んだのは、他でもないよ。実は、お使いを頼みたいんだが」

ブラック「お使いですか？」

アララギ「そう、私やパパの先輩でカントーに住むオーキド博士のところへ届けて欲しいものがあるのよ」

ホワイト「オーキド博士?!」

ブラック「オーキド博士、オーキド博士・・・あ!あのポケモン川柳で有名なあの博士ですか？」

ブラックの言葉にホワイトがこけてしまいアララギ博士は、苦笑する。

ホワイト「ブラック、オーキド博士は、確かにポケモン川柳でも有名だけど、偉大なポケモン博士よ」

ブラック「そうなんだ。それでアララギ博士届けて欲しいものって？」

アララギ「あ、そうだったわ。実は、この資料をオーキド博士に届けて欲しいのよ。これは、大事な資料だから郵便じゃあ送れないからあなた達に頼んだわけ」

ホワイト「わかりました。アララギ博士」

アララギ「なら、急いだほうがいいわ。カノコ空港を発着するカンツー便は、1時間後に出発だから急いだほうがいいわ」

ホワイト「わかりました。行くよブラック」

ブラック「ちよっと待ってよホワイト」

こうしてホワイトとブラックは、アララギ研究所を後にした。

1 新たな冒険へ（後書き）

ホワイト「いよいよ新しい地方へ出発ね」

ブラック「そうだな」

二人ともワクワクしてるところ悪いけどまだカントーへ行かないよ。

ブラック「えー！なんで？」

まだあっていない人物にあって欲しいからね。

ホワイト「誰なのその人たちって？」

それは、次回のお楽しみに！

2 サヨナライツシュ地方

アララギ研究所を後にしてカノコ空港へ向かっていたブラックとホワイト。

チェレン「ブラックとホワイトじゃないか」

ベル「ほんとだ」

ブラック「あ！久しぶりだな、チェレン、ベル」

ベル「これからどこ行くの？」

ホワイト「アララギ博士のお使いでカントーのオーキド博士のところまでお使いさ」

チェレン「オーキド博士だと！？」

ベル「誰なのその人？」

ベルの言葉にブラックたちがこけつてしまう。

ブラック「あのなベル。オーキド博士は、世界一のポケモン権威者だぜ」

ホワイト「なに行ってるのよ、あんただってさっきまでオーキド博士のことを川柳で有名な人だつて言ってたじゃないのよ」

チェレン「そいつは、ほんとかいホワイト？」

チェレンの問いにホワイトは、頷いた。

ベル「カントーか！きつとイツシュには、いないポケモンとかいっぱいいるそうだな」

ホワイト「そうだね」

ホワイトがベルにそう答えた時だった。

「???」あら？ベルちゃんにホワイトちゃんそれにチェレン君にブラック君じゃないの」

後ろからブラックたちの名前を呼ばれてふつと振り向くと一人の女性立っていてブラックたちは、その女性の顔に見覚えがあった。

4人「フウロさん！？」

ブラックたちは、その声を上げた。

フロウは、フキヨセジムのジムリーダーで航空関連の仕事を持つ飛行タイプのエキスパート者である。

ホワイ特「フロウさん、どうしてここに来てるんですか？」

ホワイ特がフロウにたずねた。

フロウ「実は、私の親友がカントーのトキワシティのジムリーダーに就任したの。だから祝いに行こうと思ってきたの」

ブラック「それだったらフキヨセ空港から行けばいいじゃないですか」

フロウ「あの空港は、貨物専門だから無理なのよ。だから私は、わざわざカノコタウンのカノコ空港からカントーのトキワまで向かうのよ」

ホワイ特「そうなんですか。実は、私とブラックもカントーへこれから行くんです」

ブラック「そうなんです。アララギ博士の用事でオーキド博士のところまで」

フロウ「オーキド博士ですって！？それは、随分重要なお使いなんですね。あ！もうすぐで登場時間が始まるから私先に行ってるわ」

そう言つてフロウは、ケンホロウに乗りカノコ空港へ向かった。

ホワイ特「それじゃあ、行つて来るね」

チェレン「ああ、気おつけてな。それよりブラックとホワイ特の手持ちポケモンは、どうなってるんだ？」

ホワイ特「手持ちポケモン？私は、ジャローダとドレディアとハハコモリの3匹だけよ」

ブラック「俺は、ミジュマルとチラチーノ、ゾロアークの3匹だけだ」

ベル「残りのポケモンたちは？」

ホワイ特「残りのポケモンたちは、アララギ研究所においてきたわ。アララギ博士達が面倒見てくれるって」

ベル「へえ」

ブラック「ホワイ特、急げもうすぐ出発時刻だぜ」

ホワイト「はい。それじゃあねベル、チェレン」

ベル「気おつけてね」

チェレン「たまには、電話しろよな」

ホワイト「わかってるって」

こうしてベルとチェレンに見送られながらカノコ空港へ向かった。

そして無事飛行機に乗れたホワイトは、ブラックに聞いた。

ホワイト「ねえ、ブラックあのポケモンも置いてきたの？」

ブラック「なわけねえだろう。あのポケモンは、伝説のポケモンだぜ。置いていくわけには、いかなしね。でも安心しな、そう滅多に使わないから心配するな」

ブラックがホワイトの問いにそう答えた。

そして二人の乗った飛行機は、カントーへと徐々に向かっていった。

2 サヨナライツシュ地方（後書き）

ホワイト「次こそカントーへ上陸だわ」

ブラック「そうだな」

二人も笑顔なので今日は、この辺でお開きにさせていただきます。次回もお楽しみに。

3 カントー上陸

カノコ空港を出発して5時間半カントーのトキワ空港に到着した。トキワ空港を今年の春頃完成した空港でカントーの新しい玄関口として沢山の利用者がいる。

ホワイとブラックは、飛行機から降りたあとフロウと再開する。

フロウ「あ！ブラック君にホワイちゃん」

ブラック「フロウさん。これからトキワのジムに行くんですか？」

フロウ「ええ。そうよ」

ブラック「よければ、連れてってください」

ホワイ「ブラック！何言ってるのよ私達には、お使いのほうが・・」

ブラック「だってよ。フロウさんの親友が新しく勤めることとなったトキワジムを見てみたいし、いいだろう別に今日中に届ける急ぎの用でもあるまいし」

ホワイ「わかったよ」

ブラックのわがままにホワイは、ついに折れてしまう。

ブラック「それじゃあ行きましようかフロウさん」

こうしてブラックとホワイは、フロウとともにトキワジムへ向かった。

フロウ「ここがトキワジムよ」

ホワイ「なんかすごいわ」

フロウ「なんでも前のジムリーダーは、地面タイプ専門のジムリーダーでとても強い人だったけどその人が突然ジムを手放してしばらくは、カントーの四天王キクコさんがジムを運営していたけどあの人ももうとんだから代わりの人を探してたの。それで私の親友が名乗りを上げてトキワジムのジムリーダーに就任したの」

ホワイ「へえ、そうなんですか」

ブラック「きつと強いんだろうね」

フロウ「もちろんよ。私の親友も飛行タイプのエキスパートなの」
ブラック「だったら戦ってみたいぜ」

ホワイ「ほんとバトルのことになるとすぐに熱くなっちゃんだからあんたは」

ブラック「いいだろう別に」

フロウ「それより入りましょう」

フロウは、ドアを開けて中に入る。

???「いらしゃいフロウ」

フロウ「久しぶりねヒロミ」

フロウは、女性——ヒロミな抱きついた。

ヒロミ「ほんと、久しぶりね。それよりフロウ後ろの子達は？」

フロウ「この子達は、ブラック君とホワイちゃん。以前ジム戦したのとても強い子達よ」

ホワイ「初めまして私ホワイと言います」

ブラック「初めまして俺ブラックと申します。早速ですけどヒロミさん俺とポケモンバトルしてください」

ホワイ「またブラックたら」

ヒロミ「確かに君ぐらいの実力者なら戦ってもいいけど今は、戦えないわね」

ブラック「どうしてです」

ヒロミ「いくらイッシュのバッチを8つあってもカントーじゃ何も意味がないわよ。だからもし君達がカントーを回るんならジムバッチ7つ集めたとき戦ってあげるわ」

ヒロミにそう言われたブラックとホワイ。

フロウ「ブラック君ホワイちゃんそろそろ行ったら？」

ヒロミ「この子達何か用があるの？」

フロウ「そうなの。この子達お使いでオーキド博士のところへ行くのよ」

ヒロミ「オーキド博士のところに!?!ならこのトキワの南に行くと

1 番道路があつてそこを下つていくとマサラタウンがあるの。そこにオーキド博士の研究所があるから」

ホワイト「教えてくれてありがとうございます。行くわよブラック」

ブラック「お、おい。待ってよホワイト」

ブラックがホワイトの後を追って行きトキワジムを後にした。

4 マサラタウン

ブラックとホワイトは、1番道路を歩いていた。

ホワイト「もうすぐマサラタウンよ」

ブラック「あれがマサラタウンか。俺達が住むカノコタウンと同じく静かな町だな」

ホワイト「そうね。それより早くオーキド研究所へ行きましょ」

ブラックとホワイトは、ようやくマサラタウンに到着しオーキド研究所を目指した。

ブラック「ここじゃないか？」

そう言っているとブラックがインターホーンを押す。

???「ハーイ」

すると玄関に一人の青年が出てきた。

ホワイト「あのオーキド研究所の人ですか？」

???「そうだけど」

ブラック「俺たちアララギ博士のお使いでオーキド博士に届け物を届けに来ました者です」

???「そうなんだ。じゃあ上がって奥に博士がいるから。あ！僕は、ケンジ、オーキド博士の助手を勤めてるの」

ブラック「俺は、ブラック」

ホワイト「私ホワイトです」

簡単に自己紹介をしたケンジとホワイトとブラック。

ケンジ「博士、アララギ博士の使いの者が来ましたよ」

オーキド「ご苦労であった。ケンジ」

ブラック「おお！！あなたがポケモン川柳の生みの親オーキド博士ですか！？」

ブラックの発言にこけてしまうホワイト。

ホワイト「だから、ブラック何回答わせるのよ。オーキド博士は、

ポケモン権威者よ」

オーキド「いいんじゃないや別れに周りの人からよく言われてるからわしは、気にせんから」

オーキドは、ホワイトにそう言った。

「博士それよりポケモンくださいよ」

「そうですよ僕この日を楽しみにしてたんですから」

「お願いしますよ」

オーキド「ちよつと待っておれ」

オーキドは、慌ててある箱を開け始めた。

ホワイト「なんですあの子達？」

ホワイトは、ケンジにたずねた。

ケンジ「オーキド博士は、新人トレーナーの初心者ポケモンも扱ってるんですよ」

ホワイト「新人トレーナーということは、この子達は、今日旅立つんですか？」

ケンジ「そうだ」

ブラック「へえ懐かしいなこの光景」

ブラックは、そう言った。

オーキド「これが、新人ポケモンじゃよ。好きなポケモンを1つお選び」

「それじゃあ、私は、フシギダネ」

「俺は、ゼニガメだ」

「おれは、ヒトカゲか」

オーキド「みんな受け取ったようじゃな」

「だって昨日、みんなで話し合って決めたの」

ホワイト「へえみんなで話し合って決めたの関心ね」

ホワイトが新人達の会話に入り込む。

「お姉ちゃんは、誰なの？」

ホワイト「ごめんね。私は、ホワイト草系マスターを目指しイッシユ地方からやってきたの」

???「イツシュ地方!？」

???「そんな遠くから来たんだ」

ホワイト「そうなの。後ろにいるブラックと一緒にオーキド博士に用があつてきたの。ところで君達の名前は？」

???「私リーフと申します」

???「俺は、ファイア」

???「おれは、グリーンだぜ」

ホワイト「よろしくね3人とも」

ホワイトがそういつて3人は、旅立つて行つた。

ブラック「おいホワイト。早く資料をオーキド博士に出したら？」

ホワイト「そうだったそうだった。」

ホワイトは、アララギ博士から預かつた資料をオーキドに渡す。

オーキド「ご苦労これで研究にはかどるよ。それよりお前さんがたカントーを周る気は、あるかい？」

ブラック「もちろんです」

ホワイト「同じく」

オーキド「そうか。このカントーには、イツシュには、いないポケモンが多いから図鑑も全国図鑑に変えてやろう」

そうオーキドが言つとブラックとホワイトの図鑑を取り出しバージヨンアップさせる。

オーキド「これでよし。これでイツシュ以外のポケモンが見られるじゃろう」

ホワイト・ブラック「ありがとうございますオーキド博士」

ブラックとホワイトは、オーキド博士にお礼を言う。

オーキド「もう遅いから今晚は、泊まっていきなさい」

オーキドにそういわれてブラックとホワイトは、お言葉に甘えて一晩泊めてもらつこととなつた。

5 新たな地での冒険

ホワイとブラックは、オーキド邸にて一晩泊まることとなり二人は、今ケンジとオーキドとともに飯を食っていた。

オーキド「おいしいの。ホワイが作った料理は」

ホワイ「いえ、それほどでもないですよ」

ケンジ「ところでブラックとホワイは、カントーのジム回るのかい？」

ブラック「もちろんだよ。ジムを回って四天王とチャンピオンと対決してやるぜ」

ケンジ「でもブラック。その前にリーグに勝ち上がらないと」

ブラック・ホワイ「リーグに勝ち上がる？」

ケンジ「そうさ。カントーのジム8つ集めて年に1回行われるリーグに出場しトーナメント戦で競って優勝した人のみ四天王、チャンピオンと対決できるんだ」

ホワイ「そうなんですか」

オーキド「そうじゃ。カントーだけでは、なくジョウト、ホウエン、シンオウもこのやり方なんじゃ。まあ、イッシュも昔は、カントーと同じやり方をとってきたけど2年ぐらい前に廃止にされて今のように直接対決となったのじゃよ」

ブラック「そうなんですか」

ホワイ「それよりブラック。あたしは、早いんだから飯食ったら寝なさいよ。あんたただでさえ寝起きが悪いんだから」

ブラック「わかってるよ」

ブラックは、そういつて借りた部屋に戻っていった。

ケンジ「仲いいんだねブラックと」

ホワイ「とんでもないよ。あいつは、バトルが大好きでジム戦やポケモンゲットを優先するポケモンバカだけど曲がったことが嫌いで悪いやつを見逃さない正義感の強いやつでポケモンに優しく接す

し冷静なやつさ」

ケンジ「へえ、そうなんだ」

ケンジとオーキドは、それを聞いて「あいつと性格そっくりだ（じやの）」と心の中でそう思う。

ケンジ「じゃあ、ホワイトは、ブラックのことが好きなんだ」

ホワイト「違いますよ。誰があいつなんかに」

顔を赤くなりながら風呂に入っていた。

翌朝ブラックとホワイトは、玄関に立っていた。

オーキド「それじゃ、かんばるのじゃよ。アララギ君には、わしから連絡入れておくから心配しないでいいじゃろう」

ケンジ「ここから近いジムは、トキワだけとあそこは、バッチリ集めないと勝負してくれないからニビへ行くといいよ」

ホワイト「ありがとうケンジ。行くよブラック」

ブラック「待ってくれよホワイト」

ブラックは、ホワイトを追っていきながらマサラタウンをあとにし二人の新たな旅が始まった。

5 新たな地での冒険（後書き）

ホワイト「イッシュ以外の旅が始まったわ」

ブラック「早くニビへ行きたいな」

まあ慌てずのんびりとニビへ目指しましょう。

ブラック「結局は、作者ペースかよ」

仕方ないだろう我慢しろよ。

ブラック「ハ―イ」

ホワイト「それより作者。ブラックの性格アニメ主人公そっくりじゃないの？」

そっくりじゃなくてほとんどそのまま入れたの。それでは、時間のためこのへんでお開きにします。次回もお楽しみに」

6 ライバル登場（前書き）

ホワイトにライバル登場します。

ホワイト「誰なの？」

それは、AGシリーズでサトシたちと一緒に旅をしていたある少年です。

ホワイト「ま、まさか!？」

そのまさかですよ。

6 ライバル登場

マサラタウンを後にしたブラックとホワイトは、再びトキワシティにやってきた。

ブラック「まさかもう一回この町に来るとは」

ホワイト「まあ、仕方がないわよ。それより私は、かい出し言ってくるからブラックは、ポケモンセンターにいて」

ブラック「はいよ」

そういつてブラックは、ポケモンセンターに入っていく、ホワイトは、買出しに出て行った。

ホワイト「随分買っちゃたわ」

ホワイトは、荷物を持ちながら言う。

二ビに行くには、トキワの森を通ることになる。着くまでに2 / 3 日かかる。

ホワイト「少し休むか」

ホワイトは、ベンチでゆったりした。そんな時だった。

???「あのゝすいません」

ホワイトに一人の眼鏡をかけた少年がやってきた。

ホワイト「私に何か用？」

???「僕とポケモンバトルしてください」

眼鏡の少年は、ホワイトにバトルを申し込まれた。

ホワイト「いいわ。ところで君の名前は？」

???「僕、マサトといいます」

ホワイト「マサト君ね。わかったわ、バトルは、1対1でどうかしら？」

マサト「いいですよ」

こうして、お互いに初めてのバトル、ホワイト対マサトのポケモンバトルが始まった。どちらかが戦闘不能になった時点で終了する。

マサト「僕はこの子だ！行け、ラルトス！」

ラルトスがマサトの肩から降りて、バトルの準備をする。

ホワイト「（ラルトスか！新人のようだしこは、少し優しいポケモンで行きますか）ドレディア、ゴー」

ホワイトは、ドレディアを繰り出した。

ホワイト「先行は、マサト君からどうぞ」

マサト「お言葉に甘えて、ラルトス、念力」

マサトのラルトスが念力を繰り出しドレディアに命中する。念力は、低確率で混乱するがドレディアは、混乱しなかった。

ホワイト「やるわね、マサト君。なら、ドレディア、エナジーボール」

ドレディアがエナジボールを発射する。

マサト「ラルトス、サイコネシスで、エナジボールを受け止める」
ラルトスは、サイコネシスでエナジボールを止めてドレディアに投げ返しドレディアに当たる。

ホワイト「すごいじゃん！初めてのバトルなのに、もうサイコネシスが使えるなんて。どうやら油断しすぎたわ。ドレディア、はなびらのまい」

ドレディアは、はなびらのまいを発射しラルトスに当てる。

マサト「（はなびらのまいか）。でも使い終わったら必ず混乱する）

マサトは、心の中でそう言ったが・・・

ホワイト「マサト君、あなた、はなびらのまいは、使った後混乱すると思っているようだけど私のドレディアの特性は、マイペースだから、混乱は、しないわ」

それを聞いてマサトは、驚く顔をする。

マイペースは、「混乱」状態に絶対にならない特性である。

そしてドレディアは、もう一回はなびらのまいを発射。

マサト「ラルトス、サイコネシスで止めるんだ」

マサトの指示にラルトスは、答えてはなびらのまいを止めた。

マサト「そのまま、投げ返せ」

ラルトスは、はなびらのまいを投げ返しドレディアに当たる。

ホワイト「息がぴったりだね君達。でも、私も負けないわ。ドレディア、破壊光線」

マサト「ラルトス、サイコキネシス」

2匹のポケモンが同時にサイコキネシスと破壊光線を繰り出した。激しくぶつかり合い当たった瞬間に爆発がした。爆発が収まると、2匹とも倒れていた。

マサト「・・・今回は、引き分けみたいだね・・・」

ホワイト「でも、久々にいいバトルしたわ」

と、そのとき、女の声がした。

???「いやー、いいバトルを見せてもらったわ」

マサト・ホワイト「あああ!!! ヒロミさん!？」

ヒロミ「久しぶりだね。ホワイトちゃん、マサト君」

ホワイト「ヒロミさん、マサト君を知ってるんですか？」

ヒロミ「ええ。彼の家は、ハウエン地方のトウカシティのジムリーダー、センリさんのお子さんと、ポケモンコーディネーターでトップに立ちハウエンの舞姫と呼ばれているハルカさんの弟さんよ」

ホワイト「へえ」。ジムリーダーでトップコーディネーターかゝなるほど、それでこんなに実力あるのか」

マサト「ヒロミさん、必ずジムバッヂ7つ集めてあなたと勝負します」

ヒロミ「もちろんよ、あなたの父上には、トレーナー時代、よく戦ってたから」

マサト「それじゃあ、僕は、ニビに行きます。ホワイトさん、今度あったらまた勝負してください」

ホワイト「もちろんよ、あと、マサト君。私のことは、ホワイトでいいわ」

マサト「なら、僕もマサトでいいです。それでは、この辺で失礼します」

マサトは、その場を去っていく。

ヒロミ「そろそろ私もジム戻るわ。それじゃね。ホワイトちゃん」

ヒロミもその場を去って行く。

ホワイト「私もポケモンセンターに戻らないと。ブラックのことが心配だわ」

ホワイトもポケモンセンターに戻って行った。

6 ライバル登場（後書き）

ということでホワイトのライバルは、ハルカの弟マサトです。
ホワイト「なかなか、でよかったわ。マサト君」

まあ、3年間センリさんのところにならずーといたからね。
ホワイト「次は、どこで会えるかしら？」

それは、またずーと先よ。それでは、次回もお楽しみに

7 怪しき少年

ホワイトがマサトと勝負していた頃ブラックは、ポケモンセンターの裏にいた。

ブラック「ミジュマル、ゾロアーク、チラチーノ出てこい」

ブラックは、3匹のポケモンを出した。

ブラック「久しぶりにお手入れしてやるぜ」

ブラックが1匹ずつ手入れしようとしたときだった。

???「ポケモンの手入れね」

ブラック「誰だ?!」

ブラックがそういうと一人の少年が現れた。

ブラック「もしかして、君も目指してるの?ポケモンリーグ?」

???「まあな」

鈍感なブラックに少年は、そう答えた。

???「自己紹介がまだたな。俺は、ショウ」

ブラック「俺は、ブラック」

ショウ「ブラック、俺と勝負してくれないか?」

ブラック「いいぜ」

こうしてブラックとショウのバトルが始まった。

ブラック「ルールは、1対1の勝負でどうだ」

ショウ「いいぜ」

ブラック「それじゃあ、俺は、ゾロアーク、行ってくれ」

ゾロアーク「アーク」

ショウ「俺は、このポケモンだ。いけー、ツタージャ」

ツタージャ「ツタージャ」

ブラック「ツタージャか。それじゃあ行くぜ。ゾロアーク、イカサマ」

ショウ「ツタージャ、グラスミキサー」

お互いのポケモンの技がゾロアークとツタージャに当たる。

ブラック「やるね〜シヨウ。でも俺は、負けないぜ。ゾロアーク、辻斬り」

シヨウ「ツタージャ、やどりぎのタネ」

ゾロアークの辻斬りにツタージャが当たる、しかしツタージャが放ったやどりぎのタネが見事ゾロアークに当たりゾロアークからHPが少しずつ吸い取られていく。

ブラック「なかなかやるな。ゾロアーク、恩返し」

ゾロアークが恩返しを仕掛けた。

シヨウ「ツタージャ、メロメロだ」

ブラック「!!!?」

ブラックは、驚いて声も出なかった。

ツタージャが放ったメロメロは、見事ゾロアークに当たりメロメロ状態となった。

シヨウ「ツタージャ、連続で蔓の鞭」

シヨウが蔓の鞭をゾロアークに当てていく。

シヨウ「ツタージャ、止めのグラスミキサー」

ツタージャのグラスミキサーがゾロアークに命中しゾロアークは、戦闘不能となる。

ブラック「やるね、シヨウ。少し油断してたぜ、まさかそのツタージャがメロメロを使えるとは」

シヨウ「お褒め頂光栄です」

ブラック「それじゃあ、俺は、この辺で失礼するよ」

ブラックは、ポケモンセンター内に入って行く。

シヨウもポケモンセンターの部屋に入りポケギアを取り出した。

???「もしもし、ああシヨウか何かあったか？」

シヨウ「いえ、ご報告がありまして・・・」

???「何だ？」

シヨウ「あのわれらの計画を邪魔してきたプラズマ団を崩壊させた

少年と出会いました」

???「そうか。それで」

シヨウ「やつは、カントーリーグに出場するためカントーを回るようです。もし彼がわれらの計画を邪魔する可能性があります」

???「確かに。それでやつは、持っていたか伝説のポケモンゼクロムを」

シヨウ「私が見た限りいませんでしたがやつは、きっと持っています」

???「だろうね。そいつは、バカじゃない、人前で伝説のポケモンは、けして出さないだろう」

シヨウ「私もそう思います。これで私の目標が見えました。奴らを倒すのです」

???「それで優勝すれば、われらの名は最強という示しが全世界につくというのか・・・おもしろい」

シヨウ「できるだけ私も必ずバッチを8つ集めてカントーリーグに出場します。それで、元トキワジムリーダーとして何か教えていたければ・・・」

???「うむ、まあ強いポケモンをバランスよく捕まえばそれでいい」

シヨウ「なるほど。やはりそうですね、私もそう思います」

???「あと、珍しいポケモンを見つけたら直ちに捕獲しろよ」

シヨウ「分かっておりますサカキ様」

???「じゃあな、吉報を待ってる」

電話の相手サカキ——ロケット団とボスと会話を終わらせたシヨウ。はたしてシヨウは、一体何者なのか？

8 いざトキワの森でゲットだぜ（ホワイト編）

翌日、ブラックとホワイトは、トキワの森へとやってきた。

トキワの森は、ウバメの森、トウカの森、ハクタイの森、ヤグルマの森と同じく虫、草の宝庫の森であるがその割合は、虫が6割、草が2割5分、その他が1割となっている。ちなみに残りの5分は、世界的にも有名なポケモンピカチュウである。唯一野生として確認が出来てる森として有名だが人前に姿を見せることは、稀でその確率は、小さいものを探すのと同じぐらいの確立である。

その森に入ってしまったホワイトとブラックは、ゆっくりと歩いていた。

ブラック「ここがあ有名な野生のピカチュウが出てくる森か。ゲットしたいぜ」

ホワイト「でも見つかる確立は、糸を針の穴に通すほどの確率よ」

ブラック「そんなのいいじゃんか。俺は、2匹、ホワイトは、3匹と空きが出来るんだ。この地方のポケモンゲットしたいしな」

ブラックは、ホワイトにそう言った。

そのとき草むらが揺れた。

ブラック「ピカチュウか？」

期待するブラックだが草むらから出てきたのは、ピカチュウではなく黄緑色の頭から葉が生えたポケモンであった。

ホワイト「チコリータ！？」

ホワイトは、図鑑をそのポケモンに向けてチコリータと判明した。

チコリータは、草ポケモンでジョウトで最初にもらえる初心者用ポケモンの1匹である。だがその反面、野生としてはほとんど出現しないと言われている。

ホワイト「草ポケモンなら捕まえなきゃ」

草ポケモンが大好きなホワイトにとっては、ゲットしたいポケモンである。

ブラック「草ポケモンならお前に譲るぜ。でないとうるさいしな」
ブラックは、草系一筋のホワイトにそう言った。

ホワイト「それじゃあゲットしてやるわ。ジャローダ、出ておいで」
ホワイトは、チコリータ相手にジャローダを繰り出した。

ブラック「おいおい、チコリーター相手にジャローダはないだろう。
倒したらどうするの？」

ホワイト「大丈夫だって。ジャローダ、グラスミキサー」

ジャローダは、グラスミキサーを放つ。チコリータに命中する。

ブラックは、図鑑の機能のHP表示を見る。これは、アララギ博士
のお父さんが開発したポケモンのHPが表示できる仕組みで敵味方
のポケモンやまた状態異常も表示する優れたものである。

図鑑を見るとチコリータのHPは、HP0の寸前のギリギリライン
である。

ブラック「すごい」

ホワイト「それじゃあゲットといきますか。行くのよモンスターボ
ール」

ホワイトがモンスターボールをアゲチコリータに当たる。

カタカタカタカタカチ・・・カチ

ホワイト「チコリータゲットで超ハッピー」

ブラック「それじゃあ先に進みますか」

嬉しそうなホワイトに対しブラックは、ほっとくように先に進み始
めた。

ホワイト「！ちょっと待ってよブラック」

ホワイトも慌ててブラックのところへ行ったのだった。

8 いざトキワの森でゲットだぜ（ホワイト編）（後書き）

ホワイト「ちよつと作者。何よあの決めゼリフは、もうちよつと言いのなかったの？」

なかったと言えは嘘になるけどね。

ホワイト「もう少しセンスのいい台詞なかったの？」

それじゃあ、「くかも」と「大丈夫」どっちがいい？

ホワイト「それみんな、アニメの2代目と先代のヒロインの決め台詞じゃん全部。パクリするぐらいならまだこの台詞のほうがいいよ」

それじゃあ、納得してもらったところでこの辺でお開きにします。

次回もお楽しみに！

9 いざトキワの森でゲットだぜ（ブラック編）

トキワの森でチコリータをゲットしたホワイトは、上機嫌であった。ブラック「くそ。ホワイトだけゲットなんてずるいぜ。俺だってピカチュウゲットして見せるぜ」

ブラックは、そう心に誓っていたがその日は、結局ピカチュウに遭遇することもなく夜になってしまった。しかしその後ろにポケモンとおぼしき影が1匹がついていつていたのだが、ブラック達は何も気づいていなかった。

ホワイト「今日は、ここで野宿か」

ブラック「なんか久しぶりの野宿だな」

ブラックは、ホワイトが作った料理をやけ食いしてた。

ホワイト「ブラック。やけ食いしないでよ」

ブラック「だってよ。ホワイトは、大好きな草ポケモンをゲットできて俺は、結局ピカチュウどころかいまだにこの地方のポケモンをゲットできてねえんだぜ」

ブラックは、そういつてさらに口の中に食べ物を入れる。

ホワイト「（これは、重症ね。相当）」

ホワイトは、心の中でそうつぶやいた。

その後食後ブラックは、さっさと寝てそしてホワイトは、片付けた後就寝した。

すると寝ているブラックとホワイトにさっきからブラックたちについてきた1匹のポケモンがブラックの寝袋の上に乗るそのまま寝てしまった。

翌朝、ブラックは、何か違和感を感じたため目が覚めて「なんだろう」と思い寝袋の上を見える。するとそこには、体は、小さく尻尾を枕代わりにして寝ていた。

ブラック「なんだ？このポケモンは？」

ブラックは、図鑑を取り出し確認する。

ブラック「え」と。ルリリって言うんだ。結構可愛いポケモンじゃんか」

ブラックは、そう言った時ルリリが目を覚ましブラックに飛びつく。ブラック「おい。このポケモン本当に野生なのか？結構人懐こいな」ブラックがそう言ってルリリは、ブラックのからの空のモンスターボールを見つけてそれにタッチしボールの中に入って行きボールは、すぐに収まった。

ブラック「ルリリゲット？」

ブラックは、なんで自分からゲットされに來たんだろうと疑問に思いつつもまた眠りについてしまった。

9 いざトキワの森でゲットだぜ（ブラック編）（後書き）

ブラック「なんか変なゲットの仕方だな」

まあ、たまには、こんなゲットの仕方もいいじゃないか。

ブラック「それもそうだけど・・・やっぱりピカチュウが欲しい」
まだ言ってるよこの人。

10 悪の組織登場（前書き）

今回は、悪の組織が登場します。もちろんあの組織ですがいつもの3人は登場せず代わりにオリジナルキャラ3人が登場します。

10 悪の組織登場

トキワの森を歩いていたブラックとホワイトは、もうすぐ森を抜け出す寸前まで歩いていた。そんな時突然あたり一面に煙に包まれる。ホワイト「何なのよ、一体？」

ホワイトがそう言ったその時突如音楽が聞こえてきた。

「『何なのよ、一体？』と聞かれたら」

「名乗ってあげるのが当たり前」

「宇宙の破壊を防ぐため」

「宇宙の平和を守るため」

「恋と成熟の悪を貫く」

「お茶目で恋の敵役」

「カミオタイ」

「ナカオタイ」

「シモオタイ」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

3人「君を待っている」

かつこよく決めたロケット団。

ホワイト「ロケット団？」

ブラック「なんだそりゃあ？」

二人は、頭に？マークが立つ。

まあ仕方がない、二人は、イッシュ地方出身のためプラズマ団以外の悪の組織——特にロケット団の情報は無いのが当たり前。

カミオタイ「俺達ロケット団を知らないようだな。お前達」

ブラック「俺達は、カノコタウン出身でプラズマ団以外の悪の組織は知らないからな」

シモオタイ「プラズマ団？ああ、つい先日少年と少女が崩壊させた

あの組織か。しかもカノコじや俺達を知らないわけだ」

ナカオタイ「よし、覚えておけ。俺達は、ロケット団と言って人のポケモン奪い珍しいポケモンをゲットし世界征服を目指している組織だよ」

ホワイト「世界征服!？」

ホワイトは、びっくりする。

ブラック「なら見逃すわけには行かないな」

そういうとブラックは、モンスターボールを二つ投げた。

ブラック「チラチーノ、ミジュマル出てきてこいつらを倒すんだ」

ホワイト「ドレディア、ハハコモリ、レッツゴー」

ブラックとホワイトは、2匹ずつ繰り出した。

カミオタイ「やる気だな。シモオタイ、やっておしまい」

シモオタイ「お任せを。マタドガス、ヘドロばくだん」

シモオタイがヘドロばくだんを発射する。

ブラック「チラチーノ、スピードスター、ミジュマル、水鉄砲」

ホワイト「ドレディア、はなびらのまい、ハハコモリ、きりさく」

4匹のポケモンは、一斉攻撃をしマタドガスは、あっさりやられてさらにその技が三人に当たり飛んでいった。

3人「うわー、やな気分ー」

キラーン

ホワイト「あっさりとやられたね」

ブラック「あれじゃあプラズマ団より弱いかなロケット団って」

ブラックは、そういつてトキワの森を抜け出す。

しかし二人は、このときロケット団を軽視していた、後にロケット団の本当の恐ろしさを知ることによりこのとき二人は、知るよしもなかった。

10 悪の組織登場（後書き）

と言うわけでオリジナルのロケット団員カミオタイ、ナカオタイ、シモオタイでした。ちなみに3人の口上は、無印の頃のロケット団の台詞を少し修正し最後の部分は、バトルフロンティア編のロケット団の台詞をそのままつけました。

11 ポケモンドクタータケシ

トキワの森を抜けたブラックとホワイトは、ニビシティのポケモンセンターいた。

ホワイト「さあ、ポケモンたちを休ませたらジム戦よブラック」

ブラック「よっしゃあ、ここのジムリーダーを簡単に蹴散らしてやる」
ブラックは、イッシュ地方の8つのバッジを持っているためかすごい自信を持っていた。

ホワイト「それじゃあ、ブラック。私は、少し散歩してくるから」

ホワイトは、ブラックにそう言ってポケモンセンターをあとにした。

ホワイトは、散歩ついでにニビジムの情報も集めようとニビジム前に来ていた。

ホワイト「ここね」

ホワイトがそういうとジムの隣に診療所があった。

ホワイト「ニビポケモン診療所？」

ホワイトは、看板を見てそうつぶやいた時一人の少年が出てくる。

ホワイト「ねえ、この診療所は、何なの？」

ホワイトが少年にたずねると少年は、丁寧に答えてくれた。

少年「この診療所は、ニビジムのジムリーダータケシが作ったの」

ホワイト「え！ジムリーダーが！？」

少年「そう、タケシは、2年前シンオウの旅を終えてからニビに帰ってきたときからポケモンドクターの勉強をして去年ポケモンドクターとなって診療所をジムの隣に立てたんだぜ。それにドクターのほかにはブリーダーを勤めていて僕達トレーナーに優しくポケモンの育て方にアドバイスや改善を教えてくれるんだぜ。そして旅に出てからずっとジムリーダーを勤めていたタケシの父に代わって再びジムリーダーの座に座ったんだぜ」

ホワイト「ドクターにブリーダーか。ここのジムのエキスパートは、

何なの？」

少年「このジムは、岩タイプだぜ。特にゴローニャとイシツブテをよく使ってくるぜ」

ホワイト「岩か、なら草マスターを目指す私にとっては、相性が完全に有利ってわけね」

ホワイトは、そうつぶやいた。

ホワイト「（でも油断は、禁物ね）ありがとうね」

ホワイトは、少年にお礼を言ってポケモンセンターに戻る。

そのころブラックは、ポケモンセンターのロビーにいた。

ブラック「暇だな」

ブラックは、そうぼやいた。

そんな時だった。

???「ジョーイさんどうでしょうか？これからお茶しないでしょうか？」

一人の青年がジョーイさんを口説いていた。

ジョーイ「あやそのえ・・・」

青年の口説きにジョーイさんは、困り果てていた。仕方がなくブラックは、イスから立ち上がり青年の元に近づいた。

ブラック「すいませんけど、ジョーイさんが困っているじゃないですか」

強い姿勢で青年にそういうブラック。

すると向こうからポケモンセンターで看板で看護ポケモンとして認定されているラッキーとタブンネがやってきて引っ張っていった。

ジョーイ「ありがとうね、ラッキー、タブンネ」

ジョーイさんがラッキーとタブンネにそう言う。

ブラック「大変ですね、あのナンパ青年」

ジョーイ「いいのよ、いつものことなのよ」

ブラック「いつものこと？」

ジョーイ「彼の名前は、タケシ。ニビジムのジムリーダーを務めな

がらポケモンドクター、ブリーダを副業として持っているカントーでのスペシャリストよ」

ブラック「あの人ジムリーダーなんですか!？」

ジョーイ「ええ、そうよ。でも確かにバトルと医療とブリーダの腕は、確かだけど彼私のように美しい女性には、よくナンパしてくるの。それだけが彼の欠点なのよ、まあ、いつもは、グレックルとタキシ君のラッキーが止めてくれるけどポケモンセンターには、連れて来ないときがあるからラッキーとタブンネが止めに入るのよ。あれでも岩系のジムリーダーかなって時々思うのよ」

ブラック「岩系のジムリーダーか。ポケモンは硬派でジムリーダーは軟派か」

ブラックは、タキシをそう判断した。

ホワイト「ただいま」ブラック

そこにホワイトが帰ってきた。

ホワイト「ブラック、そろそろジムに行こうか、ちょうどポケモンも回復したところだしね」

ホワイトがブラックにそう言った。

ブラックは、さっきのジムリーダーの様子を見ていてなかなか乗気は、なかったけどジム戦が出来るのでいうことでそれを脳の奥にしまいこんだ。カントーに来て初めてのジム戦。

はたして二人は、グレーバッチをゲットできるのか？

11 ポケモンドクタータケシ（後書き）

ブラック「それにしても軟派だったかあのジムリーダー…アニメから2年後経っても変わらないとは…まあ、ポケモンドクターと一流のブリーダーになったと言う点では、すごいけどな」

まあそのぐらいにしないと。何しろベストウィッシュでは、タケシレギュラー降ろされたからな」。

タケシ「言わないでそれだけは…（T-T）」
いたのかよタケシ（汗）

ブラック「それより、俺とホワイト、どっちが先にジム戦するんだ？」

（心配しないのかよブラック）まあ、ホワイトが先かな。相性が一番有利だしね。

ブラック「そうか。それより悪かったな、心配はなくて」
聞こえてたのかよ（汗）それでは、次回もお楽しみに。

12 VS 軟派のジムリーダータケシ（前書き）

今回は、ニビジムでのジム戦×2です。

12 VS 軟派のジムリーダー タケシ

ホワイとブラックは、ニビジムに来ていた。

ホワイ「ごめんください」

ブラック「頼もおおつー!!」

ホワイは、普通にブラック大きい声で叫び扉を思い切り開けてジムの中に足を踏み入れた。

すると一人の白い白衣着た青年がやってくる。

ホワイ「あなたがニビジムのジムリーダー タケシさんですね」

ホワイがそういうと白衣を着た青年——タケシが勢いよくやってきて、

タケシ「自分は、タケシと言います。どうでしょうか、これからお茶でもしませんか？」

ホワイにナンパを仕掛けた。

ブラック「やめんかい、このナンパジムリーダー」

ミジュマル「ミジュー」

ブラックの怒りに代わりに攻撃してくれたミジュマルの水鉄砲は、タケシに直撃して飛ばされた。

ホワイ「何なの、あのジムリーダー!？」

ブラック「きれいな女性を見つけるとナンパの癖のあるジムリーダーだよ。町じゃあ結構噂になっているってジョーイさんが言ってたぜ」

ブラックがホワイに説明する。

タケシ「あいたたたた。また君かよ。何するんだよ」

ブラック「ナンパする方が悪いと思うけど？」

ブラックは、口笛を吹いた。

タケシ「確か君達ジム戦にきたんだだけ？ならどっちらが最初に勝負します」

ホワイ「なら私が行きます」

タケシ「いいだろう」

審判「これよりジムリーダータケシとチャレンジャーカノコタウンのホワイトによるニビジム・ジム戦を開始いたします。使用ポケモンは2体、どちらかのポケモンが全て戦闘不能となった時点で試合終了となります。なお、試合中、ポケモンの交代はチャレンジャーにのみ認められます」

タケシ「美しい女性には、弱いバトルじゃあそんなことはしないぜ」

ホワイト「ありがとう軟派ジムリーダーさん」

審判「それでは、バトル開始！」

タケシ「いっけ、ゴローニヤ」

ホワイト「お願い、ジャローダ」

タケシ「ゴローニヤ、ころがるだ」

ホワイト「ジャローダ、リーフブレード」

ゴローニヤは、ころがるを使ってきたがジャローダがリーフブレードでゴローニヤの動きを止めた。

タケシ「ゴローニヤ！？」

ホワイト「ジャローダ、止めのグラスミキサー」

動きが止まったゴローニヤにグラスミキサーを繰り出したジャローダ。見事命中しゴローニヤは、戦闘不能となる。

審判「ゴローニヤ、戦闘不能ジャローダの勝ち」

ホワイト「まずは、1勝目よ」

タケシ「やるな。しかし次は、そうは、いかなぞ。いっけ、ハガネール」

タケシは、ハガネールを繰り出した。

ホワイト「ハガネール！？」

タケシ「ハガネールは、イワークの進化系だ。本来ならハガネールは、岩タイプじゃないから使わないがジムを甘く見られては、困るからな」

今のタケシは、ナンパで見た姿ではなく岩タイプのような硬派な姿である。

タケシ「ハガネール、アイアンテール」

ホワイト「ジャローダ、リーフブレード」

アイアンテールとリーフブレードが当たった瞬間砂ぼこりが上がる。両者ともダメージを食らう。

タケシ「りゅうのいぶき」

ホワイト「ジャローダ、リーフストーム」

ホワイトは、一か八かでリーフストームを発射した。そしてりゅうのいぶきとリーフストームを押し合いそしてりゅうのいぶきをなんと押し切りハガネールに当たりハガネールは、戦闘不能となる。

審判「ハガネール、戦闘不能ジャローダの勝ち。よって勝者チャレンジャー・カノコタウンのホワイト」

タケシ「やるね。まさかジャローダ一本で負けるなんて、俺もドクターやブリーダーの勉強ばかりしてたからバトルの技術が落ちちゃたのかな？まあいい、負けは負けだ。はい、これがグレーバッチだ」

タケシは、グレーバッチをホワイトに渡す。
ホワイト「ありがとうございます。カントーでの初めてのバッチグレーバッチゲットで超ハッピー」

ジャローダ「ジャロジャロ」

ホワイトのバトルを終えブラックがタケシのところに行く。

ブラック「タケシさん。ジム戦は、明日でいいでしょうか？」

タケシのポケモンは、全て戦闘不能になったので今日のバトルは、無理だと判断するしかしタケシは・・・

タケシ「大丈夫だよブラック。うちには、診療所あるからすぐポケモンを回復するから心配するな」

そういつてタケシは、バトルフィールドを出ていった。

タケシ「おまたせ」

ブラック「はや!？」

まだ1分もしないうちに戻ってきてびっくりするブラック。

タケシ「それじゃあジム戦しようか」

こうしてブラックのカントー初のジム戦が始まった。

30分後

ブラック「チラチーノ、うたうだ」

チラチーノがうたうを使いハガネールは眠ってしまう。

タケシ「ハガネール!？」

ブラック「いまだ、めざめのビンタ」

チラチーノがめざめのビンタを繰り返す。

寝ている相手には、通常の倍のダメージを与えることができる。

そしてチラチーノは、格闘タイプのめざめのビンタは、鋼タイプのバガネールには、効果抜群である。

審判「バガネール、戦闘不能チラチーノの勝ち。よって勝者チャレンジャー・カノコタウンのブラック」

タケシ「まさか、今日は2試合連続で負けるとは……まあいいや、

ブラックこれがグレーバッチだ」

グレーバッチがブラックに渡される。

ブラック「グレーバッチゲットでベストウィッシュ」

チラチーノ「チラチラ」

こうしてブラックとホワイトは、無事にバッチをゲットできた。

そして二人は、タケシと別れてニビジムをあとにした。

13 3番道路でバトル

カントーで初めてのバッチを手に入れたブラックとホワイト。

二人は、2つの目のジムがあるハナダジムを目指して3番道路を歩いていた。

そして今昼ご飯にするとこである。

ホワイト「ブラック、そんなにほう腹ないの」

ブラック「腹が減っては戦は出来ないぞ。たくさん食ってこのあとバトルをするぞ」

張り切ってそう言って飯を食うブラック。

???「あ！ホワイト」

そこに一人のメガネをかけたラルトスを肩に乗せた少年がいた。

ホワイト「あ！マサトじゃない。久しぶり、トキシテイ以来ね」

ブラック「なんだ、知り合いなのかお前達？」

何も事情を知らないブラックは、ホワイトにたずねる。

ホワイト「彼はマサト君。ハウエン地方のトウカシティのジムリ

ダーの息子さんのの」

ブラック「なに?!ジムリーダーの息子!?!」

ブラックは、驚いてイスを立ち上がる。

ブラック「なら勝負してくれ」

そういつてマサトは・・・

マサト「いいよ」

とあっさりOKしポケモン勝負となる。

ブラック「勝負は、2対2でどう?」

マサト「僕はいいいよ」

ブラック「それじゃ俺の最初のポケモンはこいつだ。ミジュマル」

ミジュマル「ミジュ」

マサト「僕はミミロルだ」

ミニロル「ミニ」

ホワイト「それではバトル開始」

ブラック「ミジュマル、水鉄砲」

マサト「ミニロル、避けるんだ」

ミジュマルの水鉄砲をジャンプでかわしたミニロル。

マサト「ミニロル、ピヨピヨパンチ」

ミニロルがピヨピヨパンチを仕掛けてミジュマルに当たる。

そしてミジュマルは混乱状態となる。

ブラック「戻ってミジュマル」

ブラックは、ミジュマルを戻す。

ホワイト「（モンスターボールに戻せば混乱は収まる。さすがねブラック）」

審判やりながら心の中でそう思うホワイト。

ブラック「いつけ、チラチーノ」

ブラックは、チラチーノを繰り出す。

ブラック「チラチーノ、あなをほる」

チラチーノは、穴を掘った。

マサト「氣つけてミニロル」

そう言った時チラチーノが穴から出てきてミニロルに当てる。

マサト「ミニロル、れいとうビーム」

ブラック「チラチーノ、イカサマだ」

ミニロルのれいとうビームを出す前にチラチーノは、イカサマで攻撃しミニロルが倒れる。

ホワイト「ミニロル、戦闘不能。チラチーノの勝ち」

マサト「やるねブラック。次は、君だ。お願いラルトス」

ラルトス「ラル」

ブラック「チラチーノ戻って、もう一回行って来いミジュマル」

ミジュマル「ミニミニミニミミミジュ」

歌舞伎役者のような登場の仕方です。再び出てきたミジュマル。
ブラック「ミジュマル、シェルブレード」

ミジユマルは、ホタチを取りシエルブレードでラルトスに仕掛ける。
マサト「ラルトス、念力だ」

ラルトスは、念力でミジユマルを宙に浮かべさせて地面にたたきつける。

ブラック「ミジユマル!!」

マサト「ラルトス、止めのサイコネシス」

ラルトスは、サイコネシスでミジユマルを攻撃しミジユマルは、ピタリと動かなかった。

ホワイト「ミジユマル、戦闘不能。ラルトスの勝ち」

ブラック「ご苦労ミジユマル。やるな、さすがジムリーダーの息子、実力は確かだな。でも俺は、負けないぜ。チラチーノ、君に全て託す」

そういつてチラチーノを出す。

マサト「ラルトス、念力だ」

ラルトスは、念力を攻撃しチラチーノに直撃する。

しかし・・・

マサト「無傷!?!」

ホワイト「(チラチーノがラルトスの念力をまともに受けて無傷なんてありえ・・・あ!まさかあのチラチーノ!?!)」

ホワイトは、状況を見て何かを察知した。

ブラック「チラチーノ、行くぞ。ナイトバースト」

いきなりの大技が炸裂しラルトスは、まともに受けて倒れてしまう。
ホワイト「ラルトス、戦闘不能。チラチーノの勝ち。よって勝者ブラック」

ブラック「よっしゃ」

マサト「そのチラチーノすごい。ラルトスの念力をまともに食らって無傷なんて」

ブラック「あははは。マサト、こいつは、チラチーノじゃないぞ」
マサト「え!?!」

ブラックの発言に驚くマサト。するとチラチーノの体に変化をし黒

毛のキツネのようなポケモンになる。

マサト「あーーーーー！？ゾロアーク！？」

ブラック「驚いただろう」

マサト「すっかり騙されたよ僕」

ブラック「でもいい勝負だったぜ」

マサト「うん。それじゃあ僕は、おつきみ山のふもとにあるポケモンセンターに行くよ」

ホワイト「また会おうねマサト」

ブラック「また会ったら勝負しようぜ」

ブラックとホワイトは、手を振りながらマサトを見送った。

二人の旅はまだまだ続く。

13 3番道路でバトル（後書き）

ハアハ

ブラック「どうしたんだ作者？ため息ついて」

実は、今日の仮免の試験技能は、合格したけど学科で落ちちゃったんだ。

ホワイ「学科勉強しないから悪いのよ」

反省しています（T-T）

ブラック「次落ちると小遣いが減らされるぞ作者」

プレシャーかけるな二人そろって（怒）

ブ・ホ「すいません（汗）」

14 おつきみ山

2つ目のジムがあるハナダシティに向かい旅をしていたブラックとホワイトはおつきみ山のポケモンセンターの前までやってきた。

ブ・ホ「お願いしますジョーイさん」

ジョーイ「わかりました」

こうしてブラックとホワイトは、ポケモンをジョーイに預けた。

ジョーイ「それよりあなた達おつきみ山を通るなら用心しなさいよ」

ホワイト「それはどう言う事ですか？」

ジョーイ「最近ロケット団がおつきみ山で見かけるのよ」

ブラック「ロケット団!!」

ジョーイ「ええ。目的がなんだかわからないけどとにかく用心してね」

ホワイト「どうするブラック？」

ブラック「どうせあのバカ3人じゃないのか？」

バカ3人とは、前にトキワの森で出会ったシモオタイ、ナカオタイ、カミオタイの3人である。

ホワイト「そうね。あの3人は、確かに弱かったけどロケット団は、あいつらだけじゃないと思うよ」

ブラック「まあ、ともかくポケモンたちを休めてからその後のことは、考えようよ」

そう言つてブラックは、ロビーのソファに座るのであった。

それから1時間後、ポケモンたちが回復し早速おつきみ山の洞窟に入って行くブラックとホワイト。

ブラック「意外と複雑だなおつきみ山の道は」

ホワイト「そうね、それよりこの山には月の石、化石が採れるらしいわよ」

ブラック「月の石に化石だって!？」

ブラックは驚いてホワイトに言う。

ホワイト「そうよ。ジョーイさんの話によるとおつきみ山の由来が月の石が発見されたのが由来らしいの。さらに最近化石が稀に発掘されることでさらに有名になったのよ」

ブラック「へえ」

そうブラックが言ったときだった。

???「誰だそこに入るのは!？」

黒い服を着たRマークをつけた男が複数現れた。

ブラック「一体何者なのあなたたち」

???「我らはロケット団だ。カミオタイ様、ナカオタイ様、シモオタイ様の邪魔はさせません」

団員B「みなのものであえであえ」

まるで時代劇風に言う団員に言われて沢山のロケット団の下っ端が登場する。

ブラック「全員たたき倒してやる。いつけ、チラチーノ、ミジユマル」

ホワイト「シャローダ、ハハコモリ」

ブラックとホワイトは、繰り出して戦闘態勢をとる。

ホワイト「ほら、あなた達もポケモンだしなさい」

団員A「悪いけど我らは、下っ端の下っ端でポケモンを持ってない集団だ」

偉そうに団員の一人が言う。

団員C「しかし、我らはポケモンがいなくても武器はある。これでお前らを退けてやる」

ブラック「どうしようもない下っ端達だ」

ホワイト「そうね。早いところ片付けましょう」

ブラック「そうだな。チラチーノ、10万ボルト、ミジユマル、水鉄砲」

ホワイト「シャローダ、リーフストーム、ハハコモリ、リーフブレード」

二人の指示に4匹のポケモンが一斉攻撃し下っ端達に当たりそして飛ばされる。

下っ端達「うわ〜カミオタイ様、ナカオタイ様、シモオタイ様お許しを」

キラーン

ホワイト「さあ、先に進みましょう」

ブラック「そうだな」

こうして先に進むホワイトとブラック。

下っ端「カミオタイ様、ナカオタイ様、シモオタイ様、大変です」

シモオタイ「どうしたんだ？」

下っ端「二人の少年少女が下っ端の下っ端が武装軍団を全員倒しこちらへ歩いてきます」

ナカオタイ「なんだと!？」

カミオタイ「われらの邪魔をするやつは、俺たちが倒してやる」

シモオタイ「皆の者付いて来い」

こう言ったカミオタイ、ナカオタイ、シモオタイだったが・・・

ブラック「見つけたぞロケット団」

3人「げ!お前達は!!!」

ホワイト「ロケット団、ここに何しに来たのよ。答えなさい」

シモオタイ「『答えなさい』と聞かれたら」

ナカオタイ「名乗ってあげるのが当たり前」

カミオタイ「宇宙の破壊を防ぐため」

シモオタイ「宇宙の平和を守るため」

ナカオタイ「恋と成熟の悪を貫く」

シモオタイ「お茶目で恋の敵役」

カミオタイ「カミオタイ」

ナカオタイ「ナカオタイ」

シモオタイ「シモオタイ」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

3人「君を待っている」

ブラック「さつさと答えるロケット団」

カミオタイ「答えるわけないだろう」

ナカオタイ「そうだよ。我らがここにある月の石と化石そしてピッピを採りに来たなんて絶対に言わないぞ」

ホワイト「言ってるじゃないの（汗）」

シモオタイ「とにかく前回は、よくもやってくれたな」

カミオタイ「今度こそお前らのポケモンをもらってやる。いっけ、ハブネーク」

ナカオタイ「アーボック」

シモオタイ「マタドガス」

ホワイト「なら、ハハコモリ、チコリータ」

ブラック「ミジュマル、ゾロア——」

ブラックがミジュマルとゾロアークを繰り出そうとしたときモンスターボールから1匹のポケモンがでてきた。

???「ルリルル」

ブラック「ルリリ!？」

そう勝手に出てきたのはルリリである。

ルリリ「ルリルルル」

ルリリは、ブラックに何かを訴えている。

ブラック「もしかしてバトルしたいのか？」

そうルリリにたずねると大きく頷いた。

ブラック「よし、なら、行つて来い」

シモオタイ「ルリリだと! なめやがって行くぞ、ナカオタイ、カミオタイ」

ナカオタイ・カミオタイ「OK」

3人ともルリリをバカにしたときルリリは水のようなものを出しハブネークたちにかける。

ナカオタイ「なんだ今のは？」

シモオタイ「痛くもかゆくもないぞ」

カミオタイ「ハブネーク、ポイズンテール」

ホワイト「いけない！ハハコモリ、チコリータ、葉っぱカッター」

ハハコモリとチコリータは、葉っぱカッターを繰り出すが毒タイプのハブネークには効果は薄いと思われたが・・・

ハブネーク「ハブ」

なんと大ダメージを与えた。

シモオタイ「なんだと！毒タイプりハブネークが草タイプに押されただと」

カミオタイ「一体どうなってるんだ！？」

混乱するカミオタイ。

ブラック「そうか！ルリリ、さっき出した技は、みずびたしだな」
ルリリ「ルリリ」

ナカオタイ「みずびたしだと！？」

ナカオタイが驚いたと言う。

みずびたしとは、相手をみずタイプにするちょっと変わった技である。そのため出しているポケモンは毒タイプでもみずびたしを使つたせいで水タイプとなったのだ。

ホワイト「ということは・・・」

ブラック「ハブネークもマタドガスもアーボックもみずびたしに当たって今は、水タイプってこと」

カミオタイ「それがどうかしたのかよ」

ナカオタイ「タイプは、代わっても戦況は俺達の方が有利だよ」

シモオタイ「みんななかかれ」

ホワイト「ハハコモリ、リーフブレード、チコリータ、マジカルリーフ」

リーフブレードとマジカルリーフがハブネークたちに当たった。みずびたしで水タイプにされた以上草タイプの技は、効果抜群である。そして飛んできたポケモン達にカミオタイ達と下っ端達が当たり空

へ飛んで行く。

3人・下っ端達「やな気分」

キラーン

ブラック「ざまあみろ」

ホワイト「それにしてもそのルリリすごいわね、みずびたしを覚えてるなんて」

ブラック「それより先へ進もうぜ」

ホワイト「ちよつと待ってよ」

こうしてロケット団達を退けたブラックとホワイトは、先へ進むのであった。

15 勧誘と謎の男

おつきみ山の洞窟の中を歩いているブラックとホワイトは、少しひと休みしていた。

ホワイト「そろそろ行くわよブラック」

ブラック「はいよ」

そういつてブラックとホワイトが歩き出した時。

青年「ちよつとそこのお二人さん」

ホワイト「私たちのことですか？」

青年「そうだよ。ところで二人とも強そうだね。どうかなうちの組織に入らないか？」

ブラック「組織だと!!」

青年「先日マサラ出身の少年をハナダでスカウトして快く入ってくれたんだ。君達も入らない？」

ホワイト・ブラック「結構です」

二人は、もちろん断った。

ホワイト「あなた、ロケット団でしょ？」

青年「なぜわかった!!」

ブラック「バカだね」胸元に「R」のマークがついてるぞ」

青年「あ!しまった!しかし知っているなら早い入りたまえ」

ホワイト「結構です」

ブラック「正義感の強い俺らが誰が悪の道へと入るかよ」

下っ端「・・・なら力ずくで入れてやるー!アーボック、毒針だ」

ブラック「ミジュマル、水鉄砲」

ホワイト「ジャローダ、グラスミキサー」

一斉に出し技を指示する両名。

ホワイト「ジャローダ、避けてつばめがえし」

ブラック「ミジュマル、シエルブレード」

2匹の攻撃にアーボックはダメージを受ける。

下っ端「負けるなアーボック。意地でもこいつらを仲間に入れるんだ」

ホワイト「ポケモンを道具みたいにするやつは」

ブラック「成敗してくれる」

ホワイト「ジャローダ、くさのちから」

ブラック「ミジュマル、みずのちから」

ジャローダとミジュマルの合体技がさくれつする。合体技は、普通の技と違い組み合わせによってタイプが違ってくる。草と水の場合は、草タイプのわざとなりさらにしばらくの間相手のポケモンのすばやさを下がるのだ。その技を受けたアーボックだが毒タイプのためあまりダメージはないと思うが実は急所に当たりしかも勢いよく下っ端に当たり飛んでいった。

下っ端「うわー！！やな感じ」

ブラック「一昨日おとといきやがれ」

その時1個の岩が落ちてきた。そこにちょうど若い男性がいた。

ホワイト「あ！危ない話。ジャローダ、リーフストーム」

落ちてきた岩に向かってリーフストームを発射するジャローダ。

岩は、粉々になった。

ホワイト「大丈夫ですか？」

男性「ああ大丈夫だ。それより君達はすごいね。あのロケット団を倒すなんて」

ブラック「そんなことないですよ。相手が弱かっただけです」

ホワイト「ところでおじさんは、どうしてここにいますか？」

ホワイトは、男性に尋ねた。

男性「実は、あの男に私も勧誘されて断ったらポケモン出してきて慌てて逃げてそこに隠れてたんだ。まさか岩が落ちてくるとは思いもしなかった。感謝するよ」

ホワイト「いえいえ、そんなことないですよ。どうぞ頭上げてください」

男性「そうだ！君達にこれをくれよう」

男性は、2つの石を渡した。

男性「これは、光の石とねっこの化石だ。受け取りたまえ」

ブラック「そんな受け取れませんか」

男性「いいんだ。これは、私からのほんの気持ちださあ、受け取ってくれ」

ホワイト「わかりました。でも一方的にもらうなんて私のしょうに合いませんからこのふたのカセキを受け取ってください」

男性「ほうふたのカセキか。珍しいもの持ってるもんだね君は」

ホワイト「私は、草ポケモンしか目にないのでこれは、ちょうど必要だったもんで」

男性「そうか。わかったこれはありがたくもらっておこう」

ホワイト「それでは、私たちは先急ぎますので」

男性「そうだ！君達の名前、聞いていなかったな」

ホワイト「あ！すいません。私は、ホワイト。草ポケモンマスターを目指しています」

ブラック「俺はブラック。正義感の強いポケモンマスターを目指しています」

そう男性に告げて去って行った。

そして1時間後ようやくおつきみ山を出た。

ブラック「抜けたあああッ！！！」

ホワイト「これでもう少し歩けば今日中にハナダに着くわ」

ブラック「よし。ハナダまでレッツゴー」

ホワイト「待つてよ」ブラック「

そういつて走り出した二人だがホワイトは、心の中であることを思った。

ホワイト「（・・・あつ！そういえば、おじさんの名前聞いてなかったわ・・・まあいいか。またどこかで会えそうな気がするし）」

ホワイトは、そう心の中でささやきながらブラックを追いかけていった。

その頃ニビ方面へと続くお月見山の洞窟内部にブラックとホワイトと別れた男性は、立ち止まっていた。ブラックとホワイトの別れ際の台詞を思い出しながら・・・

男性「ポケモンマスターに草ポケモンマスターか・・・ククク・・・」

次の瞬間、男性の笑い声が洞窟響いていく。それにはどこか、様々な感情を抱いているような暗く、不気味な底知れないものが伺えた。???「何か面白いことでもあったんですか？」

男性「お！シヨウか？随分遅く来たな」

シヨウ「申し訳ございません。珍しいポケモンの捕獲やジムそれに例の物を探すのに時間を費やしてしまいました」

男性「まあいい。お前は、他の団員と違ってホントよく任務をこなしている。そのぐらいのことなら大目に見よう」

シヨウ「ありがたき幸せに存じます」

男性「それで例の物は見つかったのか？」

シヨウ「もちろんです」

シヨウは、そう言ってアターシukeースを男性に渡す。

男性「それよりさつき例の二人に会ったぞ」

シヨウ「ええ。見ていましたよ遠くから」

男性「本当は、隠れながら観察してたがまさか助けられるとは思いませんでした。それにあのホワイトっていう少女私のお礼にしように合わないからと言ってふたの力セキをくれきたわ。フフ、本当の私を知らないくせに、愉快でたまらなかったよ」

シヨウ「・・・」

男性「まあ、そのおかげでふたの力セキをゲットできた。本来ふたの力セキは、イッシュしか採れない化石でなかなか見つからないしれものだ。それを易々と私に渡すとは・・・正体を知ったときのあの子の顔が見たいよ」

シヨウ「それではボス。私は、次のジムがあるハナダへ向かいます」
男性「そうか。また何かあったら報告したまえ。私の指示がないと

きはジム戦なりバトルなり捕獲なり好きにするがよい」

シヨウ「心得ましたサカキ様」

サカキ・・・ホワイトが聞きそびれた、男性の名前だが聞かなくて正解だったみたいだ・・・なぜなら彼の正体は、ロケット団のボスである。

そしてシヨウは、おつきみ山の洞窟を先に進み始めてサカキは、どこかへ姿を消したのであった。

15 勧誘と謎の男（後書き）

次回は、ハナダに入りしたブラックとホワイト。二人は、ハナダジムへ直行する。果たしてどんなことが待ち受けているのか？そしてなんとあの少年も登場します。

16 ハナダのカップル（前書き）

ホワイト「ねえ作者。このタイトル何なの？まさかとは思うけど・・・」

そのまさかだよホワイト。

ホワイト「本当にあの二人をカップルにしたいのね作者」

当たり前だろう。さて、気になる人は本編をご覧ください。

16 ハナダのカップル

ハナダに到着したブラックとホワイト。

ブラック「ハナダに着いたぞー！ジム戦行くぞー！！」

ブラックは、はしやぎながらハナダジムへ走り出す。

ホワイト「ちよつとブラック！？」

ブラックを追いかけるホワイト。

ハナダジムは、走ってそんなにかかることなく到着したが・・・

ブラック「えーーーーー！！！！定休日！？」

ジムは、お休みであった。

ホワイト「仕方がないわよ。ジムも年中無休でやってるわけじゃないし、今日のところはポケモンセンターへ行きましょう。私なんだから眠くてしょうがないわ」

ブラック「いいよ。俺は、そこらへん散歩してくるよ」

ホワイト「そう？なら私は、ポケモンセンターに行くわ」

そういつてホワイトは、ポケモンセンターに向かいブラックは、街中を散歩しに行った。

散歩していたブラックは、ハナダの北側のあり人気がない場所に来ていた。

ブラック「よし。ここなら誰も見ていないし絶好の場所だ」

そう言うブラックは、全てのモンスターボールを投げる。

「チラー」

「アーク」

「ミジュ」

「ルリリ」

「・・・・・・」

ブラックは、チラーノ、ゾロアーク、ミジュマル、ルリリ、ゼクロムを出す。

ゼクロムは、無口であるがこれは、あまりなきごえ出さないようにブラックがしつけておいた。人気のなくても遠くでゼクロムのなきごえを聞かれるのをブラックが嫌ったのである。でもゼクロムは、無口だが・・・

ゼクロム『ブラックよ。なぜこんな人気の場所に来て私を出したんだい？』

そうゼクロムは、テレパシーを使えるのだ。

ブラック「何故って？たまには外に出さなきゃあかわいそうだし、それにここなら人気がありませんから君を出すのに絶好の場所だったから」

そう言ったブラックは、ポケモンフーズを取り出す。

そして分けたポケモンフーズをミジュマルたちに渡し4匹は、勢いよく食べ始める。

ブラック「ゼクロム。君も食べな」

ブラックは、ゼクロムに向かって笑顔で言う。そしてゼクロムは、ポケモンフーズを食べる。

その時。

「なんと！ゼクロムじゃないか！」

その声にゼクロムは、もちろんミジュマルたちやブラックも反応した。

ブラック「誰だ！！」

ブラックやミジュマルたちは、戦闘態勢をとる。

「待て待て、わては、怪しいもんじゃないわ」

ブラック「怪しいものじゃなきゃ誰なんだ」

「わては、マサキ。ソネザキ マサキと言うポケモン研究員や」
ブラック「研究員がどうしてここに？」

マサキ「最近こちら辺にロケット団が出没して優秀なトレーナーを探してロケット団に入れようとしていると聞いて見回りしてたんや」
ブラック「そういえばこの間あった団員が「マサラ出身の少年をハナダでスカウトして快く入ってくれたんだ」って言ってたな」

マサキ「あ！まさかあの少年か！」

ブラック「知っているんですか！？」

マサキ「まあ、この間ちよつとわけあって助けてくれた少年やけど、まさかあの少年がロケット団に入っただとは信じられへん」

ブラック「それよりこのことご内密にしてもらえないですか？」

マサキ「もちろんや。わいもゼクロムの姿いつぺん見たかたしな。それよりあんたこれ受け取ってもらえんかいな？」

そういうとマサキは、モンスターボールからイーブイを出す。

マサキ「こいつは、イーブイといって、いろいろなポケモンに進化する珍しいポケモンなんや」

ブラック「いろいろなポケモンにね」

マサキ「せいや、雷の石使えばサンダースに水の石を使えばシャワーズに炎の石を使えばブースターになつき度が高く昼間に進化するとエーフィに同じくなつき度が高く夜に進化するとブラッキーにこのついた特別な岩に触るとリーフィアに特別な氷の岩に触るとグレイシアに進化するんや」

ブラック「確かに・・・」

ブラックは、ポケモン図鑑を見ながらそう言う。

マサキ「そいつは、ポケモン図鑑じゃないか！？」

ブラック「これですか？アララギ博士からもらった図鑑です」

マサキ「アララギ博士という事は、あんたイツシュ地方から来たのか？」

マサキの問いに頷くブラック。

マサキ「まあそれはいいとして受け取ってくれるよな？」

ブラック「ええ、いいですけど・・・どうしてまた？」

マサキ「実は、わいイーブイをたくさん飼っててな〜でも少し多く飼い過ぎちゃて捨てるわけにもいかないからこうやって優しいトレーナーたちにあげてるんや」

ブラック「そうなんですか。それだったら受け取ります」

マサキ「ほんまか！それは助かるわ」

マサキは、イーブイをブラックに渡す。

ブラック「イーブイゲットだ」

こうしてブラックは、新たにイーブイを仲間に入れた。

マサキと別れたあとブラックは、ハナダの岬近くまで来ててゼクロム、ゾロアーク以外の小さいポケモンたちを外に出していた。そんな時ルリリが勝手にどこか行きミジュマルがそれを止めようとするがすばやくて捕まえることが出来ずにいたが階段のところであろうやく捕まえた。

ブラック「ダメじゃないかルリリ」

ルリリを叱るブラック。するとミジュマルがブラックの肩をたたき指を指す。そこには二人のカップルがいた。

ブラック「何してるんだあの二人？」

恋愛にもものすごく鈍感なブラックは、わかるはずもなかった。

「??？」あれから2年が経つね」

「??？」ああ」

「??？」ねえ覚えてる？あんたがイツシュから帰ってきたとき真っ先にあたしに愛に来てあたしに告白してくれたこと」

「??？」覚えてるよ。お前のお姉さんたちが旅行行くと言う事でハナダのジムに戻らなきゃならなくなった。あん時お前に告白しようとしたけど結局気持ちを伝えられずに別れてしまった。それからお前に何度も告白しようとしたけど結局伝えられずシンオウ、イツシュとお前と会う機会がなくなってホント俺は、どうしようかと悩んでいたけどデントやタケシのおかげで今度こそ告白しようとお前のジムに行き全てを伝えてそして受け入れてくれたこと今でもうれいぜ」

「??？」あたしもよ。何しろずっとあんたを待っていたからね」

「??？」そのあとお前のジムに住み始めてお前とジムを手伝い始めてそしてお前の負担を減らそうと俺がジムリーダーやったりしたな」

???「うれしかったわよあたし。でもジムリーダーとしては、まだまだね」

???「そう言うなよ」

???「ねえ・・・今でもあたしのこと愛してる?」

???「もちろんだぜ」

少年がそう言うのと少女が笑顔になる。

それを遠くから見ていたブラックだが・・・

ブラック「一体何をしてるんだろう?それよりあの子がハナダのジムリーダーか」なら早速ジム戦を申し込もう」

空気が読めないブラックは、立ち上がり二人のもとへ行こうとする。もちろん、ミジュマル、ルリリ、さらにチラチーノが止めに入るが小さいポケモンにそんな力がなく二人のもとへ行く。それは、ちょうど二人がキスしようとしてた時だった。

ブラック「すいません。あなたがハナダのジムリーダーだな。ジム戦を申し込みに来ました」

まったく空気の読めないブラック。

もちろん二人——特に少女の怒り心頭する。まあムードぶち壊せば誰だって怒るのは当たり前である。

???「もう!なによりいきなりあらわれてっ!アンタみたいなのをなんて言うか知ってる?オ・ジャ・マ・ム・シって言うのよ!!!!!!」

少女の怒りにブラックは、土下座する。

ブラック「ご、ごめんなさい」

懸命に謝るブラック。

その時イッシュのバッジが落ちてきた。

???「あら?あんたのバッジつてもしかしてイッシュのジムバッジ?」

少女の言葉にブラックは首を立てに振る。

???「君もイッシュを旅にしたのか?」

ブラック「そうですけど・・・」

「???」カスミ。許してやったら、こんなに頭下げて謝ってるし・・

カスミ「サトシがそう言うなら許してあげるわ」

サトシ「行こうかカスミ」

サトシがそう言うときカスミは、階段を降り始める。

カスミ「あ！あんた、確かジム戦やりたっていたわね。なら明日ハナダジムにきなさいよ！相手してあげるから！それとあんたの言うとおりあたしがハナダジムリーダーカスミよ」

そう言うときカスミは、サトシのもとへ走り出す。

ブラック「帰ろうかミジュマル、チラチーノ、ルリリ」

そういつてブラックは、ポケモンセンターに戻って行った。

16 ハナダのカップル（後書き）

ブラック「怖かった、あのジムリーダー」

あのムードで割り込んだら誰だって怒るよ。

カスミ「作者のいうとおりよ」

げ！出たー！！！！

カスミ「あたしは、お化けじゃないよ」

サトシ「それより作者。あのシーンポケットモンスターHG・HHのハナダ岬に始めて訪れた時のエピソードを少しアレンジして作つたな」

もちろんです。あのシーンは、俺のお気に入りですから。

ブラック「次回は、いよいよジム戦だな」

まあそうなるな。

サトシ「とにかく終わらせようか？」

カスミ「そうね」

サトシ「それじゃあ、次回もポケモン」

サトカス「ゲットだぜ」

17 ジム戦はタッグバトル！？

ここはハナダシティのハナダジムの入り口前。

概観はやはり立派な造りだった。

ジム自体の敷地面積がかなり広い上、同時に兼業されているハナダ水族館の存在も忘れてはいけない。

沢山の人の波が広まっている。

とは言っても大半の人々の目的はハナダの水族館だ。

美しく、珍しい水ポケモン達との戯れと交流を望んでいる人々の群れは今日もここ、ハナダシティの水族館へと足を運ぶのだ。

ブラック「ひえ、凄い人の数だな」

ホワイト「うん・・・、でもほとんどの人が水族館の方の入り口に並んでるみたいだけど、あ、ブラック！ここに何か書いてあるよ」
あまりの人の多さにただ、呆然と眺めていたブラック。

彼の隣ではホワイトが何やら一つの案内の張り紙を指差している。

『ハナダジムジムリーダー カスミ・サトシ 運営時間9：00～13：00 休日、祝日はお休みとさせて頂きます。月・水・金はカスミが火・木・土はサトシがジム戦をいたします』
それはそんな内容の張り紙だった。

ブラック「日替わりでジムリーダーが変わるんだ」。珍しいジムだな」

ホワイト「今日は、月曜日だからカスミさんが相手ね」

そう言うブラックが苦笑する。実は、昨日のことをホワイトには、喋ってなかった。

ホワイト「何してるのよブラック。早速ジム戦よ」

ホワイトは、機嫌よくハナダジムへと入っていく。ブラックは、あのジムリーダーに顔を合わせたくないがここは、ジムバッジをゲットするため嫌々そうにジムはいる。

ハナダシテイ、ジム内。

時刻はもう9時を回ろつかという時間帯だった。

カスミはジムの入り口を開こうと玄関口にやって来ていた。

カスミ「ふう、そろそろジムも開かないとね。まーったく、サトシ
ったらいくら今日がジム戦を務める日じゃないからって水中プール
で泳いでるんだもん。少しはこういうことを手伝ってくれてもいい
のにな。それにしても昨日、どんだ邪魔が入ってムードをぶち壊し
たあのオジャマ虫、ジムに来たらバトルでギタングタンにしてやる
わ」

とぶつぶつ愚痴と昨日の件を零しつつも玄関入り口の戸を開いた。
すると、

ホワイト「あ、すみません、もしかして・・・ジムリーダーのカス
ミさん、ですよな？」

カスミ「え？あ、はい、そうですけど」

入り口の門を開くとカスミの視線には二人の人物が目映る。
女の子と女の子の後ろに男の子が隠れている。

歳のには自分とさほど変わらないような二人にも見えた。

カスミ「あ、もしかして挑戦者の方ですか？」

ホワイト「はい、そうなんです。どうぞ、今日は、よろしく願
いします。それよりブラック後ろにいないで顔をこっち向けなさい」
そういつて半無理矢理に顔をこっちへ向けてカスミと目が合う。

カスミ「あー！ー！ー！！あんたは、昨日のお邪魔虫！！」

カスミが大きい声でそう言う。

ホワイト「ブラック。昨日このジムリーダーと何かあったの？」

ブラック「あ、いや、実は、昨日岬でたまたまジムリーダーが少年
と二人きりのところを見つけてジム戦お願いしようとしたら怒られ
て・・・」

説明するブラック。

ホワイト「ブラック、あんたってやつは、どこまで鈍感なのよ。あ
とで説教よ」

笑顔でブラックに言うホワイト。それが逆に怖いと思い始めるブラックであった。

ブラック「それより、ジム戦に来たからには、俺が最初にやるぜ」
ホワイト「なに言ってるのよジム戦は、レディーファーストよ」

ブラック「前は、お前が最初にやっただろう。今回は、俺からだ」
ホワイト「いいや、私よ」

カスミ「二人ともケンカしない」

カスミによってブラックとホワイトのケンカが止まる。

カスミ「しょうがないわね」よし。あなた達二人と試合をするわ」
ブラック「え、それって・・・」

カスミ「ええ、察しがいいみたいね」

こちらの意図を悟ったようなブラックを見て、カスミは言う。

カスミ「つまりは・・・、”タッグバトル”って言うのはどう？」

二人「タッグバトル・・・！」

同時に声を上げるブラックとホワイト。

ホワイト「それは、好都合だねブラック」

ブラック「ああ。こちらとしても是非お願いしたいです、出来るものなら！」

カスミ「判ったわ。じゃあ、今回は特別にタッグバトルでのジム戦という事で、ところで自己紹介がまだだったわよね。あたしがこのハナダジムのジムリーダー、カスミ。あ、そうだ、あなた達の名前教えてくれる？」

簡単に自己紹介を済ませ、挑戦者の二人の名前を聞いてみるカスミ。
ブラック「俺は、ブラック。カノコタウンからやってきました」

ホワイト「私は、ホワイト。草ポケモンマスターを目指しています」
カスミ「よろしくね。オジャマ虫さんにホワイトちゃん」

ブラック「お、オジャマ虫って・・・」

カスミ「二人ともイッシュ出身という事は、イッシュ地方のポケモンもいるのね」

ホワイト「それは、もちろんよ」

カスミ「あと私は『さん』付けとかはいいいから。歳だつて見たところ、君達とそんなに変わらないみたいだし、タメでもいいよ」
これには思わず笑みが零れるホワイト。

ホワイト「はは、わかりました、宜しく、カスミ！ところで、タッ
グバトルつて事は・・・？」

ブラック「もしかして・・・もう一人のジムリーダー！？」

カスミ「ええ、そうよ。火・木・土以外は、あいつは、ジムの手伝
いしてるんだ。さあ、ついて来て、案内するわ！」

そういわれてついていくとそこは、プールサイドであつた。

そこには、水系ポケモンや水系以外のポケモンそしてプールの中に
一人の少年が泳いでいた。

カスミ「サトシ」。話があるのよ、ちょっと来てくれない？」

そういうと少年——サトシは、泳いできてカスミのもとへやってく
る。

サトシ「なんでカスミ？」

カスミ「実は、訳あつてこの二人と一緒にジム戦することになった
の。だからサトシ、私とペア組んでくれない？」

サトシ「もちろんカスミと組むなら断る理由なんてないぜ」
そういうとうれしい顔をするカスミ。

ホワイト「二人とも恋人なんですか？」

カスミ「ええ。そうよ」

サトシ「それじゃあ、始めるかカスミ」

ホワイト「ブラック、私たちも本気で行くよ」

カスミ「私たちの愛の力見せてあげるわ」

ブラック「俺たちのポケモンたちのちから見せてやろうぜ」

こうしてジム戦が始まる。

17 ジム戦はタッグバトル!? (後書き)

今回はここまで。

ホワイト「えー!!」

カスミ「なんでこんなところで終わるのよ」

まあまあ。それより次回は、ハナダジムタッグバトルよ。

カスミ「愛の力で勝って見せるわ」

ホワイト「私たちだって負けないわ」

気合が入ったところでこの辺でお開きといたします。次回もお楽しみに〜

18 ホワブラVSサトカス タッグバトル（前編）

ハナダジムのフィールドにサトシとカスミ、反対側にホワイトとブラックが立つ。

???「今日は、家でくつろごうと思ったけど、まさか審判に出されるなんて」

カスミ「サクラ姉さん。ちゃんとしてよ、審判やる人がうちには、姉ちゃん以外いないんだから」

サクラ「はいはい。それでは、これよりジムリーダー・カスミとサトシとチャレンジャー・カノコタウンのホワイトとブラックによる、ハナダジム・ジム戦タッグバトルを開始いたします。使用ポケモンは1人3体ずつの計6体のフルバトルで、どちらかのポケモンが戦闘不能となった時点で試合終了となります」

カスミ「サトシ、私達の愛の力をあの子達に見せるのよ」

サトシ「もちろんだぜカスミ」

ブラック「あのジムリーダーにオジャマ虫呼ばわりされてるけど、このバトルに勝ってオジャマ虫じゃないこと証明してやる」

ホワイト「それになんだかあの二人バカップルみたいだし、この勝負負けられないわ」

サクラ「それでは、バトル開始」

こうしてハナダジムのタッグバトルが始まった。

サトシ「ブイゼル、君に決めたっ！」

カスミ「行くわよっ、マイステディ！」

サトシは、ブイゼル、カスミは、サニーゴを繰り出した。

ブラック「水タイプで来たか。なら俺は、チラチーノ」

ホワイト「草ポケモンにとって水は、絶好の獲物よ。ドレディア、レッツゴー」

ブラックは、チラチーノ、ホワイトは、ドレディアを繰り出した。

ホワイト「ドレディア、はなびらのまい」

ブラック「チラチーノ、10万ボルト」

ブラックとホワイトは、水タイプに相性のいい電気と草タイプの技を出す。

サトシ「ブイゼル、アクアジェットで避けてソニックブーム」

カスミ「サニーゴ、トゲキャノンよ」

そう指示するとブイゼルは、はなびらのまいをかわしソニックブームをチラチーノにサニーゴは、トゲキャノンでドレディアに攻撃し当たる。

ブラック「負けるなチラチーノ、サニーゴに向かってうたう」

チラチーノは、サニーゴにうたうを使いサニーゴは、寝てしまう。

カスミ「サニーゴ!？」

ブラック「それからめざましビンタだ」

チラチーノは、めざましビンタを繰り返す。

めざましビンタは、相手が「ねむり」の時、ダメージが2倍になるが、「ねむり」は治るというリスクもある。またこれを出したのは、サニーゴは、水と岩タイプ2つ持っている。岩には格闘タイプのめざましビンタは効果抜群の上「ねむり」のときは、ダメージは、さらに2倍と大ダメージは、避けられない。

ブラック「もらった!」

サトシ「ブイゼル、チラチーノを退ける、れいとうパンチ」

サニーゴを守るようにブイゼルがチラチーノに向かってれいとうパンチを繰り返す。

ホワイト「そうは、行かないわ。ドレディア、はなびらのまい」

チラチーノの邪魔をしようとするブイゼルを退けようとドレディアがはなびらのまいでブイゼルに攻撃を仕掛ける。そしてチラチーノは、サニーゴにめざましビンタがドレディアは、ブイゼルにはなびらのまいをお見舞いし2匹は、倒れた。

サクラ「サニーゴ、ブイゼル、両者戦闘不能。チラチーノ、ドレディアの勝ち」

サトシ「やるね二人とも」

カスミ「でも次は、そう簡単にいけるかな？行くわよっ、マイステ
ディ！」

サトシ「キングラー、君に決めたっ！」

カスミは、カスリン（ラブカスのニックネーム）をサトシは、キン
グラーを繰り出した。

ホワイト「ドレディア、はなびらのまいを連続で出しちゃいなさい」

カスミ「そんなにはなびらのまいを連続で出したら混乱するわよ」

ホワイト「残念でした。私のドレディアは、マイペースを持ってい
るため混乱はしません」

カスミ「なるほどね」。でもそれがいつまで通用するかな？カスリ
ン、れいとうビーム」

ホワイト「ドレディア、避けて・・・」

ホワイトが指示を出そうとしたときドレディアの横からキングラー
がクラブハンマー攻撃を受けさらにカスリンのれいとうビームを受
けて倒れてしまう。このときいつの間にかチラチーノは、キングラ
ーの攻撃を受けてて援護ができなかった。

サクラ「ドレディア、戦闘不能。カスリン、キングラーの勝ち」

カスミ「どう？私達の愛の力は？」

サトシ「恐れ入ったか」

ホワイト「何の、バカップルジムリーダーたちに負けてたまります
か」

ブラック「そうだそうだ。（ところでバカップルってなんだろう？）

恋愛に鈍感なブラックの発言である。

ハナダジムタッグバトルのジム戦。はたして勝負の行方は、どうな
る？

18 ホワブラVSサトカス タッグバトル（前編）（後書き）

ホワイト「なんかサトシとカスミがバカップル化してない作者？
気のせい気のせい。」

ホワイト「でも本編中に私が「バカップル」数回言ってるわよ」
細かいこと気にしすぎだよホワイト。

ホワイト「細かいところ気にしなさいよ作者（汗）」
いいじゃん別に。それでは、次回もお楽しみに」

19 ホワブラVSサトカス タッグバトル（中編）

ついに始まったハナダジムタッグバトル戦。

序盤いきなりサトカスのポケモン2体戦闘不能にするがホワイトのドレディアは、サトカスの2体目のポケモン——カスリンとキングラーによつて戦闘不能にされる。

ホワイト「次は、この子よ。ハハコモリ」

次にホワイトが出したのは、ハハコモリだが・・・

カスミ「キャーキャー！」

とカスミは、サトシに抱きついた。

ブラック「どうしたんだ一体？」

ブラックもホワイトも頭の上に？がつく。

サトシ「ごめんな。カスミは、こう見えても虫ポケモンが昔からダメで・・・」

カスミ「虫は無視」

ブラック「まさかジムリーダーが虫嫌いとは、これはかえってチャンスかも」

なんかずるばい考えをするブラック。

ブラック「うるさいよ作者」

ホワイト「ブラック、誰に言ってるの？」

ブラック「別に」。それやるなら今のうちよ。チラチーノ、ラプカスに向かって10万ボルト」

サトシ「あ！キングラー、チラチーノに向かってふみつけた」

カスミが虫におびえることをいいことにブラックは、チラチーノにラプカスを攻撃するがキングラーが横から入ってきてふみつけを食らい倒れる。

サクラ「チラチーノ、戦闘不能。キングラーの勝ち」

カスミ「よくも私がおびえてる隙に攻撃するなんて卑怯よ」

ブラック「虫におびえる暇があったら攻撃の指示の1つや2つ言ったらどうなの？虫嫌いなジムリーダーさんよ」

明らかにオジヤマ虫呼ばわりされてカスミに随分根に持っていたブラック。

ブラック「次は、こいつだ」

と出したのは、ルリリであつた。

ホワイト「ルリリって・・・」

ホワイトが何か言おうとしたときブラックがウィンクする。

ホワイト「（ああ。なるほどね）」

ホワイトは、何かに感ずいた。

カスミ「そんなことないわよ！！ラブカスあのオジヤマ虫のルリリに向かつて水鉄砲」

ブラック「ルリリ避けるんだ」

ルリリは、高くジャンプして避ける。

サトシ「え！」

カスミ「ウソ〜！？」

ブラック「ルリリ、そこからシャドーボールだ」

ルリリは、シャドーボールをラブカスにお見舞いする。

サトシ「あのルリリ、シャドーボール使えるの！？」

カスミ「そんなはずないわ。ルリリがシャドーボール使えるはずが・・・」

ホワイト「よそみは、禁物よ。サトシにカスミ」

そういうとホワイトのハハコモリがはっぱカッターを繰り出しラブカスとキングラーにダメージを与える。

サトシ「考えてても仕方がない。キングラー、ルリリに向かつてラブハンマー」

カスミ「カスリン、ハハコモリにれいとうビーム」

ホワイト「ハハコモリ、もう一回はっぱカッター」

ブラック「ルリリ、ナイトバースト」

両軍の技が中央でぶつかり爆発しお互いダメージを食らう。

サトシ「ナイトバースト!?ということは・・・」

何かを確信したサトシは、キングラーに指示を出す。

サトシ「キングラー、そのルリリにふみつけた」

そういつてルリリをふみつける。

するとルリリの姿が変化したのだった。

サトシ「やつぱり」

今の今までルリリに化けていたポケモン。それはゾロアークだったのである。

ブラック「まさか、ゾロアークの正体を見破るとは、さすがジムリーダーだぜ」

サトシ「昔クラウンシティでゾロアークを見かけてそれでピンときたんだよ」

ブラック「でも、負けない。ゾロアーク、イカサマだ」

サトシ「キングラー、クラブハンマー」

ホワイト「ハハコモリ、ゾロアークを擁護してリーフブレード」

カスミ「カスリン、キングラーを援護するわよ。れいとうビーム」

4匹のポケモンが互いに攻撃しダメージを与える。

サトシ「キングラー、破壊光線」

カスミ「カスリン、水鉄砲」

ブラック「ゾロアーク、ナイトバースト」

ホワイト「ハハコモリ、リーフストーム」

4匹のポケモンが一斉攻撃を仕掛ける。技と技がぶつかった瞬間、激しい爆発がした。4匹とも勢いよく吹っ飛ばされた。

爆風が収まると、4匹とも倒れていた。

ブラック「ゾロアーク、しっかりして!」

ホワイト「ハハコモリ、大丈夫!?!」

カスミ「カスリン、立って!」

サトシ「キングラー、立ち上がってくれ!」

4匹ともそれぞれが立ち上がるうとしていたが、ほぼ同時に倒れ込んだ。

サクラ、ゾロアーク、ハハコモリ、カスリン、キングラー、両者とも戦闘不能」

激しいバトルの末、両軍のポケモンが戦闘不能となりお互い残るは、1体のみとなる。はたして勝利の女神は、どちらに微笑むのか？

19 ホワブラVSサトカス タッグバトル（中編）（後書き）

次回いよいよハナダジム戦クライマックスです。

20 ホワブラVSサトカス タッグバトル（後編）と再び登場（前書き）

いよいよハナダジムジム戦最終章。それとあの3人が再び登場します。

20 ホワブラVSサトカス タッグバトル（後編）と再び登場

2体目のポケモン全員が戦闘不能となり残るポケモンは、お互い1匹ずつとなる。

カスミ「最後のポケモンは、この子よ。行くわよっ、マイステディ！」

サトシ「ピカチュウ、君に決めたっ！」

ホワイ「ジャローダ、いてらしゃい」

ブラック「ミジュマル、ゴー」

最後のポケモンは、お互い切り札とも呼べるポケモンを繰り出す。

サトシ「ここで諦めてないのが俺たちジムリーダーだよ」

カスミ「最後の最後まであたし達の愛の力を思い知りなさい」

ホワイ「私たちだって」

ブラック「俺の辞書に諦めという文字はないんだ。ミジュマル、ピカチュウに向かってねっとう」

サトシ「ピカチュウ、ミジュマルに10万ボルト」

ホワイ「ジャローダ、リーフブレードでミジュマルを援護して」

カスミ「ギャラドス、ジャローダに火炎放射」

ミジュマルは、ねっとうをピカチュウへ向けて発射しピカチュウも10万ボルトをミジュマルに放つ。ジャローダは、ミジュマルを援護しようとするがギャラドスの火炎放射が飛び出るとすばやく避けた。

ホワイ「あのギャラドス、火炎放射使えるの!？」

カスミ「そうよ。水タイプだからって甘く見ていたら痛い目にあうわよ」

カスミがホワイにそう言う。

ブラック「こうなったら、ホワイあれで行こう」

ホワイ「OK」

ブラック「ミジュマル、みずのちから」

ホワイト「ジャローダ、くさのちから」

サトシ「しまった！？合体技か！？」

そう言うともみずのちからとくさのちからが放った瞬間技が1つになり2匹にダメージを与える。さらに湿原となりピカチュウとギャラドスのすばやさがいばらく落ちる。

ブラック「やったぜ」

ホワイト「これでしばらくは、あなた達のポケモンのすばやさは、落ちたわよ」

カスミ「それがどうしたの？私達の愛でこんなのカバーして見せるわ」

ホワイト「愛の力でカバーできるはずがなと思うんだけど・・・」

ホワイトがそう言うときサトシが動いた。

サトシ「ピカチュウ、ミジュマルにボルテッカー」

ブラック「ミジュマル、ハイドロポンプ」

カスミ「ギャラドス、破壊光線」

ホワイト「ジャローダ、ハートプラント」

4匹のポケモンが強力な技を繰り出しそしてまたしても技と技がぶつかった瞬間、激しい爆発した。そして煙がはれると4匹のうち1匹が立っていた。

ホワイト「じゃ、ジャローダ・・・」

そう立っていたのはジャローダだった。

サクラ「ミジュマル、ピカチュウ、ギャラドス、戦闘不能。ジャローダの勝ち。よって勝者チャレンジャー・カノコタウンのホワイトとブラック」

ブラック・ホワイト「ヤッター」

サトシ「ここまでのようだねカスミ・・・」

カスミ「そうね。私達の愛があの子達の愛より上回っていたってことね」

そう二人は、つぶやいた。

サトシ「二人ともおめでとう。これがハナダジムのバッジ、ブルー」

バッジだ」

カスミ「さあ、受け取って」

ブラック「それじゃありがた・・・」

ブラックとホワイトがブルーバッチをもらおうとした瞬間ジムが揺れてそして壁から1台のRマークのロボットが出てくる。

サクラ「一体何なの？」

「『一体何なの？』と聞かれたら」

「名乗ってあげるのが当たり前」

「天の河さんの小説に出演決定されて」

「天の河さんの小説の内容を守るため」

「恋と成熟の他の小説を貫く」

「お茶目で依頼を受けた俺様たち」

「カミオタイ」

「ナカオタイ」

「シモオタイ」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「梓を超えて」

シモオタイ「天の河さんの小説で」

3人「俺たちを待っている」

ブラック「ロケット団!？」

ホワイト「でも、なんだか台詞が一部変わってるわ」

カスミ「まさか、ムサシやコジロウに」

サトシ「ヤマト、それにコサンジ以外にまだこんなロケット団がい

たとは・・・」

ブラック「ところでお前達なんでそんなに上機嫌なんだ？」

カミオタイ「聞いて驚くなよ」

ナカオタイ「実は、俺たちオリジナルロケット団が」

シモオタイ「天の河さんの小説に出演することに決まったんだ」

ナカオタイ「ついに、俺たちの実力が他の作者から認められてな（
T T）」

シモオタイ「そのおかげで主役より俺たち悪役に出演の依頼が来たときは、うれしくてうれしくて（涙）」

カミオタイ「ありがとう天の河さん」

5人「??????」

カミオタイ達は、涙を流すがブラック達は、何のことやらわかってはいない。

カスミ「それでロケット団。私たちに何の用なの？」

カミオタイ「そうだった。我ら天の河さんの出演決まったが我らまだ3回しか出してもらっていない」

シモオタイ「そのため実績がほとんどないためそれで」

ナカオタイ「その実績作りのために」

シモオタイ「お前達のポケモンをいただく」

ブラック「なんだと」

カミオタイ「いつけ、ホイホイ吸い取り君」

そして機械が動き出した。

ナカオタイ「それ、ポケモンを吸い取れ」

シモオタイ「実績作り、実績作り」

上機嫌のカミオタイ達。

しかし・・・

「ツタージャ」

どこからかりーフストームが放たれて機械は、簡単に壊れる。

カミオタイ「うわーーーーー！！？ホイホイ吸い取り君が簡単に壊れた！？」

シモオタイ「それより誰だ、こんなことしたのは？」

するともう1回りーフストームが飛んでくる。

ナカオタイ「シモオタイ、あそこだ」

指を指すナカオタイ。指の先には、ツタージャがいた。

サトシ「ツタージャ！？」

そうこのツタージャ、サトシのポケモンである。

ナカオタイ「なかなか強いツタージャだ。シモオタイ、行って来い」

シモオタイ「なんで俺なんですか？ナカオタイが行って来いよ」
ナカオタイ「俺の言うことが聞けないのか」

カミオタイ「お前達ケンカするな。そんなことしてたら・・・」

サトシ「ツタージャ、もう1度リーフストーム」

そういうとツタージャがリーフストームを発射しそしてカミオタイ達に当たる。

ドカーン。

3人「うわゝ、やな気分ーーーー」

キラーン

カスミ「弱いわねゝあのロケット団」

サトシ「それより今度こそ、はい、ブルーバッジ」

こうして改めてブルーバッジを手にしたブラックとホワイト。

ブラック・ホワイト「ブルーバッジゲットで超ハッピー」

こうして二人は、二つ目のバッジを手に入れた。

旅は、まだまだ続く。

20 ホワブラVSサトカス タッグバトル（後編）と再び登場（後書き）

3人「コラー、作者」

何だ犬山線3人組？

ナカオタイ「犬山線なんて言うなー」

カミオタイ「それよりも何この扱い!？」

シモオタイ「俺たちは、もうすぐ天の河さんの小説に出演するのにな何だよ。この扱いと終わり方は」

あまりはしゃぐと天の河さんに失礼になるからこんな終わり方にしたの。

ナカオタイ「そんな終わり方ってあり？」

うるさいな。打診しただけでもありがたいと思いなさい。

3人「なんだと」

しつこいとしばらくださんぞ。

3人「すいません」

21 最弱トレーナー

見事二つ目のバッジをゲットしたブラックとホワイトは、3つ目のジムをどこにしようか迷っていた。

ブラック「なあ、ホワイト。ヤマブキにしないか？あそこのジムは、エスパークタイプのエキスパークだって。エスパークなら俺のポケモンなら勝てやすいジムだしそれにハナダから近いしここにしないか？」
ホワイト「確かにハナダから近くていいしここにしましょう」

ブラック「そうと決まればヤマブキに急行だ」

そういつてハナダのポケモンセンターから出ようとしたときだった。
ホワイト「あれ？リーフちゃんじゃないの」

リーフ「あ！ホワイトさんにブラックさん」

そこにいたのはオーキド研究所で新人トレーナーとしてマサラを旅立ったリーフである。

ホワイト「どうして元気がないの？そんなにため息ついて」

ホワイトは、リーフに問いかける。

ホワイト「何か悩みがあるんなら私に話してみて。話の内容によっては力になってあげるわ」

リーフ「・・・実は、私ジム戦6連敗続きです」

ブラック「じ、ジム戦6連敗！！」

リーフ「はい。ニビ、ハナダ、合わせて6連敗です。ニビで連敗続きだとレッドやグリーンに先を遅れるのでハナダに来たんですけど結果は、ニビと同じで・・・」

ホワイト「（ジム戦6連敗は、さすがにこたえるわね）」

ホワイトは、心の中でつぶやく。

リーフ「それが影響なのか、トレーナーと戦っても負け続きで昨日2桁越えちゃて」

ブラック「2桁越え！？」

ブラックは、驚く。

どんなトレーナーでも連敗するトレーナーやジム戦に負けることはよくある。しかしそれがジム戦6連敗やトレーナー戦で負けが2桁越えすると越えるのはさすがに大きい。

もしかして自分に何か問題があるのではと、嫌でも考えてしまう状況になる。

リーフ「ホワイトさん。私のどこがいけないんですか？」

リーフの目には涙がたまっていた。

ホワイト「ところでリーフは、今ポケモン何匹持っているの？」

リーフ「私？私は、フシギダネとピカチュウそれにナゾノクサの3匹です。どれもニビやハナダに相性のいいポケモンでぶつけようと思ってゲットしたんです。そしてバトルでは相性のいい技だけを繰り出してるんです」

ホワイト「（なるほど原因はこれだね）」

ホワイトは、心の中でつぶやいた。ブラックもリーフの話を聞いてなんとなく理解した。

原因は、恐らく相性のいいポケモンでぶつけてきて相性のいい技しか出さない。そこに原因がある。

相手は、ジムリーダー。相性の悪いポケモンをぶつけてくることは当然予想してくる。しかも相性のいい技しか出さないリーフに対しジムリーダー——ニビジムのジムリーダータケシ、ハナダジムのジムリーダーサトシ・カスミは、いろいろな多種の技を覚えさせている。相性のいい技を1種類より多種多様の技を覚えているポケモンのほうがダントツで勝つ確率が高い。それが例え相性の悪いポケモンでも。ホワイトは、リーフに原因について話している。

ホワイト「リーフ。相性がいいからといって相性のいい技ばかり攻撃してきたらジムリーダーの格好のえさだよ。勝負は、相性では決まらないの。判断力や技術力そして運よ。だから1種類の技ばかり覚えさせないで多種の技を覚えるこそ勝利をもぎ取ることが出来るわよ」

リーフ「なるほど。でもどうしたら・・・」

ホワイト「私がリーフのポケモンたちを鍛えさせてあげるわ」
リーフ「ほんと！？」

ホワイト「ええ。ブラックも協力するのよ」

ブラック「もちろんだぜ」

リーフ「ありがとうございますホワイトさんにブラックさん」
こうしてリーフのポケモンたちを鍛える特訓が開始された。

ブラックとホワイトは、リーフを鍛え始めた。

ホワイトは、講座を開きリーフにいろいろと技術やポケモンのことについて教えブラックは、バトルのコツや判断力を鍛えさせブラックとホワイトと交代ずつバトルをした。

それから1週間後。

リーフ「フシギダネ、やどりぎのたね」

フシギダネのやどりぎのたねがコンパンにからまりそしてエネルギーを吸い取られて倒れる。

虫取り少年「コンパン！？」

ホワイト「コンパン、戦闘不能。フシギダネの勝ち。よって勝者リーフ」

リーフ「ヤッター」

ブラック「これで12連勝だな」

ホワイト「ええ、特訓の成果が現れてきたようだね」

二人は、うれしそうに言う。

リーフ「ホワイトさん、ブラックさん。本当にありがとうございます」

ホワイト「いいのよ別に」

リーフ「私これからもう一度ハナダジムに挑戦します」

ブラック「そうか。がんばれよ」

リーフ「はい」

そう言つてリーフは、ハナダジムへと向かう。

ブラック「俺らもヤマブキへ行きますか」

ホワイト「そうね」

ブラックとホワイトもハナダを後にしてヤマブキへ向かい始めた。

21 最弱トレーナー（後書き）

今年最後の話しどうでしたか？来年は、もっといい話を作れるよう
努力していきます。

22 怪しげな育て屋（前書き）

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします

22 怪しげな育て屋

3つ目のバッジをゲットするためブラックとホワイトは、ヤマブキシティを目指していた。

ホワイト「この調子なら今日中にヤマブキシティに着くわ」

ブラック「あ！ホワイトこんなところに育て屋があるぜ」

ホワイト「ほんとね、ちよつとのぞいていかない？」

ブラック「そうだな」

そういつてブラックとホワイトは、育て屋の前に行くが・・・

ブラック「なんだ、お休みか」

今日は、ちょうど育て屋がお休みだった。

しかし・・・

ホワイト「でもおかしいわ？」

ブラック「どこがおかしいんだホワイト？」

ホワイト「ほら、裏口のドアが開けっ放しよ」

ブラック「本当だ」

ホワイト「入ってみましょう」

こうしてホワイトとブラックが裏口から育て屋へと入る。

奥へ進むとある部屋が明るかった二人は、そつとのぞくとそこには、縄で縛られた老人夫婦と男3人組がいた。しかもその3人組にはRマークがついていた。

???「おい、じいさんこれでポケモンは全部だな」

おじさん「頼むから辞めてくれ」

???「うるせい。俺たちは、泣く子も黙るロケット団だ」

???「カミオタイ、そろそろ引き上げようぜ」

カミオタイ「そうだな」

ホワイト「またあの3人組ね。懲りない人たち」

そう言ったときブラックが誤って物音を立てる。

カミオタイ「誰だお前達!？」

ブラック「そっちこそ何者だ？」

ブラックがそういうと名乗りあげる3人。

「『そっちこそ何者だ?』と聞かれたら」

「名乗ってあげるのが当たり前」

「宇宙の破壊を防ぐため」

「宇宙の平和を守るため」

「恋と成熟の悪を貫く」

「お茶目で恋の敵役」

「カミオタイ」

「ナカオタイ」

「シモオタイ」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

3人「君を待っている」

「ミミミミ」

ズデーン!!!!

名乗り終わった直後目の前を1匹のポケモンが現れる。

ナカオタイ「なんでミミロルがここにいるんだ？」

シモオタイ「あ!そのポケモンさっき俺が見つけてゲットしたの」

カミオタイ「お前のか」

ホワイト「それよりそのポケモンを返してもらおうよ」

シモオタイ「やなこった。誰が返すか」

ナカオタイ「そうだそうだ。これは、出世のためだ」

カミオタイ「その通りだ。シモオタイ、やっておしまい」

シモオタイ「お任せを。行くんだ、マタド——」

「ミミロル」

ズデーン!!!!

ミミロルが勝手に登場し。山線のメンバーがこけてしまう。

シモオタイ「ミミロル、お前な」

カミオタイ「しょうがない。シモオタイ、ミミロルを使ってやつけるんだ」

シモオタイ「アイアイサー。ミミロル、とびげりだ」

ホワイト「ジャローダ、リーフブレード」

ホワイトは、瞬時にジャローダを繰り出し技を指示する。

シモオタイ「ミミロル、ほのおのパンチ」

ミミロルは、ほのおのパンチをジャローダに当てる。

カミオタイ「あのミミロルすごいぞ」

ナカオタイ「君もなかなかいいポケモンをゲットしてくれたな」

シモオタイ「そんなことありませんよ」

ナカオタイ「どうやら今回は、俺たちの勝ちのようだな」

カミオタイ「そうだな」

3人は、完全に油断していた。

ホワイト「ジャローダ、リーフストーム」

こうして油断していた3人は、ミミロルとともに飛んでいく。

シモオタイ「勝てると思ったのに」

カミオタイ「油断したのがいけなかったな」

ナカオタイ「今更いっても遅いよ」

3人「やな気分」

キラーン

おじさん「いやゝ助かったよ。本当に感謝してるよ」

おばさん「これは、わしらからお礼じゃ。受け取ってくれ」

そういつてポケモンのタマゴをホワイトに渡す。

ホワイト「ありがとうございます」

おじさん「いいんじゃないよ。それよりヤマブキのジムリーダーは、強いから頑張ったまえよ」

ホワイト・ブラック「はい」

こうしてホワイトとブラックは、育て屋を後にしヤマブキシティへと目指し歩き始める。

23 2つの派閥の争い

ブラックとホワイトは、ようやくヤマブキシジムがあるヤマブキシテイに到着した。

しかし・・・

ブラック「ようやくヤマブキシテイに到着」

ホワイト「でもおかしいわね。都会なのにひとり一人いないわ」

ブラック「本当だ」

都会のヤマブキシテイなのに人がいない。

その時だった。

????「カポエラー、つばめがえした」

????「エビワラー、ほのおのパンチだ」

????「キノガッサ、たねばくだん」

????「負けてたまるか、ムシャーナ、サイコウエーブ」

????「スターミー、サイコキネシス」

????「エーフィ、サイコショック」

ブラックとホワイトがいる場所から少し離れた場所でバトルをしているがそれは、普通のポケモンバトルというよりケンカでしか公共物などを破壊したりさらにブラック、ホワイトのところにも飛んでくる。

ホワイト「バトルというよりケンカだよこれ」

ブラック「とにかく止めない」

ブラックは、6人の元へ行く。

ブラック「おい、そこのお前達」

????「俺達のことか？」

????「勝負の邪魔をするな」

ブラック「お前達がやっていることは、バトルじゃない。ケンカだ。ポケモンをケンカの道具に使うとは、俺は許さん」

????「生意気な。ムシャーナ、このガキを痛い目にあわせろ」

ブラック「返り討ちにしてくれる。ゾロアーク、ナイトバースト」
ブラックは、ゾロアークを繰り出してナイトバーストを繰り出しムシャーナを戦闘不能にする。

???「おぬしのポケモン、あくタイプだな」

ブラック「さあ、ケンカをやめる。やめないとお前ら全員たたきつぶすぞ」

???「ふざけた野郎だ」

???「悪タイプならわれらが有利だ。エビワラー、きあいパンチ」
エビワラーがゾロアークにきあいパンチを当てようとする。悪タイプは、エスパーに有利だが逆に格闘タイプは、悪タイプには不利である。

ホワイト「ジャローダ、つばめがえし」

しかし横からじゃローダーが飛び出しエビワラーにつばめがえしを繰り出しエビワラーに当たり戦闘不能にする。

ブラック「ホワイト!!」

ホワイト「まったく、ブラックたら無茶するんだから」

ブラック「さて、どうするお前達。こっちは、相性のいい技は、沢山持っているぞ」

???「ふざけたことを」

???「俺達の邪魔をするな」

一斉に人とポケモンがブラックとホワイトに襲い掛かる。

ブラック「ゾロアーク、ナイトバースト」

ホワイト「ジャローダ、リーフストーム」

ゾロアークとジャローダが強力な技を繰り出し人とポケモンに当たり空高く飛んでいった。

そんな時だった。

???「お二人とも怪我は、ありませんか？」

そこにきれいな女性とマッチョな男性が現れた。

ホワイト「はい。私たちは、大丈夫です。ところであなた方は？」

???「私は、ヤマブキジムジムリーダーのナツメです」

「???俺は、このヤマブキ道場の師範タケノリだ」

ブラック「ジムリーダーと師範がどうしてここに？」

ナツメ「ここでは、なんですから私の家でお話します」

そういつて彼女は、目を閉じてそして消えた。

そしていつの間にかヤマブキジム前にやってきた。

ホワイト「今乗ってテレポート!？」

ナツメ「はい。私は、ジムリーダーでもありサイキッカーなんです」

ブラック「いるんだな」。超能力者^{エスパー}って」

ナツメ「とにかく入ってください」

こうしてブラックとホワイトそしてタケノリは、ヤマブキジムへ入っていく。

そしてジムのとある部屋に入りいすに座る。

ホワイト「それで、ナツメさん。一体彼らは何者なんですか？」

ナツメ「それは・・・」

タケノリ「私が話そう」

混乱するナツメに変わってタケノリが訳を話し始める。

タケノリ「彼らは、私の弟子とナツメ君のジムトレーナーである」

ホワイト・ブラック「弟子とジムトレーナー!？」

タケノリの言葉に絶句するホワイトとブラック。

タケノリ「昔は、ヤマブキに公認ジムができると聞いて我ら格闘タイプとナツメ君のエスパータイプが名乗りあげたんだ。そして勝負の結果ナツメ君が勝利を収めて彼女がジムリーダーになった。われわれは、仕方がなくジムの隣に格闘道場を開くことにした。ところがこの因縁がずっーと残りわれら弟子とジムトレーナーがよく顔を合わせることに睨み合いばかりいた。時には、ケンカになりそうとなるがナツメ君は、知つてのとおりサイキッカーだ。彼女の予知でことごとくケンカを収めることが出来た。ところが1ヶ月前わしが留守をしているとき道場に何者かが侵入し道場がメチャメチャにされたんだ。それを弟子たちがナツメ君のジムトレーナーの仕業だと思ひ込み彼女のジムに殴りこみにいったんだ。彼女は、ちょうどジ

ヨウトリーグの四天王イツキさんのところに行っていてそれを収めることが出来ずそれが原因で街中で会うたびにエスパークタイプのポケモンと格闘タイプのポケモン同士も派手なバトルを繰り返すようになり我々が仲介に入ってもその仲たがいのバトルは続けてしまいそのせいで町に来る観光客は減り町にいる人たちも怖くって家からほとんど一歩もでなくなり警察の力でも彼らを抑えることが出来ず治安が悪化し犯罪のやりたい放題の状況となったんだ。ところが被害は、人だけで収まらずそのバトルにより、多数の野生のポケモンたちも被害に遭いその野生のポケモンが最近ハナダ、シオン、クチバの人々を襲うようになってしまった。このままほっとくとナツメのジムは、閉鎖されて私は、カントーから追放される。それだけは何とかしなくてはならない。だからお主達頼む。このジムと道場をいや街と野生のポケモンたちのためにも彼らのケンカを止めてほしい。この通りだ」

ナツメ「私からもお願いします」

ナツメとタケノリは、ブラックとホワイトに頭を下げる。

ホワイト「わかりました。お引き受けしましょう」

ブラック「そうだな。町の人たちや野生のポケモンに迷惑をかけるやつらは、俺が断じて成敗してくれる」

ナツメ「二人ともありがとう」

ナツメは、涙を流しながら言う。

ホワイト「とりあえずまずは、道場を見せてもらえませんか？」

タケノリ「いいですけど、どうしてだ？」

ホワイト「本当にナツメさんのジムトレーナーの仕業が気になってね」

ブラック「ホワイト、おまえは、探偵か？」

ホワイトにツツコミを入れるブラック。

ホワイト「ともかく、そこから始めましょう」

こうしてホワイトたちは、タケノリの道場へ向かった。

23 2つの派閥の争い（後書き）

ホワイト「なんかとんでもないことになってきたわ」
この後どうなるかは、お楽しみに。

ブラック「（人事と思って・・・気楽な作者だ）」

24 漁夫の利？

ホワイトたちは、早速タケノリの道場にやってきた。

ブラック「ここがヤマブキ道場か」

ホワイト「タケノリさん、どの辺が荒らされていたんですか？」

タケノリ「道場や壁辺りだ。それと窓が壊されていた」

ナツメ「これを見てタケノリさんの弟子たちが打ちのジムトレーナーの仕業と見てうちのジムに殴りこんできたのよ」

ホワイト「それはおかしいわ？」

ブラック「おかしい？何が？」

ホワイト「だってさ、もしナツメさんのところのジムトレーナーなら窓を壊さなくてもレポートで中に入れるのにわざわざ窓を壊してはいるなんておかしいでしょう」

ブラック「あんな、ホワイト。ジムトレーナーが全員超能力を持っているわけ・・・」

ナツメ「いいえ、うちのジムトレーナーのほとんどが超能力者を使える人達です」

ブラック「ウソ!？」

ナツメの言葉に驚くブラック。

タケノリ「ホワイトちゃん。その考えは、俺も同じだ。ナツメ君のところのジムトレーナーなら窓を破らなくてもレポートで中に入れるからな」

ナツメ「ええ。私のジムには、レポートを使える超能力者サイキッカーは、いますから」

ブラック「ナツメさんもそうだけどサイキッカーって意外に多いだね」

ホワイト「それはいいとして。他に何か不審なところってありましたか？」

タケノリ「そういえば、道場が襲われる前に怪しいやつがうろつい

ていたな」

ホワイト「怪しいやつ!?それは、一体誰なんですか?」

タケノリ「さあ。私もはつきり顔を見たことがないから・・・。

あ!そういえば・・・」

ホワイト「何か心当たりでもあるんですか?」

タケノリ「ああ。道場が襲われたときこんなものが落ちていた」

タケノリがポケットから何か切れた布を出す。布には、「R」マークがついていた。

ブラック「ホワイト!もしかしたら・・・」

ホワイト「あいつらの仕業よ。きつと」

タケノリ「誰なんだ。そいつは・・・」

タケノリがホワイトとブラックに問いかける。

ブラック「ロケット団です」

タケノリ・ナツメ「えーーーーー!」

シモオタイ「『えーーーーー!』と聞かれたら」

ナカオタイ「名乗ってあげるのが当たり前」

カミオタイ「宇宙の破壊を防ぐため」

シモオタイ「宇宙の平和を守るため」

ナカオタイ「恋と成熟の悪を貫く」

シモオタイ「お茶目で恋の敵役」

カミオタイ「カミオタイ」

ナカオタイ「ナカオタイ」

シモオタイ「シモオタイ」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

3人「君を待っている」

いつもの決め台詞を言う3人。

それにしてもただけ耳がいいんだこいつら?

シモオタイ「ふふふふ。ナレーターさん。今日は、俺たちだけじゃないぞ」

えーそれは、どういう意味だ!?

???「『どういう意味だ!?!』と聞かれたら」

???「答えないのが普通だが」

???「まあ、特別に答えてやろう!」

あれ、この台詞どこかで………?

???「地球の破壊を防ぐため」

???「地球の平和を守るため」

???「愛と誠実な悪を貫く」

???「キュートでお茶目な敵役」

???「ヤマト!」

???「コサブロウ!」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の2人には」

コサブロウ「ショッキングピンク、桃色の明日が待ってるぜ!」

ラッタ「ラッター!」

なーんだ。誰かと思ったらヤマトとコサンジじゃないか。

コサブロウ「コサブロウだ!」

ヤマト「あんた。ナレーターにツッコんどうするのよ……」

ナレーターの言葉に対するツッコミに、呆れるヤマト。

ヤマト「さて、作戦は、上々だね」

カミオタイ「ああ。見事に争いを始めて治安は、悪化してくれてい
る」

コサブロウ「うまくいくとは、夢にも思っていなかったぜ」

ナカオタイ「よし。早速、ヤマブキシティのポケモンセンターに乗り込みポケモンをゲットするぞ」

カミオタイ「そうだな。よし、行くぞヤマトにコサンジ」

コサブロウ「コサブロウだ!いい加減覚えろ。山線トリオ!……!」

シモオタイ「その言い方やめろ!……!」

こうしてケンカしながらロケット団のお笑いキャラと。山線トリオ

は、ポケモンセンターに向かうのであった。

24 漁夫の利？（後書き）

はたしてどうなるかは、次回をお楽しみに。

25 真実

タケノリの道場を出た直後かもしれませんが、一門のメンバーがケンカをしていた。

タケノリ「お前達いい加減に止めろ」

ナツメ「そうよ。こんなことして何の得になるのよ」

弟子A「師匠は、黙っててください」

弟子B「こいつらがジムを荒らしたのは、間違いないんですから」

ジムトレーナーA「だから、俺らは、してないっていただろう」

ジムトレーナーB「自作自演したんじゃないの？」

弟子B「ふざけやがって」

こんなことをしているうちにヒートアップしていったその時。

ドカーーーーン

ホワイト「何なの今の爆発は?!」

タケノリ「ポケモンセンターの方角からだ」

ナツメ「とにかく行ってみましょう」

ブラック「そうですね」

こうしてホワイトたちは、ポケモンセンターのほうへ向かった。

その頃ポケモンセンターでは・・・

ジョーイ「ゴボゴボゴボゴボ・・・一体なんですか?」

シモオタイ「『一体なんですか?』と聞かれたら」

ヤマト「答えないのが普通だが」

ナカオタイ「名乗ってあげるのが当たり前」

コサブロウ「まあ、特別に答えてやろう!」

カミオタイ「宇宙の破壊を防ぐため」

ヤマト「地球の破壊を防ぐため」

シモオタイ「宇宙の平和を守るため」

コサブロウ「地球の平和を守るため」

ナカオタイ「恋と成熟の悪を貫く」

ヤマト「愛と誠実な悪を貫く」

シモオタイ「お茶目で恋の敵役」

コサブロウ「キュートでお茶目な敵役」

カミオタイ「カミオタイ」

ナカオタイ「ナカオタイ」

シモオタイ「シモオタイ」

ヤマト「ヤマト！」

コサブロウ「コサブロウ！」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の2人には」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

コサブロウ「シヨッキングピンク、桃色の明日が待ってるぜ！」

3人「君を待っている」

いつもの決め台詞を同時に言ったお笑いコンビと。山線トリオ。

コサブロウ「お笑いコンビじゃない」

カミオタイ「。山線トリオとか言うな！！」

ヤマト「あんたたち誰に言ってるんだい？」

ジョーイ「そんなことよりあなた達何しに来たんですか？」

ヤマト「もちろん」

ナカオタイ「このポケモンたちを頂に来たのさ」

ジョーイ「そんなことさせないわ」

カミオタイ「おっと！あんたには、少し眠ってもらうよ」

そう言うといつの間にいたのか？スリーパーの催眠術をジョーイさんにかけさせた。

シモオタイ「これで邪魔者は、いなくなった」

コサブロウ「しかし、カミオタイがスリーパーを持っているとは、驚いたよ」

ヤマト「そんなこと言ってないでモンスターボールを持ってくるの

よ」

そう言つてモンスターボールを袋の中に入れ始めた。

ホワイト「待ちなさい!!」

ヤマト「誰だ!お前達は」

ナツメ「あなた達。今何をしているの」

コサブロウ「見てのとおりモンスターボールをいただいているわけだ」

タケノリ「なんだと!!」

ホワイト「それよりあなた達は、何者なの?」

コサブロウ「『あなた達は、何者なの?』』と聞かれたら」

ヤマト「答えないのが普通だが」

コサブロウ「まあ、特別に答えてやろう!」

カミオタイ「お前たち同じ話で2回決めゼリフを言うのはよせよ」

ブラック「あー!ホワイト向こうに。山線トリオがいるぞ」

ナカオタイ「そんな言うな!!」

ナツメ「という事は、あなた方は、ロケット団ですね?」

コサブロウ「そういうことだ」

シモオタイ「おっと!邪魔は、させない。いっけ、マタドガ——」

ミミロル「ミミロル」

ミミロルの勝手な登場にヤマト達がコケてしまう。

シモオタイ「お前。また勝手に登場してきて」

ヤマト「なんかムサシのソーナンスみたいだ・・・」

シモオタイ「そんなことは、どうでもいい。ミミロル、れいとうパンチだ」

ブラック「そうは、させない。ミジュマル出てきて熱湯だ」

ブラックは、ミジュマルを繰り出すと同時に技も指示して熱湯を出す。

熱湯は、ミミロルだけでなく。山線トリオに当たる。

シモオタイ「あちあちあちあち——いい」

ナカオタイ「熱——いい!!」

カミオタイ「ヤマトにコサンジ。あいつらをやっておしまい」
そっぴい残し風呂場へ直行する。

コサブロウ「コサブロウだ！」

ヤマト「あいつら、命令口調で言いやがって」

ナツメ「覚悟なさいロケツト団。エーフィ」

ヤマト「しょうがない。邪魔者は消すのみ。いくよ、コサンジ」

コサブロウ「だから、コサブロウだ」

ヤマトとコサブロウは、デルビルとグラエナに攻撃の指示を出した。
ホワイト「悪タイプのポケモンですよ。ナツメさん」

コサブロウ「ははははは、エスパージムがあるから念のため悪タイプのポケモンを連れて来て正解だったぜ」

タケノリ「私に任せろ。いっけ、カポエラー」

ヤマト「何！？」

タケノリ「悪いが私は、道場の師範の格闘使いだ」

コサブロウ「生意気な。グラエナ、あくのはどうだ」

ナツメ「エーフィ避けるのよ」

タケノリ「カポエラー、きあいパンチだ」

ブラック「ミジユマル、熱湯だ」

2体の攻撃はデルビル、グラエナにクリーンヒットした。

カミオタイ「おーい。ヤマトにコサンジ終わったか？」

コサブロウ「コサブロウだ！」

ヤマト「この通りの状況だよ」

ホワイト「あなた達。前にタケノリさんの道場を荒らしたのは、あなた達？」

ヤマト「知らないよ私たち」

カミオタイ「そんなことは、やっていない」

コサブロウ「道場に忍び込んで道場を荒らし争わせて治安悪化したところをポケモンセンターを襲うなんて知らないぜ」

コサブロウが思いきり事実を話し他のメンバーから口を押さえつけるがもう遅かった。

ジムトレーナー全員「なんだと!？」

弟子全員「なんだって?!」

いつの間にかポケモンセンターの入口前にジムトレーナーと弟子がそろいもそろっていた。

ホワイト「いつの間に・・・」

ジムトレーナーA「よくも騙してくれたな」

弟子A「絶対に許さん」

シモオタイ「騙されるほうが悪いんだよ」

ジムトレーナーB「おのれ」。こうなったら一斉攻撃だ」

弟子全員「おー!」

ジムトレーナーのポケモン、弟子のポケモンを出しホワイト達とともに一斉攻撃をする。

コサブロウ「なあ、これっていつもの・・・」

カミオタイ「そうだな」

ヤマト「そうみたいね・・・」

ナカオタイ「もしかして・・・」

ヤマト・コサブロウ「それじゃあ・・・」

ドカーーーーーーン

ヤマト・コサブロウ「やな気持ちゝ!!!!!!」

カミオタイ・ナカオタイ・シモオタイ「やな気分ゝ!!!!!!」

キラーン

ロケット団は、星になって飛んでいった。

こうしてタケノリの弟子とナツメのジムトレーナーは、和解し、ようやくヤマブキシティに平和が戻った。

その後ジムトレーナーたちと弟子たちがお詫びの印に街を直し始め野生のポケモン達の怪我も治してやり街は、徐々に戻りになりそして野生のポケモンたちも人を襲うことは、なくなった。

タケノリ「いやゝ。ホワイト君にブラック君。本当にありがとう」

ナツメ「おかげで待ちも元通りなり野生のポケモンたちも人を襲うこともなくなり。君達には、感謝の気持ちでいっぱいです」

ブラック「そんなことはありませんよ」

ホワイト「私たちは、たいしたことしていませんよ」

ナツメ「それで君達にこれをくれるわ」

そういつてナツメは、ゴールドバッジをブラックとホワイトにあげる。

ホワイト「これってゴールドバッジ!？」

ブラック「俺たちジム戦していないのに・・・」

ナツメ「ジム戦で勝利者のみバッジを与えるのが全てじゃないのよ。だから二人とも受け取って」

ホワイト「わかりました。ナツメさんがそう言うなら」

ブラック「受け取ります」

こうしてブラックとホワイトは、ゴールドバッジをゲットした。

ホワイト「それで次は、どこのジムに行こうかブラック」

ナツメ「なら、タマムシシティへ行ってみたら? あそこには、ジムがあるしそれにホワイトちゃんなら行ってみる価値は、あるわよ」
ホワイト「どういう意味ですか?」

ナツメ「あそこ草ポケモン専門のジムなのよ」

ホワイト「え! 本当ですか。なら行こうかブラック」

ブラック「え! ちよつとホワイト!!」

ホワイトは、ブラックの腕をつかみ捕りタマムシ方面に歩き出す。

ホワイト「それじゃ、ナツメさん。タケノリさん」

こうしてホワイトとブラックは、タマムシシティへと向かうのであった。

ナツメ「行っちゃったね」

タケノリ「それよりナツメ。言わなくてよかったのか?」

ナツメ「何が?」

タケノリ「タマムシジム。あそこは、男性禁制のジムだぞ。ホワイト君は、ともかくブラック君は、男だぞ。ジムさせてもらえないじゃないか?」

ナツメ「心配しないで、私の予想だとエリカちゃんならブラック君

とジム戦してくれるわ」

タケノリ「お前の予知がそう言っているのか？」

ナツメ「さあ、どうかしら？」

ナツメは、笑顔でそういつてレポートをした。タケノリは、その場を後にした。

ブラックとホワイトがヤマブキを後にした頃。

シヨウ「まったく。あのコンビとトリオは、相変わらずだな」

???「まったくだぜシヨウ」

シヨウ「!!。何だお前かびつくりしたよ」

???「悪い悪い。それよりジム戦は、順調か？」

シヨウ「もちろんだよ。俺が負ける男に見えるか？」

???「長年付き合ってるんだ。おまえならジム戦やトレーナーとのバトルじゃあ負けるたちじゃないことは、わかっているよ」

シヨウ「で？俺に何の用だ？」

???「ボスから伝言を預かってきた。『ヤマブキのジムが終えた後タムシのゲーセンに来い』と」

シヨウ「そうか、わかった。それにしてもお前もボスから信頼が厚いんだな」

???「親友のお前に言われたくないぜ」

シヨウ「それじゃあ俺は、ジム戦してくるよ」

???「ああ。俺は、一回ボスのところに報告してくるよ」

シヨウ「それじゃあなロツシュ」

こうしてシヨウは、ジムに向かい、ロツシュは、リザードンを出しどこかへ飛び去ったのであった。

25 真実（後書き）

と言うわけで今回の後書きショーは、ロケット団のお笑いコンビと。
○山線のトリオのメンバーです。

コサブロウ「お笑いコンビじゃないぞ」

カミオタイ「それに。山線なんて言い方止めろ」

ナカオタイ「それより何だよ。この扱いは!？」

君達は、悪の組織だろう。悪なら悪らしくこんな風にやられればいいの。

ヤマト「何よ。そのへ理屈は!？」

シモオタイ「それより新キャラ出してきたな」

まあな。ある感想文にこんなオリキャラは、どうですかと言う案をもらい1部修正で採用させてもらいました。

カミオタイ「それよりも少し扱いよくしてくれないか?」

嫌だ。

コサブロウ「なんでショウとロツシュは、扱いがよくて俺らは、あんな扱いなんだよ」

お前らとあいつらを一緒にするわけには、いかないの。

カミオタイ「なんだと!」

ヤマト「ふざけないで」

シモオタイ「そうだそうだ」

お前たち俺の作品に文句あるのか?

全員「大いにあります」

そつかそつか。わかったよ、お前達文句言ったから、しばらくこの作品に出さないぞ。

カミオタイ「著作権限の濫用だ」

コサブロウ「俺らしばらく出られないのかよ」

シモオタイ「しょうがないしばらくは、天の河さんの作品にお世話になろうか」

カミオタイ「そうか！俺たちには、それがあつた！」

ナカオタイ「よかったよかった」

ヤマト「（あの作者が多用に。山線トリオを使うとも思えないけど・

・・）

それじゃあ、皆さん。次回もお楽しみに」

26 え！あなた四天王？！（前書き）

久しぶりの更新です。

26 え！あなた四天王？！

タマムシシティのタマムシジムを目指しているホワイトとブラック。
ホワイト「あと少してタマムシシティよブラック」

ブラック「それよりホワイト、少し休まない？」

ホワイト「それもそうだね。それじゃああその大きな木の下で休みますか」

こうして二人は、大きな大木の下で休むことにした。

ホワイト「みんな出てきなさい」

ブラック「おまえたちもだ」

二人は、モンスターボールからポケモンを繰り出す。
するとポケモンたちは、遊び始めた。

ホワイト「フツ。みんな楽しそう」

ブラック「ここ最近バトルばかりだったからな」

そう言った時ブラックのイーブイが余所見をしてミジュマルに当たる。

ミジュマル「ミジュ」。ミジュミジュミジュミ「痛」。どこを見てるんだよお前」↑ポケモン語の翻訳

イーブイ「ブイブイブイ」（何よ。避けないあなたが悪いでしょう）

ミジュマル「ミジュミジュミジュ」（生意気な新入り。その根性叩き直してやる）

するとミジュマルは、イーブイに向かって水鉄砲を発射する。

イーブイ「ブイブイブイ」（よくもやってくれたわね。今度は、こっちの番よ）

イーブイも負けじとシャドーボールが放つがコントロールが悪く変な方向へ飛んで行く。

ブラック「イーブイ、ミジュマル止めるんだ！」

ブラックがイーブイとミジュマルを止めに入ったその時だった。

???「うわー！！」

悲鳴声が聞こえてきた。

ブラック「なんだ？」

悲鳴声が聞こえた場所にブラックとホワイトが一人の男性が倒れていた。

ホワイト「あの〜。大丈夫ですか？」

???「あ、大丈夫だ」

ブラック「ところでおじさんは、どうしてここにいますか？」

???「おじさんじゃなくてお兄さんと呼んでほしいね。まあ、それはいいとして自己紹介が遅れたが私は、ダイスケと言うノーマル使いの四天王だ」

ホワイト「えーーーーー!!!!!!」

ブラック「四天王!？」

二人は、驚いて言う。

ホワイト「こんな人が四天王とは・・・」

ブラック「人は、見かけによらずってか？」

ダイスケ「おいおいひどいな〜そんないい方」

ホワイト「それは、言いとしてダイスケさんは、どうしてここにいらんですか？」

ダイスケ「実は、ジョウトの悪タイプ使いの四天王カリンと今まで修行してたんだ」

ブラック「ジョウトの四天王？」

ダイスケ「ああ。ここは、カントーとジョウト2つの地方が隣同士あつてそれぞれ2つのリーグがあるんだ。まあ、元々は、カントーとジョウトは、共通の四天王だったけどその後大会の出場者増加によりカントーとジョウトの地方に分けてリーグを設立したんだ。それにともないジョウトリーグ四天王とチャンピオンマスターをカントーの四天王から3人がその座に付いてカントーの四天王とチャンピオンマスターのポストが空いてね〜。その座に私がついたんだ」
ホワイト「それでカリンさんとは、どういう関係なんですか？」
ダイスケ「まあ、幼馴染と言っておこう」

ホワイト「へえ、幼馴染なんですか」

ダイスケ「それは、そうとして君たちは、どうしてここに？」

ホワイト「実は、タマムシにジム戦に行く途中なんですよ」

ダイスケ「タマムシに？ならちようどよかった」

ブラック「え？」

ダイスケ「すまんがタマムシまで一緒についてていいかな？」

ホワイト「え！どうしてなんですか？」

ホワイトの疑問にダイスケは、素直に答えた。

ダイスケ「自分で言うのもなんなが実は、俺、ものすごい方向音痴なんだ」

ブラック「ほ、方向音痴！？」

ダイスケ「ああ、修行を終えてタマムシにいるみっちゃんのところへ行こうとしたんだけど道が分からなくなっただけ」

ホワイト「そのみっちゃんって誰なんですか？」

ダイスケ「俺と同じくカントーの四天王草タイプの使い手のミナキのことさ」

ホワイト「草タイプの四天王！？」

そうダイスケが言うとう目キラキラさせるホワイト。

訳のわからないダイスケに対しブラックが耳元でささやく。

ブラック「実は、ホワイトは、草タイプが大好きでして・・・」

ダイスケ「ああ、なるほどね。ねえ、ホワイトちゃん、私をタマムシまで連れててくれないかな？連れててくれたらみっちゃんに会わせてあげてもいいよ」

ホワイト「本当ですか！？それなら今から出発よ」

ホワイトは、テンション高めてタマムシシティを目指すのであった。

26 え！あなた四天王？！（後書き）

どうでしたか久しぶりのお話は？

ブラック「まあまあかな？」

ホワイト「それよりオリジナルの四天王が2名登場したね」

まあ、元々アニメをもとに作ったからね。カントーとジョウトは、リーグは別々だからジョウトのチャンピオンワタルと四天王のシバの穴埋めとしてカントーの四天王にオリジナルキャラを起用したの。ブラック「それでカントーのチャンピオンは、どうなっているの？」

それは、まだ企業秘密だ。

ホワイト「なんで企業秘密なの？」

ブラック「それで今後の予定は、どうなっているの？」

まあ、クルミルとズルツクの話とDPのサイドシリーズとあと次回のソムリエの話のネタを参考にして構成するつもりだよ。

ホワイト「まあ、いいけど、変にしないでね話を」

分かっているって、それでは、次回もお楽しみに」

27 異変

タマムシシティを目指しているホワイトとブラックは、途中カントーの四天王ダイスケと出会った。そして3人は、タマムシシティに付く。

ホワイト「ようやくついたわタママシシティに」

ブラック「よし、早速ジムへレッツ・・・」

ダイスケ「ちよつと待ってブラック君」

ブラック「なんですかダイスケさん？」

「多分この時間じゃあエリカさんは、ジムにいないと思うよ。まあ、行ったとしてもブラック君は、追いつかれるのがおちだけだね」

ブラック「それは、どういう意味ですか？」

「ダイスケ、このタマムシジムは、男性禁制のジムなんだ。男性のジム戦挑戦は、お断りなんだ」

ブラック「えー……！！！！！！」

ブラックは、大声でそう言う。

「ディスク」でも、エリカさんに気に入られればジムに挑戦してもらえるけど、そう滅多にないからねあのお譲ちゃんは」

そう言うつとブラックは、ガツクリと氣力を落とす。

ホワイト「それで、ディスクさんは、エリカさんの居場所知ってるんですか？」

「ダイスケ、ああ。エリカさんは、ジムをやりながら香水を作ってるんだ」

ホワイト「へえ」

「ダイスケ、そのお店やさんの名前を知っているから道案内よろしくね」

結局人任せのダイスケであった。

ホワイト「ほら、行くわよブラック」

ホワイトは、ブラックを引きつりながらそのお店に向かった。

30分後。

ようやくそのお店についた。

ダイスケ「こんにちは。エリカちゃんにミナキはいますか？」

???「あらーダイスケ君。いらつしやい」

ダイスケ「誰かと思ったらアキコちゃんじゃないか」

アキコ「それより、方向音痴のあなたがよくこの店にたどり着いたね。まあ、どうせ誰かを連れてきてこの店に着たんでしょ」

ダイスケ「ピンポン。アータリ」

アキコ「まったく、それで本当に四天王？」

ダイスケ「性格と実力は、違うよ。それよりエリカちゃんいるか？エリカちゃんに挑戦したいって子がいるんだけど・・・」

アキコ「挑戦者？」

そう言うときホワイトブラックが現れる。

ホワイト「初めましてホワイトです」

ブラック「ブラックです」

アキコ「君達が挑戦者か」。でも君は、無理だね」

ブラック「や、やっぱり（涙）」

アキコ「でも、女装すれば挑戦できるって言うてもあるけど？」

ブラック「い、嫌です。それだけは、嫌です。俺、オネエとオカマそれに女装は、嫌いなんです」

ホワイト「いるんですか女装してジムに挑戦する男性の人？」

アキコ「いるわよ。ハナダジムジムのサトシ君も女装してジムに挑戦したのよ」

ホワイト「そ、そうなんですか!!」

ダイスケ「それより、アキコ。エリカちゃんとミナキは？」

アキコ「エリカお嬢様とミナキさんは、あることを調査しているの」
ダイスケ「調査？」

アキコ「ええ。最近タマムシシティにロケット団がよく現れてるの。」

それで調査しているの。だからいつ戻ってくるかわからないの」
ブラック「ふーん。しょうがない、俺は、この町を見物するか」
ホワイト「それじゃあ、私は、タムムシデパートにでも行ってみるわ」

二人は、そう言って別々に分かれる。

28 任務の内容

ホワイと分かれて町を見物をするブラック。

そんな時だった。

ブラック「ゲームコーナーか」

ブラックが立ち寄ったのは、ゲームコーナーであった。
すると一枚のチラシをみる。

ブラック「えーと、何々。「ここはスロットマシンがいっぱいある
ロケット・ゲームコーナー！ ジャンジャンコインをゲットして、
素晴らしい景品ゲットだぜ！」か。それにしてもロケット・ゲーム
コーナーって、どこかで聞き覚えがあるようなないような・・・ま
あいいか」

そう言つてブラックは、ゲームコーナーに入つて行く。

ブラックがゲームコーナーに入つた頃。

ショウは、タمامシシティの入り口にいた。

ロッシュ「おい。ショウ」

ショウ「ロッシュか」

ロッシュ「で、どうだったヤマブギジムのジム戦の結果は？」

ショウ「この通りだ」

そういつてバツジケースを見せるショウ。そこには、ゴールドバツ
ジがあつた。

ロッシュ「さすがショウだ」

ショウ「それよりサカキ様は、俺にどのような任務を？」

ロッシュ「それは、俺にもわからない。とりあえずついてこい」

そう言つてロッシュは、ショウを連れてどこかへ向かうのであつた。

（某所）

ロッシュ「失礼します。サカキ様」

サカキ「お！ロツシュではないか」

ロツシュ「サカキ様。シヨウをお連れしました」

シヨウ「失礼しますサカキ様」

サカキ「シヨウ、どうだジムバッジは、順調に集めているか？」

シヨウ「この通りですサカキ様」

そういつてサカキにバッジケースを見せるシヨウ。

サカキ「さすが、シヨウだ。ところで手持ちの方は、どうだ？」

シヨウ「ツタージャ、アゲハント、ミジユマル、トゲチックの4匹です。特にツタージャとミジユマルは、進化しなくてもとても強いポケモンです。それより任務とは？」

サカキ「そうかだった。実は、ストンタウンにわがロケット団の支部長から特別な石を見つけたと報告があったんだ。本来なら向こうから送ってもらうのが普通だがここ最近進化の石や化石が大量に見つかりそつちに手が回って届けられないんだ」

シヨウ「それで、僕が取りに行つて欲しいと」

サカキ「まう、そうなるな。まあ、任務が遂行できれば臨時ボーナスを上げよう。何しろ、その特別な石だからな。もちろん今までどおりジム戦しながら向かつてもいいぞ。別に急ぎのことでもないがゼーゲル博士が早く研究したいと言い張つてな」

シヨウ「わかりました。サカキ様」

サカキ「そうだ。シヨウ、こいつを持っていくといい」

そういつて1つのモンスターボールをシヨウに渡す。

シヨウ「これは？」

サカキ「そいつは、特別なピカチュウだ。褒美ほうびと思つて受け取つてくれたまえ」

シヨウ「ありがたき幸せに存じます」

そういつてシヨウは、サカキの部屋を出て行く。

ロツシュ「それでは、サカキ様。わたしはこれで」

サカキ「ふむ。ご苦労であつた」

ロツシュもサカキの部屋を後にした。

???「なかなか、いい子達じゃないの？」

サカキ「なんだ母さんか」

そこにいたのは、サカキの母親。

そうこの女性こそロケット団の創設者であり初代ボスである。

サカキの母「今までのロケット団団員とは、違い任務を遂行し実力のある団員だわ」

サカキ「それより母さん。俺に何か用ですか？」

サカキの母「ここでは、首領と言いなさい」

サカキ「それで首領様は、何しに来たんですか？」

サカキの母「ここ最近、タマムシのジムリーダーのエリカと四天王のナミキが探りを入れているわよ」

サカキ「そうか。なら団員達に気をつけるようにいとくよ」
そう言つてサカキは、部屋を後にした。

一方ロツシュとショウは、ゲーセンの裏手にいた。

ロツシュ「ところで、ショウ。お前は、ポケモンを道具だと思つて
いるのか？」

ショウ「道具？そんなわけないだろう。他の団員や幹部達は、ポケモンは、道具しか見えないが俺は、ポケモンは、道具じゃないと思
うぜ。ジム戦や任務もポケモンたちが期待に答えてくれるからな」

ロツシュ「おまえもか・・・」

ショウ「お前もかつて、ロツシュもポケモンを道具じゃないと思つ
ているのか？」

ロツシュ「そうだ。意見は、お前と一緒にだ。だから他のやつらより
強いんだよ俺たちは」

ショウ「まあな」

ロツシュ「それじゃあ、タマムシジムがんばれよ」

ショウ「無理だと思っけどね。あそこ男性禁制のジムだし」

ロツシュ「それもそうか。それじゃあ、俺は、シオンに用事がある
から」

そう言つてロツシユは、リザードンを繰り出して飛び去つていった。
シヨウは、それを見送つたあと、ゲーセンをあとにした。

しかしそれを見てた人物がいた。

???「あの子達、ロケット団とは・・・。世の中悲しいですね」
着物を着た清楚な女性がそう言う。

???「さてと、もう少し調べてみますか」

そういつて着物を着た女性は、その場を去った。

28 任務の内容（後書き）

ブラック「今回は、ロケット団中心だった話だな」

まあね。

ブラック「ところで着物を着た清楚な女性は、誰なの？」

多分、ハードゴールドとソウルシルバーそれにファイヤーレッドとリーフグリーンをプレイしている人ならわかると思うけど。

ブラック「ふーん。それより次回は、どうなるだろう？」

それは、お楽しみに。

29 ゲームコーナーの秘密！

シヨウとロツシュが別れた頃ブラックは、ゲームコーナーで楽しく遊んでいた。

ブラック「ジャンジャン出てるぜコインが」

ゲームをやり始めて30分。コインは、もう1800枚出している。

ブラック「そろそろ止めようかな」

そう思った時Rのマーク入りの黒い制服を着た怪しい男がいた。

ブラック「（あれば、ロケット団じゃないか！どうしてここに）」

そう思った時だった。

???「そのあなた」

後ろから声が聞こえフツと向くと和服を着た清楚な女性と品格のいい女性がいた。

ブラック「あなた達は、誰ですか？」

???「わたくしは、エリカ。後ろにいるのは、連れのミナキです」

ブラック「えっー！！エリカとミナキってタマムシジム・・・」

ミナキ「声が大きいですよ」

ミナキは、ブラックの口を押さえる。

ブラック「それで、エリカさんとミナキさんは、ここに何しに来たんですか？」

エリカ「実は、妙な噂を聞きました」

ブラック「妙な噂？」

ナミキ「ええ。実は、ここ、ロケット・ゲームコーナーはロケット団の店だと言っているの」

ブラック「本当ですか！！」

エリカ「間違いないです。わたくしとミナキさんとともに調べましたから」

ブラック「それじゃあ早速あそこにいる団員を縛り上げて・・・」

エリカ「ちょ、ちょっと・・・」

止めようとしたエリカがブラックは、無視しロケット団のところへ行く。

下っ端A「ん？ 何だお前らは？」

ブラック「何でポスターを見張ってるんだ？」

下っ端A「何故ばれた！ 仕方ない戦ってやっつけたいところだがあいにくポケモンを持っていないからここは、ひとまず逃げるのみ」

そういつてボタンを押し隠し扉が開き階段を下りていく。

ブラック「逃がすか！」

そう言つてロケット団のあとを追うブラック。

エリカ「しょうがない子ですわ」

ナミキ「でも、なんだかサトシ君にそっくりだわ」

エリカ「そうですね。それじゃあ、わたくしたちも行きましょうか」

ナミキ「そうね」

二人もブラックを後を追うように降りていく。

一番先に降りて行つたブラックだが……。

下っ端B「進入者発見！」

下っ端C「どうやってここから入つて来た！？」

下っ端D「これ以上ボスの所まで行かさねえぜ！」

ブラック「この先にロケット団のボスがいるんだな。そこをどいてもらつぞ」

下っ端B「どけるもんならどいてみる。行くんだ、マタドガス」

下っ端C「ズバット」

下っ端D「ラッタ！」

ブラック「ミジュマル、水鉄砲」

エリカ「エルフーン、ぼうふう」

ナミキ「クレイハナ、ソーラービーム」

3匹のポケモンが一斉攻撃し下っ端達のポケモンは、完全にノックアウトされる。

下っ端達「何！？」

エリカ「エルフーン、もう一度ぼつふうですわ」

エリカは、もう一回ぼつふうを指示して下っ端達に当てる。

下っ端達「ぎゃーーーーー！！！！！！」

ドサドサドサ！

下っ端達が倒れた！

ブラツク「よし、先に進むぞ！」

エリカ「正義感がお強い方ですわ」

ナミキ「まったくだわ」

そう言つて3人は、奥へさらに進む。

しかしその先にとんでもない人物が待ち受けていたことにこのとき3人は、知るよしもなかった。

29 ゲームコーナーの秘密！（後書き）

書き終えた。

ブラック「それより誰なんだ？とんでもない人物って？」

それは、教えられないけどオリジナルロケット団団員とあの2人組を出す予定だ。

ブラック「あの2人組ってまさか！！」

それでは、次回もお楽しみに

30 新旧ロケット団登場（前書き）

今回は、予告通りあの二人組とオリジナルのロケット団員そして、
。山線トリオと三人組みが登場します。

30 新旧ロケット団登場

ブラックとエリカ、そしてミナキは、地下2階に来ていた。

ブラック「ところでロケット団のボスは、どこにいるんだろう?」

ミナキ「ボスだから多分一番下の階にいるじゃないのかな?」

エリカ「調べてみたらこの基地地下4階建てみたいですからミナキさんの言うとおりならボスは、地下4階のどこかにいると思います」

ミナキ「その前下っ端達を倒していかなきゃね」

ブラック「そうですね」

こうしてブラックとエリカ、そしてミナキも下っ端達を次から次へと撃破してついに地下3階までたどり着いた。

ブラック「よし、あと少しだ」

???・???「これ以上先には、進ません」

ミナキ「一体誰ですか!」

???「『一体誰ですか!』と聞かれたら」

???「答えるのが普通である」

???「街の破壊を防ぐため」

???「街の平和を守るため」

???「恋と信頼の悪を貫く」

???「お茶目で主人公の敵役」

???「カオリ」

???「エノモト」

カオリ「宇宙をかけぬくロケット団の二人には」

エノモト「ブラックホールの黒い明日が待ってるぜ」

ブラック「カオリとエノミヤ!」

エノモト「違うエノモトだ」

エリカ「そんなことよりあなた方。普通の下っ端のロケット団じゃありませんね」

カオリ「さすがタマムシジムのジムリーダー。勘が鋭い」

エノモト「ここから先は、進めやせん」
ブラック「邪魔をするなら意地でも通つてやる」
カオリ「できるものならやってみてみな」
エノモト「行くぞカオリ」
カオリ「任せなさい。シヤカシヤカチャーン。スモ。ライト」
エノモト「ドラ。もんか」
カオリ「ごめん。間違えたわ。はい、チェリーパイ」
エノモト「欧米か」
カオリ「ミートパイ」
エノモト「欧米か」
カオリ「チョコバー」
エノモト「欧米かつて。そんなことしている場合じゃないぞ。モン
スターボールだ。モンスターボール」
カオリ「あ！ごめんなさい。そっちね」
ブラック「どうやったら間違えるんだろう？」
ミナキ「まるでタカア。ドトシミたいだわあの二人」
エリカ「まったくですわ」
カオリ「あんなこと言われているわよエノモト」
エノモト「お前だろう。カオリ」
そうエノモトがいった時。
???「ちよつと待った」
???「私たちも参戦するわ」
エリカ「誰なんです。あなた方!？」
???「『誰なんです。あなた方!？』と聞かれたら」
???「答えないのが普通だが」
???「まあ、特別に答えてやろう!」
???「地球の破壊を防ぐため」
???「地球の平和を守るため」
???「愛と誠実な悪を貫く」
???「キュートでお茶目な敵役」

「??? ヤマト!」

「??? コサブロウ!」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の2人には」

コサブロウ「シヨッキングピンク、桃色の明日が待ってるぜ!」

ラッタ「ラッター!」

エノモト「なんだ。ヤマトにコサンジじゃないの」

コサブロウ「コサブロウだ!!!」

ヤマト「あら、久しぶりだね。エノモトに幸楽の旦那」

カオリ「角。卓造じゃねえよ!」

どこかの某の芸人のネタを使うカオリ。

ブラック「何をしてるんだかこいつらは」

エリカ「これでまた増えたら大変ですわ」

「???」まだまだいるぞ」

「???」俺たちのことを忘れちゃあ」

「???」困るぜ」

ブラック「この声!まさか・・・」

「???」『この声!まさか・・・』と聞かれたら」

「???」名乗ってあげるのが当たり前」

「???」宇宙の破壊を防ぐため」

「???」宇宙の平和を守るため」

「???」恋と成熟の悪を貫く」

「???」お茶目で恋の敵役」

「???」カミオタイ」

「???」ナカオタイ」

「???」シモオタイ」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

3人「君を待っている」

ブラック「やっぱりお前達か・・・」

カミオタイ「さてと、ここから先は、進ませない」

ナカオタイ「その通りだ」

シモオタイ「行くぞ。ヤマト、コサンジ、エノモト、幸楽の旦那」

コサブロウ「コサブロウだ!!!」

カオリ「角。卓造じゃねえよ!」

そう言いながらもカミオタイ、シモオタイは、デンチュラ×4匹を
ナカオタイは、アーボック。ヤマトは、デルビル、コサブロウは、
グラエナ。カオリは、ゴルバット、エノモトは、ミルホックを繰り
出す。

ブラック「それ、ミジュマル、ゾロアーク、チラチーノ、ルリリに
イーブイ」

エリカ「エルフーン、ワタッコ、ロズレイド、ウツボット、キレイ
ハナ、モジャンボ、出てらっしゃい」

ミナキ「メガニウム、ジユカイン、キノガッサ、チエリム、ヤナッ
キー」

ロケット団は、1匹ずつ出すに対しブラックとエリカ、ミナキは、
容赦なく5〜6匹出す。

カミオタイ「バトルは、数で勝負が決まるんだ」

エノモト「その通りだ」

コサブロウ「ここを絶対通すな」

ナカオタイ「いけ、お前達」

ブラック「ポケモンバトルは、数じゃない」

エリカ「そうですね」

ミナキ「成敗させます」

3人は、一斉攻撃しロケット団のポケモンをノックアウトKOされる。

カオリ「これってもしかして・・・」

ヤマト「そのもしかしてだ」

シモオタイ「それじゃあ、準備しておくか・・・。」

○山線トリオとヤマト、コサンジそしてタカ。シコンビは諦め気味
に言った。

エノモト「誰がタカ。シコンビだ!!!」

そうエノモトが言った時。

エリカ「皆さん。あの方々を」

ブラック「空高く」

ミナキ「飛ばしてあげなさい」

そういうとポケモンたちは、一斉攻撃し7人炸裂した。
そして・・・

。山線コンビ「やな気分」

ヤマト・コサンジ「やな気持ち」

カオリ・エノモト「やな感じ」

○山線トリオは、ヤマトたちと共に星になった。
カラーン

エリカ「なんででしょうか？この鍵・・・」

その鍵をエリカが拾ったとき・・・

???「その鍵。返してもらおうか」

ミナキ「誰ですか!？」

???「『誰ですか!？』と聞かれたら」

???「答えてあげよう明日のため」

???「キューテフルー、白い未来は、悪の色」

???「ユニバース、黒い世界に正義の鉄槌」

???「われらこの名を残す」

ムサシ「情熱の破壊者、ムサシ」

コジロウ「暗黒の純情、コジロウ」

ニヤース「無限の知性、ニヤース」

2人+1匹「さあ集えロケット団の名を元に」

そこに現れたのは、この3人組だった。

はたして一体どうなる・・・。

30 新旧ロケット団登場（後書き）

7人「コラー。作者（怒）」

げ！ロケット団だ。うるさくなるからこれでもこらえ。

ポチッ

カーン

カミオタイ「何故、タライが・・・」

ガクッ

あらら、7人全員気絶しちゃった。

ブラック「ご都合主義だね。作者は」

まあな。

ブラック「それよりあの2人がついに出てきたけどどうなるの？」

できるだけアニメと同じく誠実にするつもりだ。

ブラック「これは、大変になりそうだ・・・」

言うことで次回もお楽しみに！

31 強敵！？ムサシ・コジロウ・ニヤーストリオとボスの部屋（前書き）

1ヶ月ぶりの更新です。

31 強敵！？ムサシ・コジロウ・ニヤーストリオとボスの部屋

。山線トリオ、ヤマト・コサンジ、カオリ・エノモトを退けたブラック、エリカ、ミナキだがそこに昔は、いつもいつも吹き飛ばされていたバカ3人組からイッシュ地方以降一転して優秀なコンビとなったムサシ、コジロウ、ニヤースが登場した。

エリカ「あなた達は、以前わたくしのジムに忍び込んだロケット団じゃありませんか！？」

ムサシ「確かにタマムシジムに忍び込んだのは、我々だがあの頃と大幅に違う」

ニヤース「その証拠を見せてニヤ」

ブラック「なんだかしらねえがあいつらのように吹き飛ばしてやる。ミジュマル、ねっとうだ！！」

ムサシ「無駄だわ！コロモリ、エスラッシュ」

コロモリのエスラッシュは、ミジュマルのねっとうを打ち破りミジュマルに当たる。

ブラック「ミジュマル！？」

エリカ「確かにあの頃とずいぶん変わってるわ」

ミナキ「感心している場合じゃないわよエリカ」

エリカ「そうね。エルフィン、ワタッコ、ロズレイド、ウツボット、キレイハナ、モジャンボお願い」

ミナキ「メガニウム、ジュカイン、キノガッサ、チエリム、ヤナッキーも」

コジロウ「無駄無駄」

ムサシ「いくらジムリーダーや四天王でも草タイプじゃあ飛行タイプのコロモリに勝てないわよ」

コジロウとムサシがそう言うが・・・

ブラック「俺を忘れちゃあ困るな」

コジロウ「なっ！？」

ブラック「ゾロアーク、コロモリにイカサマ」

ムサシ「コロモリ、かぜおこし」

コロモリのかぜおこしとゾロアークのイカサマがぶつかり合いお互いダメージを食らう。

ブラック「ひっかかったな」

コジロウ「なにー!」

ニヤース「どういことニヤー!」

ブラック「お前らが戦っている隙にエリカさんとナミキさんの草ポケモンたちにソーラービームを貯めるチャンスを与えたんだよ」

ニヤース「ニヤんと!？」

そうブラックが言うともうすでに草ポケモンたちは、いつでもソーラービームが発射できる準備が出来ている。

エリカ「そうね。エルフーン、ワタツコ、ロズレイド、ウツボット、キレイハナ、モジャンボ」

ミナキ「メガニウム、ジュカイン、キノガッサ、チェリム、ヤナッキー」

エリカ・ミナキ「ソーラービーム」

そういうと草ポケモンたちは、一斉にソーラービームを発射する。すると・・・

ボーン

ソーラービーム発射直後ムサシ達は、けむりだまを投げる。

そして煙が晴れるとそこには、ムサシ達の姿がなかった。

エリカ「逃げられましたね」

ミナキ「あの三人。他の人よりなかなか優秀なメンバーだわ」

ブラック「確かに・・・」

エリカ「さあ、あの人達がいなくなりましたから先に進みましょう」

そして3人は、先へ進むとエレベーターがあった。

そこは、鍵式で鍵がなきゃエレベーターが動かない仕組みである。

ミナキ「もしかしてこの鍵かしら？」

そう言っ鍵をさすとエレベーターが動き出した。

そして最小階につくとそこに1つの部屋があった。

ブラック「ここがボスの部屋ね」

ナミキ「エリカ、ブラック君。行くわよ」

エリカ「ええ」

ブラック「いいですよ」

そして3人は、一斉に部屋に突入するが誰もいなかった。

エリカ「しまった。逃げられた後ですわ」

ブラック「どこから逃げたんだろう？」

ナミキ「とりあえず外へ出ましょう」

ブラック「そうですね」

エリカ「そうだね。ブラック君。あなた確かジム戦に挑戦しに来たんだでしたね」

ブラック「ええ」

エリカ「なら明日ジムの挑戦を受けましょう。本来タمامシジムは、男性禁制のジムですがあなたのおかげでロケット団をタمامシから追い出せることが出来ましたわ。そのお礼をこめてあなたのジム挑戦を認めましょう」

ブラック「本当ですか！？ありがとうございます」

こうしてブラックは、タمامシジムに堂々とジムに挑戦することが出来た。

果たしてどんなジム戦になるのか？

32 ショウVSエリカ

ロケット団の基地が落ちた頃、ショウは、タマムシジム前に来ていた。

ショウ「さて、ジムにきたは、いいがジム戦を受けてくれるかどうか」

タマムシジムは、男性禁制のジムとしてとても有名なジムでジムリーダーエリカの特別な許可がない限りジム戦は、受けてもらえないジムである。

???「あら？そのあなた？もしかしてジム戦に来たんですか？」
後ろから声が聞こえてショウは、振り返るとそこには、タマムシジムリーダーエリカが立っていた。

ショウ「はい。ジム戦に來ましたけどここは、男性禁制で有名なジムなのでなかなか入れなくて」

エリカ「なるほど。わかりました、ジム戦を受けましょう」

なんとエリカは、あっさりとジム戦を受け入れる。

ショウ「いいんですか!？」

エリカ「あなたのような人をジム前まで来て追いついたら可愛そうですし。さあ、どうぞ中へお入りください」

そう言われてショウは、タマムシジムに入っていった。

アキコ「お帰りなさいエリカお嬢様。その男の子は？」

エリカ「今から彼とジム戦を行うことにしました」

アキコ「わかりました。ただいまジム戦の用意をいたします」

そう言つて立ち去るアキコ。

エリカ「さあ、行きましょう」

アキコ「それでは、ただいまよりチャレンジャーショウとジムリーダーエリカによるジム戦を行う。使用ポケモンは、3体。そのうち2体が戦闘不能になった時点でバトルは、終了とします。なお、ポ

ケモンの交換は、チャレンジャーのみ認めます」

エリカ「それでは、私の最初のポケモンは、モジャンボ、出てらっしゃい」

シヨウ「なら、アゲハント」

シヨウは、アゲハントを繰り出す。

アキコ「それでは、始め」

シヨウ「アゲハント、かぜおこし」

エリカ「モジャンボ、つるのむちですわ」

アゲハントがかぜおこしを攻撃しようとした時モジャンボのつるのむちに捕まる。

エリカ「そのまま投げ飛ばしなさい」

そう言々とアゲハントは、投げ飛ばされる。

シヨウ「アゲハント、つばめがえし」

アゲハントは、壁にぶつかりそうになったが何とかこらえてモジャンボにつばめがえしを仕掛けそして当たる。

エリカ「モジャンボ!？」

シヨウ「アゲハント、そこからぎんいろのかぜ」

さらにぎんいろのかぜを仕掛けモジャンボに直撃し倒れる。

アキコ「モジャンボ、戦闘不能!アゲハントの勝ち」

エリカ「モジャンボ、ゆっくりお休み。続いては、この子です。キレイハナ、出てらっしゃい」

続いてエリカが出したのは、キレイハナである。

エリカ「キレイハナ、タネばくだん」

キレイハナは、タネばくだんを繰り出す。

シヨウ「避けるんだ、アゲハント」

アゲハントは、何とか避ける。

エリカ「キレイハナ、日本晴れ」

シヨウ「アゲハント、シャドボール」

エリカ「キレイハナ、マジカルリーフですわ」

キレイハナは、マジカルリーフを放つ。マジカルリーフは、必ず当

たる技なのでアゲハントに直撃する。虫と飛行タイプを持つアゲハントには、効果は、あまりないが日本晴れの補助で威力は、上がっている。しかしシヨウは、動じなかった。

エリカ「キレイハナ、リーフストーム」

キレイハナは、リーフストームを繰り出す。

シヨウ「この勝負もらった」

エリカ「えっ!？」

その言葉に驚くエリカ。

シヨウ「アゲハント、ソーラービーム」

なんとアゲハントがソーラービームを覚えていた。そして日本晴れの影響で瞬時に発射しリーフストームを弾き飛ばしキレイハナに当たりOKにする。

アキコ「キレイハナ、戦闘不能!アゲハントの勝ち。よって2体戦闘不能により勝者シヨウ」

エリカ「やられましたわ。まさか日本晴れを逆に利用されるとは、感服ですわシヨウ君」

シヨウ「いえいえ」

エリカ「これがレインボーバッジですわ」

そういつてシヨウは、レインボーバッジを手にしそしてタマムシジムを後にした。

エリカ「(あなたの実力とポケモンの絆は、かなりあります。あなたがロケット団の一員じゃなければ立派なトレーナーになれたでしょうに)」

そうエリカは、シヨウがロケット団の一員とわかっていた。それを知りながらジム戦を行ったのだ。

そんなことは、知らずシヨウは、先へどんどん進んだ。

33 対決！草ポケモン同士のバトル

ロケット団のアジトを潰した次の日。

ブラックとホワイトは、タマムシジムへやってきた。

ブラック「頼もう！！」

ホワイト「こんにちわ」

二人は、タマムシジムに入るとアキコがやってきた。

アキコ「あら？ ホワイトちゃん、ブラック君、来たわね。さあ、奥でエリカさんがお待ちしています」

そう言つて二人を奥の部屋へ案内した。

アキコ「エリカさん、お二人をお連れしました」

しかしエリカは、返事をしない。

アキコ「エリカさん？」

アキコは、エリカの顔を見ると・・・

エリカ「zzzzzzzz・・・」

エリカは、寝ていた。

アキコ「エリカさん、起きて下さい」

アキコは、エリカの体を揺らす。

エリカ「あら、いけない、寝てしまいましたわ・・・」

その言葉にアキコ、ブラック、ホワイトは、呆れた。

ブラック「『寝てしまいましたわ。』って・・・。俺が言うのもなんだけど、挑戦者の前で寝るもんじゃないぜ？」

ホワイト「私もそう思うわ」

エリカ「？ そうですの？」

アキコ「ごめんなさい。エリカさん、ポカポカ陽気的时候は、居眠りすることがあるので・・・」

エリカ「居眠りでは、ありません。昼寝ですわ」

ブラック「どっちも同じです」

ブラックは、エリカにツッコム。

エリカ「さて、改めて自己紹介します。私はこのタマムシジムのジムリーダー、エリカと申します。お花をいけるのが趣味でポケモンは草タイプばかり・・・」

ホワイト「わ！私も草ポケモン大好きです」

エリカ「あなたも草ポケモンがお好きなんですか!？」

ホワイト「はい。私は、草ポケモンマスターを目指しているんです。そしていつかは、ミナキさんみたいな人になるのが目標です」

エリカ「私もですよ」

二人は、草ポケモンの話題に話を始めてしまう。

ブラック「あゝ。そろそろその辺にしておいて、早いところバトルを・・・」

エリカ「そうでした。それでは、ホワイトさん、草ポケモンマスターにどちらが相応しいか勝負です」

ホワイト「望むところよ」

ブラック「何でこうなるの!？」

こうしてエリカとホワイトの草ポケモン同士の対決が始まった。

エリカ「私の一番手は、この子です」

エリカが出したのは、キノガッサである。

ホワイト「行きなさい、エルフィン」

ホワイトは、エルフィンを繰り出す。

ちなみにポケモンの使用は、3体で全て戦闘不能になった時点でバトルは、終了となる。

ホワイト「エルフィン、ぼうふう」

エルフィンは、ぼうふうを繰り出した。

エリカ「キノガッサ、スカイアッパー」

キノガッサは、スカイアッパーを繰り出すがエルフィンのぼうふうをまともに受ける。格闘と草を持つキノガッサにとって飛行技のぼうふうには、効果は、4倍である。

そしてキノガッサは、一撃で戦闘不能となる。

アキコ「キノガッサ、戦闘不能！エルフーンの勝ち」

ホワイ「さすが、お強いこと。しかし私は、負けませんわ、二番手は、ワタッコ」

エリカの二番手は、ワタッコである。

エリカ「ワタッコ、日本晴れ」

ワタッコは、日本晴れを繰り出しこれで草ポケモンたちの威力は、上がる。

ホワイ「エルフーン、ソーラビーム」

エルフーンは、ソーラビームを繰り出す。

ワタッコが日本晴れを使ったので草の威力だけでなくソーラビームを瞬時に発射できるのだ。

エリカ「ワタッコ、とびはねる」

ワタッコは、とびはねるでソーラビームを回避。

ホワイ「なっ！？」

エリカ「それでエルフーンに攻撃」

ワタッコは、エルフーンにとびはねるから攻撃し見事直撃し効果抜群である。

エリカ「私のワタッコが使った日本晴れを利用して攻撃するなんて計算のうちに入っていますわ」

そういわれホワイは・・・

ホワイ「エルフーン、ぼうふう」

ホワイは、エルフーンにぼうふうで繰り出す。

エリカ「ワタッコ、もう一度とびはねる」

ワタッコは、もう一度とびはねるを使いぼうふうを避ける。

ホワイ「しまった、エルフーン、マジカル・・・」

エリカ「遅いですわ。ワタッコ！」

ワタッコは、とびはねるでエルフーンに当て戦闘不能にさせる。

アキコ「エルフーン、戦闘不能！ワタッコの勝ち」

ホワイ「次は、この子よ」

ホワイが2体目に投げたのは、ハハコモリである。

ホワイト「ハハコモリ、むしのていこう」

ハハコモリは、むしのていこうで攻撃するが・・・

エリカ「ワタッコ、ソーラービーム」

ワタッコは、ソーラービームを発射するがハハコモリは、何とか耐えた。

しかし・・・

エリカ「油断は、大敵ですわ。ワタッコ、とびはねる」

エリカの声が聞こえ上を見るワタッコは、とびはねるを繰り返しハハコモリは、避けられずハハコモリは、倒れてしまう。

アキコ「ハハコモリ、戦闘不能！ワタッコの勝ち」

ブラック「（追い詰められたなホワイト・・・。ここまで追い詰められたのは、久しぶりだな）」

ホワイト「まだです。私のエース、シャローダ」

ホワイトの切り札というべきポケモンシャローダを繰り返した。

ホワイト「シャローダ、つばめがえし」

シャローダは、つばめがえしを繰り返しワタッコに攻撃するがワタッコは、耐えた。

エリカ「ワタッコ、ソーラービーム」

ワタッコは、ソーラービームを発射しようとするが・・・

ホワイト「シャローダ、つばめがえし」

シャローダは、もう一度つばめがえしを繰り返し倒れる。

アキコ「ワタッコ、戦闘不能！シャローダの勝ち」

エリカ「なかなか、やりますね。でしたら私の切り札は、この子です。行きなさい、クレイハナ」

エリカは、クレイハナを繰り返す。

エリカ「クレイハナ、はっぱカッター」

ホワイト「シャローダ、リーフブレード」

はっぱカッターとリーフブレードがお互いぶつかり合いダメージを与える。

エリカ「クレイハナ、ソーラービーム」

シャローダ「シャローダ、リーフストーム」

またしても同時に攻撃を仕掛け両者ともにダメージを与える。

エリカ「やりますね、ホワイトさん」

ホワイト「まだまだです。エリカさん！」

エリカ「これで終わりにします。クレイハナ、リーフブレード」

ホワイト「シャローダ、つばめがし」

お互い最後の攻撃を仕掛けそしてお互いに当たる。

ホワイト「シャローダ！」

エリカ「クレイハナ！」

そして倒れたのは・・・

クレイハナであった。

アキコ「クレイハナ、戦闘不能！シャローダの勝ち、よって勝者力

ノコタウン、ホワイト」

ホワイト「ヤッター！！」

エリカ「・・・参りましたわ。ホワイトさんと手も草ポケモンを愛し本当にお強い方ですね。このレインボーバッジを差し上げなくてはなりませんね」

ホワイト「ありがとうございます。レインボーバッジゲットで超ハッピー」

こうしてホワイトは、4つ目のバッジをゲットしたのであった。

34 ブラックVSエリカ（前書き）

久しぶりの更新です。

34 ブラックVSエリカ

タマムシジム戦は、ホワイトが見事勝利し次は、ブラックの番である。

ブラック「よろしく、お願いします。エリカさん」

エリカ「ええ、ブラックさん。でも、あなたは、昨日の件もありますからあなたの場合は、1対1の1本勝負でどうでしょうか？」

ブラック「いいですよ、別に」

エリカにそう返事をするブラック。

エリカ「それじゃあ、アキコ。よろしくね」

アキコ「はい。それでは、チャレンジャー・ブラック対タマムシジムジムリーダー・エリカの1対1の1本勝負をいたします。それでは、バトル開始！」

ついに、ブラックとエリカのタマムシジム戦が始まった。

エリカ「わたくしのポケモンは、この子です！ロズレイド」

エリカの出したポケモンは、ロズレイドである。

ブラック「俺は、こいつだ！チラチーノ」

それに対しブラックは、チラチーノを繰り出した。

エリカ「ロズレイド、エナジーボール」

ブラック「かわせ、チラチーノ！」

ロズレイドがエナジーボールを繰り出しチラチーノは、見事かわす。

ブラック「チラチーノ、ハイパーボイス！」

チラチーノは、ハイパーボイスを繰り出しロズレイドに命中する。

エリカ「ロズレイド、日本晴れ！」

ロズレイドは、日本晴れを繰り出し草の威力を上げる。

ブラック「今だ、チラチーノ。アンコール！」

エリカ「えっ！？」

エリカが驚く顔をした。

チラチーノがアンコールを繰り返してロズレイドに命中する。これで、しばらくの間日本晴れ以外の技を出すことが出来なくなった。

ブラック「チラチーノ、スリープピントでロズレイドを当てろ」

チラチーノは、スリープピントを繰り返してロズレイドに当てていく。エリカ「ロズレイド、マジカルリーフ」

しかし、アンコールの影響がまだ残っておりロズレイドは、日本晴れを繰り返してしまふ。

ブラック「チラチーノ、たたきつける！」

チラチーノは、たたきつけるを繰り返してロズレイドに当ててロズレイドは、倒れる。

アキコ「ロズレイド、戦闘不能！チラチーノの勝ち！よって、勝者チャレンジャー・ブラック」

ブラック「よっしゃ！！！！」

ブラックは、思わずおたけびを上げる。

エリカ「負けましたわブラックさん。これがレインボーバッジですわ」

エリカは、レインボーバッジをブラックに渡す。

ブラック「レインボーバッジ、ゲットだぜ！」

こうして、ブラックはレインボーバッジをゲットした。

これらの冒険は、まだまだ続く。

35 ジムリーダーの恋

ブラックとホワイトがタمامシジムをあとにした頃、エリカは、部屋であることを悩んでいた。

エリカ「なんでしよう、この胸の痛み・・・」

エリカがそう部屋の中でつぶやいた。

そんな時、エリカの弟子のジムトレーナーのアキコが入って来た。

アキコ「どうかしましたか、エリカ様？」

アキコがエリカに尋ねる。

エリカ「実は、先ほどから胸が痛くて・・・」

アキコ「胸が？いつからですか？」

エリカ「ブラックさんがジムをあとにしてからですの」

アキコ「ブラックさんがジムをあとにしてから・・・」

アキコは、エリカの話聞いてある答えを口にした。

アキコ「エリカ様。それ、もしかしたら、恋じゃないですか？」

エリカ「えっ？」

恋？

アキコの言葉がよく判らず、エリカは暫し言葉を失う。

しかし、やがてその意味がわかると……。

エリカ「——っ」

面白いくらいに、顔を真っ赤にして固まってしまった。

その様子に、アキコはただ苦笑を浮かべる。

でも、エリカが今まで恋をしたことがないから無理はない。何しろ、ここは、男性禁制のタمامシジム、男子がジム戦に訪れることは滅多にない。だから、恋することもほとんどない。一番弟子でジムトレーナーのアキコが心の中でそう思った。

アキコ「それで、どうするんですかエリカ様？このまま、エリカ様の想いをブラック君に伝えるかそれとも伝えずにその想いをエリカ様の中にしまっておくのか……どちらかの選択ですよ」

エリカ「・・・・・・・・」

エリカは、しばらく黙り込んでしまいが・・・

エリカ「アキコ。あなたにそう言われて心がスツキリしました。ブラックさんの思いをいつか伝えてみますわ」

アキコ「そうですよ、エリカ様。ブラック君にきつと想いは、伝わりますよ」

そうエリカに言ったアキコであつた。

ブラック「ヘクシユン」

ホワイト「風邪でもひいたのブラック？」

ブラック「多分、誰かが俺の噂をしているんだろう」

ホワイト「えゝ、ブラックのことを噂する人なんているのゝ」

ブラック「いるよ!!」

ホワイトにそう怒鳴って言ったブラック。

まさか、それがエリカがブラックに恋をした話とは、ブラックは、知るよしもなかった。

36 いざ！自転車ロードへ

タマムシを出発したブラックとホワイトは、次のジムがあるセキチクを目指し歩いていった。

ブラック「ホワイト、セキチクまでどのくらいかるんだ？」

ホワイト「セキチクならこの自転車ロードを下れば一日でセキチクへ着くけど、ここは、自転車専用道路だから自転車がないと通れないの」

ホワイトがそう言っただけで息をつくと言ったブラックがあることを思い出す。

ブラック「自転車？自転車なら俺持っているけど？」

ホワイト「えっ！？ブラック、自転車を持っていたの！」

ホワイトは、驚いた顔をしてブラックに言った。

ブラック「ああ。前に、ライモンシティで育て屋のおじさんがプラズマ団に襲われて、それを俺が退けさせてそのお礼として自転車をもらったけどあんまり使わなくて・・・」

ホワイトに向かってそう言ったブラック。

ホワイト「そうなんだ。よし、これで自転車ロードを下れるわ」

ブラック「でも、これ一人用だけど・・・」

ホワイト「そうなの。それじゃあ、困ったな」

そう困った顔をしたホワイト。

すると・・・

???「お譲ちゃん、そこのお譲ちゃん」

ホワイトに声をかけてきたのは、一人の老人であった。

ホワイト「私ですか？」

老人「そうじゃ。お譲ちゃん、この自転車ロードを通りたいんじゃない」

ホワイト「そうですけど・・・」

老人「自転車がほしいんならわしの自転車をくれよう。ただし、わ

しの頼みを聞いてくれたらの話じゃ」

ホワイト「頼みですか？」

老人「そうじゃ。実は、この自転車ロードにチャリンコ暴走族という悪い連中がいるのじゃ。自転車ロードに居座って道路を占領して通行人から金を巻き上げるのじゃ。わしらや通行人にとつては、いい迷惑じゃ。頼む、チャリンコ暴走族を自転車ロードから追い出してくれぬか」

老人の必死にホワイト、ブラックに頼み込む。

ホワイト「いいですよ、別に」

ブラック「いっちょ、こらしめてやりますか」

老人「ありがとう、若い人よ。それじゃあ、この自転車をくれよう。頼んだぞ」

そう言つて老人は去つて行つた。

ブラック「行くぞ、ホワイト」

ホワイト「ええ、通行人をいじめるチャリンコ暴走族をこらしめにね」

そう言つて二人は、自転車に乗り自転車ロードへと向かつた。

はたして、ホワイトとブラックは、チャリンコ暴走族を自転車ロードから追い出すことができるのか？

37 チャリンコ暴走族

ブラックとホワイトは、チャリンコ暴走族を自転車ロードから追出すため自転車ロードへと向かっていた。

ホワイト「ここが、自転車ロードね」

ブラック「早速、入ってチャリンコ暴走族を追いますか」

ホワイト「そうだね」

そう言つてホワイトとブラックは、自転車ロードへ入場し現場へ向かった。

ホワイト「気持ちいいね」

タマムシからセキチク方面は下り坂なので下るほうは、とても楽である。

そして、下り始めて少し経つと・・・

チャリンコ暴走族A「どけどけどけどけ」

通行人A「うわ！チャリンコ暴走族だ！」

通行人B「逃げろ！！」

通行人たちは、チャリンコ暴走族の姿を見るとすぐさま逃げ始めた。ブラック「あれが、チャリンコ暴走族か・・・」

ホワイト「でも、暴走族がチャリンコをこぐなんてなんか変だわね」
ブラック「イツシュの暴走族は、バイクだからにな」

チャリンコ暴走族を見ながらそう思うブラックとホワイト。

サイクリング「助けてくれ」

すると、サイクリングの一人がチャリンコ暴走族に捕まった。

チャリンコ暴走族B「おい、サイクリング。金を出しな！」

チャリンコ暴走族C「金を出さないと痛い目に遭うぞ」

サイクリング「そんな！これは、大事なお金だ！渡せるわけがない」
チャリンコ暴走族リーダー「なんだと。ふざけやがって、やろうどもこの男から金を巻き上げる」

チャリンコ暴走族達「アイアイサー！」

そう言つてチャリンコ暴走族がサイクリングから暴力を振りかけようとしたその時。

ホワイト「ドレディア、リーフストーム！」

ホワイトのドレディアがチャリンコ暴走族に向かってリーフストームを発射しチャリンコ暴走族数名が気絶した。

チャリンコ暴走族リーダー「誰だ、てめえら。俺達、チャリンコ暴走族と知つてけんかを売っているのか？小僧ども」

ブラック「金を巻き上げに通行人に暴力を振るなんて許さないぜ」

ホワイト「人に迷惑をかけるあなた達を成敗してやるわ」

チャリンコ暴走族リーダー「成敗だと！ふざけるな！やろうども、この小僧どもを叩き潰せ」

そう言つとチャリンコ暴走族二名がホワイトとブラックの前に立つ。チャリンコ暴走族A「チャリンコ暴走族の力見せてやる。行け、マタドガス！」

チャリンコ暴走族B「ドククラゲ、行け！」

ホワイト「ドレディア、行つて来て！」

ブラック「行け、ゾロアーク！」

チャリンコ暴走族は、マタドガスとドククラゲをホワイトとブラックは、ドレディアとゾロアークを繰り出した。

チャリンコ暴走族A「マタドガス、ヘドロこうげき！」

チャリンコ暴走族B「ドククラゲ、ヘドロばくだん！」

2体とも毒タイプの技を繰り出す。

ホワイト「ドレディア、まもる！」

ブラック「ゾロアーク、かわしてつばめがえし！」

ドレディアは、まもるでヘドロこうげきを受けずにすみゾロアークは、避けてつばめがえしを繰り出しドククラゲに命中する。

ホワイト「ドレディア、破壊光線！」

ブラック「ゾロアーク、ナイトバース！」

ドレディアは、破壊光線、ゾロアークはナイトバースを繰り出し反撃をし2匹の攻撃は、マタドガスとドククラゲに命中し戦闘不能と

なる。

チャリンコ暴走族A「俺達が、こんな小僧どもに負けるなんて・・・

」

チャリンコ暴走族B「俺には、もう戦えるポケモンがないよ!」

チャリンコ暴走族の二名があっさり倒されて決着が付いたと思った
がこれを見ていたチャリンコ暴走族のサブリーダーとリーダーが現
れてブラックとホワイトの方を向いて言った。

チャリンコ暴走族C「よくも可愛い子分たちを倒してくれたな!」

チャリンコ暴走族リーダー「俺達、チャリンコ暴走族のリーダーと
サブリーダーが相手にしてやるぜ」

チャリンコ暴走族サブリーダー「行け、クロバット!」

チャリンコ暴走族リーダー「ダストダス、夜露死苦!」

チャリンコ暴走族サブリーダーとリーダーは、クロバットとダスト
ダスを繰り出す。

ブラック「ゾロアーク、クロバットにイカサマ!」

ホワイト「トレディア、ダストダスにマジカルリーフ!」

先制は、ゾロアークとトレディアだった。2匹は、クロバットとダ
ストダスな技を繰り出した。

チャリンコ暴走族サブリーダー「クロバット、ヘドロばくだん!」

チャリンコ暴走族リーダー「ダストダス、おまえもヘドロばくだん
!」

クロバットとダストダスの2匹は、ヘドロばくだんを繰り出した。

ホワイト「トレディア、まもる!」

ブラック「ゾロアーク、かわすんだ!」

トレンディは、まもるでダメージを食らわずに済んだがゾロアーク
は、ヘドロばくだんを避けることが出来ず当たってしまう。

ブラック「ゾロアーク!」

チャリンコ暴走族リーダー「ダストダス、ダストシュート!」

ダストダスがダストシュートを繰り出しゾロアークに向かってきた。
するとゾロアークが技を繰り出しダストダスとクロバットに命中す

る。

ホワイト「あれは、バークアウトだわ！」

ホワイトがそう言う。

バークアウトとは、複数の相手に攻撃しつつ、相手の特攻を1段階下げるあくタイプの技である。

ブラック「いいぜ、ゾロアーク。もう一度、バークアウト！」

ゾロアークは、もう一度バークアウトを繰り出しダストダスとクロバットを当てる。

チャリンコ暴走族サブリーダー「まずいですよリーダー」

チャリンコ暴走族リーダー「弱音を吐くな。ここで、負けたらチャリンコ暴走族の名が泣くんだ。何とかして退けるんだ。ダストダス、アシッドボム！」

チャリンコ暴走族サブリーダー「クロバット、エスラッシュ」

ダストダスは、アシッドボムをクロバットは、エスラッシュを繰り出した。

ホワイト「トレディア、日本晴れでソーラービーム発射！」

ブラック「ゾロアーク、火炎放射だ！」

トレディアは、日本晴れにしてソーラービームをゾロアークは、火炎放射を繰り出した。火と草は、日本晴れの影響で威力はかなり上がっている。

そして、技がクロバットとダストダスに命中し地面にたたきつけられ、そのまま倒れ込んだ。

チャリンコ暴走族サブリーダー「クロバット！」

チャリンコ暴走族リーダー「ダストダス！」

ホワイト「私達の勝ちよ。さあさっと自転車ロードから出てもらえるかしら？」

ブラック「そして、今後一切ゆすりや暴力といった人の迷惑になる行為をしたって約束してくれるか」

チャリンコ暴走族サブリーダー「約束します・・・」

チャリンコ暴走族リーダー「二度としないと誓います」

そう言つてチャリンコ暴走族は、姿を消した。

ホワイト「これで、自転車ロードが平和になつたわね」

そうつぶやくと一人の老人がやってきた。それは、自転車ロードからチャリンコ暴走族を追い出してくれと頼んだ老人であつた。

老人「おー、見事なバトルだつた。チャリンコ暴走族を追い出してくれるとは、感謝の気持ちでいっぱいじゃ、わしは」

ブラック「そんなことはありませんよ」

老人「それで、お礼としてその自転車を改めてその若い娘にやろう。あと、これは、せんべつ餞別じゃ」

そう言つてブラックに渡したのは、やみの石である。

老人「これは、やみの石じゃ。これを特定のポケモンに当てると進化する石じゃ」

ブラック「ありがとうございます」

老人「それじゃあ、サイクリング。わしの孫娘がお金を届くのを待っているぞ」

サイクリング「あ、はい！」

そう言つて老人とサイクリングの人は、去つて行つた。

ホワイト「さて、私たちもセキチクへ行きましょうブラック」

ブラック「そうだな」

そして、ブラックとホワイトは、自転車ロードを下つて生きうつ目のバッジがあるセキチクに向かつた。

38 遂行へ

ブラックとホワイトが自転車ロードでチャリンコ暴走族を追いついた頃、シヨウは、ストンタウンにいた。ストンタウンとは、進化の石がよく見つかる有名な場所でまた最近、化石も見つかるようになった街である。

シヨウ「ここか」

シヨウがたどり着いた現場は、街から離れた現場であつた。この現場は、ロケット団が密かに掘り出している現場なので街からかなり離れたところが最適であつた。

現場監督「これはこれはシヨウ様。お越しになりましたか」

この現場監督は、シヨウが来ることを事前に知っておりわざわざ出迎えたのである。

シヨウ「出迎えご苦労様。ところで、特別な石とは、どこにあるんですか？」

現場監督「それでしたら、向こうの倉庫に保管してあります」

そう言つて現場監督は、シヨウを案内し保管庫に着くと現場監督が扉を開ける。中に入るとそこには、大量の進化の石と化石が保管してあつた。

シヨウ「こんなに、進化の石と化石が採れるのか？」

現場監督「はい。ここは、人があんまり入らない場所です、石と化石がかなり出てくるようで」

シヨウ「そうか……。それで、特別な石は？」

現場監督「これです」

そう言つて出したのは、嚴重なケースでそしてパスワードを入力し開けると特別な石が出てきた。

シヨウ「これは、隕石だな」

現場監督「はい。この石は、発掘中に出てきた石として調べてみましたらかなりの磁力があります」

そう言つて石の入ったケースを閉じた。

シヨウ「そうか。それでは、必ずゼーゲル博士のもとへお届けいたします」

現場監督「お願いいたします。あ！シヨウ様。わざわざこんなところまで来ましたならこれをお受け取りください」

そう言つて現場監督がシヨウに渡したのは、炎の石、水の石、雷の石、リーフの石、月の石、太陽の石、まんまる石、光の石、めざめ石、やみの石といった進化の石である。

現場監督「どうぞ、サカキ様に・・・」

シヨウ「わかつたわかつた。ちゃんと、良い報告をサカキ様に伝えておく」

現場監督「よろしく願います」

どうやらこの石は、サカキ様にいい報告をしてもらうためにシヨウに渡した賄賂^{わいろ}であるようだ。シヨウは、現場をあとにしてサカキ様に報告をした。

シヨウ「サカキ様。現場監督から無事に特別の石を受け取りました」
サカキ「そうか。ご苦労であつた」

シヨウ「それで、受取人のゼーゲル博士は、どちらにいらっしゃいますか？」

サカキ「ゼーゲルなら、今頃シオンタウンのポケモンタワーにいるだろう。そこへ届けくれ」

シヨウ「わかりました」

サカキ「ところで、シヨウ。セキチクのバッジは、手に入れたか？」
シヨウ「この通り」

そう言つてシヨウは、セキチクのバッジを見せる。

サカキ「さすがだなシヨウ。それより、早くシオンにそれを届けるよう頼んだぞ。私は、クチバ郊外の隠れ家にいる」

シヨウ「え！タمامシのアジトでなかつたんですか？」

サカキ「あのアジトは、タمامシのジムリーダーとカントーの四天王、それからゼクロムを持った少年によってアジトは、崩壊した。

私は、タマムシからここクチバの隠れ家に避難したのだ」

シヨウ「そうでしたか。それでは、私は、これよりシオンへ向かいます」

サカキ「頼んだぞ」

シヨウ「はっ！」

そう言ってシヨウは、電話を切りシオンへと向かった。

39 ジムの中はカラクリだらけ

自転車ロードの一件から片付いたブラックとホワイトは、セキチクに到着した。

ホワイト「ここが、セキチクね。さあ、早く！ジムへ行きましょう」
ブラック「そうだな」

ホワイトの提案にブラックも賛同してセキチクジムへと向かった。そして、自転車をこいで10分後。

ホワイト「ここが、セキチクジムね」

ブラック「早速入ろうぜ」

そう言つてブラックが戸を開けようとしたが開かなかった。

ホワイト「留守かしら？」

そう思つて戸に手をやった瞬間。

ホワイト「キャア！」

なんと、戸が回りホワイトは、その中へ入っていった。

ブラック「大丈夫か、ホワイト？」

ブラックも後に続いて入っていった。

ホワイト「大丈夫大丈夫。それより、この戸なんなのよ？」

ブラック「これ、カラクリ扉だよホワイト」

ホワイト「カラクリ扉ってあの忍者屋敷でよく出て来るあれ？」

ブラック「そうだよ。とにかくこのジム、多分何かありそうだよきつと」

ホワイト「そんなまさか・・・」

そう言つて廊下を歩こうとしたその時、電撃を浴びてしまう。

ホワイト「一体なんなの？」

そう言つてブラックが近くに来て覗いてみるとそこには、ビリリダマがいた。

ホワイト「なんなのよ、このジムは！」

ブラック「とりあえず、慎重に行こうか」

そう言つて歩き出すブラックとホワイト。それからは、罨に引つか
かることなく2階へと上がった。

ホワイト「あれから、罨らしい罨はないね」

ブラック「でも、油断するなよ。今度は、どんな罨があるかわから
ないからな」

そう言つた時だった。

???「ここまで、罨に慎重とは、おぬしもいるわね」

どこからか突然声が聞こえてきた。

ブラック「誰だ!」

そう言つた時、目の前から手裏剣が飛んで来た。

ブラック「伏せろ、ホワイト!」

そう言つてホワイトも伏せて手裏剣を避ける。

???「あたいの手裏剣を避けるなんて只者じゃないわね」

そういうと声の主が天井からしかも逆さまで登場した。

ホワイト「忍者!しかもくのいち!?あなたは、何者なの!」

???「人に質問する前にまず、自分から名乗るのが礼儀じゃない
の?」

ブラック「そうだな。俺は、ブラックだ」

ホワイト「私は、ホワイトよ」

???「あたいは、アンズ。セキチクジムリーダーよ」

ブラック「アンズか。アンズ、俺達は、君にジム戦を挑みに来たん
だ」

アンズ「ジム戦!それは、うれしいわ」

そう言つて天井から降りてくる。

ホワイト「なんで、そんなに喜ぶの?」

アンズ「だって、あなた達が最初のあたいに挑戦するチャレンジジャ
ーだもん」

ホワイト・ブラック「えーーーーー!!!!!!」

それを聞いて驚くホワイトとブラック。

ホワイト「どう言う事よそれ!」

アンズ「あたいの父上——キヨウは、セキチクジムリーダーだったけどその功績が認められてジョウトリーグの四天王に就任したの。その頃は、あたいは幼かったから父上の妹のாயさんがしばらくセキチクの代理ジムリーダーを務めていたんだ。そして、あたいもようやく一人前のトレーナーになって先日正式にセキチクジムリーダーになったってわけ」

ブラック「そうなんだ」

アンズ「そうさ。それじゃあ、早速ジム戦を行うから着いてきて」
そう言ってブラックとホワイトは、アンズの後についていった。

40 セキチクジムでタッグバトル

セキチクジムにやってきたブラックとホワイトは、新人ジムリーダーのアンズの案内でバトルフィールドに着いた。

ホワイト「さて、ルールは、どうするの？」

アンズ「ルールは、変則的なタッグバトルよ。挑戦者は、二人だからあたい一人で相手するわ」

ブラック「（今回が、ジムリーダー就任して初のバトルがタッグバトルって・・・）」

心の中でそう思うブラック。

アンズ「それで使用ポケモンは4体だけどチャレンジャー2人は、使用できるポケモンは2匹よ。これでどうかしら？」

ブラック「いいぜ。俺は！」

ホワイト「私もよ」

二人は、アンズの提案に承認する。

アンズ「それじゃあ、始めるますか。それじゃあ、あたいのポケモンは、この2匹よ！」

アンズが出したのは、ドクロッグとアリアドスを繰り出す。

ブラック「ドクロッグとアリアドス、2匹とも毒タイプか。それなら、一番手は、チラチーノ！」

ホワイト「私は、エルフーン！」

ブラックはチラチーノ、ホワイトはエルフーンを繰り出す。

審判「それでは、バトル開始！」

アンズ「それでは、先行は、そちらからで」

ブラック「それじゃあ、お言葉に甘えて。チラチーノ、スピードスター！」

ホワイト「エルフーン、マジカルリーフ！」

チラチーノとエルフーンは、ドクロッグとアリアドスに攻撃を仕掛ける。

アンス「ドクログ、ヘドロばくだん。アリアドス、ミサイルばり！」

ドクログとアリアドスは、毒タイプの技を繰り出しスピードスターとマジカルリーフを打ち消す。

アンス「アリアドス、チラチーノにダブルニードル！」

アリアドスは、チラチーノにダブルニードルを繰り出す。

ブラック「チラチーノ、あなをほるで避ける」

チラチーノは、あなをほるでダブルにニードルを避ける。

ホワイト「エルフーン、はっぱカッター！」

アンス「ドクログ、かわらわり」

エルフーンは、ドクログにはっぱカッターを繰り出すがアンスも負けずにドクログにかかわらわりを繰り出す。

ブラック「いまだ、チラチーノ！」

アンスがエルフーンに奏功そこうしているうちにチラチーノが穴から出てきてアリアドスを攻撃してアリアドスは、倒れる。

審判「アリアドス、戦闘不能！チラチーノの勝ち！」

アンス「やるわね、それでは、3番手は、この子よクロバット！」

アンスは、クロバットを繰り出す。

アンス「クロバット、エルフーンにエアスラッシュ！ドクログは、チラチーノにかかわらわり！」

アンスは、クロバットとドクログにエルフーンとチラチーノどちらも効果抜群の技を繰り出す。

ホワイト「エルフーン、まもる！」

ブラック「チラチーノ、クロバットに10万ボルト！」

エルフーンは、まもるでクロバットの攻撃を避けてチラチーノは、クロバットに10万ボルトを繰り出し当てるがそれと同時にチラチーノは、ドクログの攻撃を受けてしまう。

審判「チラチーノ、クロバット、両者戦闘不能！」

アンス「やるわね、ブラック。でも、これならどう？行くのよモルフォン！」

アンスは、最後のポケモン、モルフォンを繰り出す。

ブラック「俺の最後のポケモンは、こいつだ、ミジュマル！」

ブラックは、ミジュマルを繰り出す。

ホワイト「エルフィン、ドクロッグにぼうふう！」

エルフーンは、ドクロッグにぼうふうを繰り出し見事命中した。格闘タイプも持つドクロッグには効果抜群である。そしてドクロッグは、倒れた。

審判「ドクロッグ、戦闘不能！エルフーンの勝ち！」

ついにアンスの残りのポケモンは、モルフォン一匹となる。

アンス「まだまだよ、絶対に巻き返すわ。モルフォン、エルフーンにサイコネシス！」

ブラック「ミジュマル、エルフーンを守れ！」

ミジュマルは、サイコネシスをエルフーンの楯となるがミジュマルには、まったくダメージがなかった。

アンス「そんな！ダメージを受けないなんて……。悪タイプでない限りエスパークタイプの技……。まさか！モルフォン、そのミジュマルにぎんいろのかぜ！」

モルフォンにぎんいろのかぜを繰り出しミジュマルに当たる。そしてミジュマルは、ダメージを受けたことでイリュージョンが解け、ゾロアークの姿があらわとなった。

アンス「やっぱり、ゾロアークだったのね」

そう言うアンス。

ブラック「みやぶるとは、さすがですねアンスさん。でも、負けるわけには行きませんよ。ゾロアーク、火炎放射！」

ゾロアークは、火炎放射を繰り出す。

アンス「避けるのよ、モルフォン！」

モルフォンは、火炎放射を避ける。が……

ホワイト「エルフーン、ぼうふう！」

ゾロアークの攻撃を避けたモルフォンだがエルフーンのぼうふうがモルフォンに当たり倒れる。

審判「モルフォン、戦闘不能！エルフーンの勝ち！よって、勝者チヤレンジャー・ブラック・ホワイト！」

ブラック・ホワイト「やった！」

二人は、ハイタッチをする。

アンズ「あたいの初めてのジム戦がまさかこんな結果になるなんて・
・。あなたたち強いよね。それじゃあ、これがピンクバッジだ。
受け取りなさい」

アンズは、ピンクバッジを差し出しブラックとホワイトは、受け取る。

ホワイト・ブラック「ピンクバッジ、ゲットだ（よ）」

こうして二人は、見事5つ目バッジをゲットした。

そして、彼らの冒険は、まだまだ続く。

41 ポケモンタワー

ブラックとホワイトがセキチクジムを制覇した頃、シヨウは、シオ
ンタウンのポケモンタワー前に来ていた。このポケモンタワーは、
シンオウのロストタワー、イッシュのタワーオブヘブンと同じくポ
ケモンの墓場があり死んだポケモンを弔うための建物ある。こうい
う建物には、ゴーストタイプのポケモンがたくさん生息している。

さて、このポケモンタワーは、現在カントーラジオ局を建設する予
定となっているがポケモンたちの墓場をどこに移転するかいまだ決
まっておらず建設には、着手していない。

そんな、ポケモンタワーにロケット団の期待の星、シヨウがポケモ
ンタワーへ入っていた。

シヨウ「不気味な場所だな、ポケモンタワーは・・・」
そうつぶやくシヨウ。

シヨウ「さて、ゼーゲル博士は、どこかな？」

シヨウは、辺りを見渡しながらゼーゲルを探すと・・・

ロツシュ「久しぶりだなシヨウ」

シヨウの前に現れたのは、同じくロケット団の期待の星で幹部とし
て活動中でシヨウの親友ロツシュが現れた。

シヨウ「お、ロツシュか。久しぶりだな」

ロツシュ「タマムシ以来だからな。それより、お前はここに何しに
来たんだ？」

シヨウ「ストーンタウンで預かってきた特別の石をゼーゲル博士の
ところまで持ってきたんだ」

そう言っアタツシユケースをロツシュに見せる

ロツシュ「そうか。ゼーゲル博士なら最上階にいるよ」

シヨウ「そうか。それじゃあ、俺はこれを届けに行くか」

ロツシュ「それなら、俺も行くよシヨウ」

シヨウ「いいよ、一人で行けるから」

そう言つて断るシヨウだが・・・

ロツシュ「そうじゃないよ。実は、最上階へ行く階段付近にある亡霊が行く手を塞いでいってこのシルフスコープがない限り最上階へ行けないんだ」

シヨウ「そうか。それじゃあ、そこまで案内してくれ」

ロツシュ「分かればよろしい」

そう言つてシヨウは、ロツシュをお願いして最上階まで案内されることになった。

シヨウ「それより、ロツシュ。ゼーゲル博士は、このタワーで何をしようとしているんだ？」

ロツシュ「その事は、俺にもわからんが何かを調べているのは間違いないな」

シヨウ「そうつか・・・」

ロツシュ「それより、お前。ジムバッジは、どのくらい集まったんだ？」

シヨウ「5つだぜ」

そう言つてバッジケースをロツシュに見せる。

ロツシュ「と言うことは、残るはクチバとグレンとトキワの3つだな」

シヨウ「そういうこと。これを届けたらクチバ郊外にあるロケット団の隠れ家に行かないと」

ロツシュ「そういえば、タマムシのアジトは、タマムシのジムリーダーと四天王と例の少年につぶされたんだっけ？」

シヨウ「そうみたいだな。とりあえず、これを早く届けないと」

そう言つたシヨウは、ようやく例の亡霊が行く手を塞ぐ最上階付近の階段にやってきた。

ロツシュ「さて、片付けますか」

そう言つてシルフスコープを付けるロツシュ。シヨウには、見えな

いがどうやら、例の亡霊がシヨウとロツシュの前に現れたようだ。

ロツシュは、サザンドラを繰り出す。

ロツシュ「サザンドラ、あくのはどう!」

サザンドラは、あくのはどうを繰り出した。

ロツシュ「よし、もう言ってもいいぞ、シヨウ」

そう、シヨウに言うロツシュ。どうやら、例の亡霊を一撃でやつつけたようだ。

シヨウ「それで、ロツシュ。亡霊は、どんなだった?」

ロツシュ「ガラガラだよ。こいつがよく現れて襲い掛かるんだ。シルフスコープなしで行くと、どこにポケモンがいるか分からないから倒せないけどこれがあれば簡単に倒せるんだ。まあ、俺ぐらいになると一撃で倒せるけどな」

シヨウに向かってそう言うロツシュ。

ロツシュ「さて、亡霊を倒したからさっさとゼーゲル博士のところに向けて来いよそのケース」

シヨウ「そうだな」

そう言うシヨウは、最上階の階段を上って行った。

さて、ポケモンタワーの最上階では、ゼーゲル博士とロケット団の下っ端達は、もちろんムサシ、コジロウ、ニヤースの3人組もいた。コジロウ「ゼーゲル博士。シヨウ様が例の特別な石を持ってきました」

ゼーゲル「そうか、通してあげな」

コジロウ「はっ!」

そう言うコジロウは、シヨウを迎えに行った。そして、1分もたずコジロウは、シヨウをゼーゲルの前に連れて来た。

シヨウ「ゼーゲル博士。これが例の特別な石の入ったケースです」

そう言うシヨウは、ケースを開けてゼーゲルに中身を見せて確認する。

ゼーゲル「確かに受け取ったぞ特別な石を」

シヨウ「それでは、僕はこの辺で」

ゼーゲル「ご苦労であつた」

そして、シヨウはゼーゲル達のいるポケモンタワーの最上階をあとにした。

その後、ロツシュとともにポケモンタワーを出た。

ロツシュ「それじゃあ、俺はこの辺で失礼するよ」

シヨウ「どこか、行くところでもあるのか？」

ロツシュ「ああ、ナナシマの4の島の凍て滝の洞窟に任務に行くんだ」

シヨウ「4の島ってカントーの四天王カンナの故郷じゃないか。大丈夫か？」

ロツシュ「心配するな、カンナは、今オレンジ諸島のマンダリン島にある別荘にいるから心配はない」

シヨウ「そうか、がんばれよなロツシュ」

ロツシュ「お前もな！シヨウ。残りのバッジ手に入れなよ」

シヨウ「わかつているよ。必ず残りのバッジをゲットしてポケモンリーグに出るよ」

ロツシュ「その言葉、期待しているよ。リザードン！」

ロツシュは、リザードンを繰り出しリザードンに乗り込み、空高く上がりロツシュは、4の島へ向けてシオンをあとにした。

シヨウ「さて、俺もクチバへ行きますか。トゲキッス！」

シヨウは、トゲキッスを繰り出しシヨウは、トゲキッスの背中に乗る。

シヨウ「クチバまでお願い」

そう言ってトゲキッスは、飛び立ちシヨウは、クチバへと向かったのであった。

42 タマゴかえる

セキチクジムのピンクバッジをゲットしたブラックとホワイトは、6つ目のバッジがあるクチバシティを自転車でこいで向かっていた時だった。

ブラック「おい、ホワイト。お前のバックから何か光っているぞ」

ホワイト「え！」

そう言われてホワイトは、自転車を止めてバックから光っている物を取り出す。

ホワイト「あ！ブラック、光っているのはタマゴだわ」

ブラック「どうやら、タマゴがもうすぐ孵るようだな」

ブラックは、ホワイトにそう言った。

ホワイト「一体どんなポケモンだろう？」

ホワイトがそう言うのと光はさらに激しくなりそして・・・

「スッポミー」

タマゴから孵ってきたのは、スボミーだった。

ホワイト「かわいい」。なんだろう、このポケモン」

そう言つてホワイトは、ポケモン図鑑を取り出す。

図鑑『スボミー、つぼみポケモン。小さく丸い体つきをしており、頭頂部がねじれ、開花を控えた蕾のようになっている。体色は緑色をしており、首元には濃い緑色の模様があり、赤ん坊の前掛けのようになっている。春の時期になると、頭の蕾から花粉をばら撒き、この花粉をまともに吸うと激しくしゃみや鼻水に見舞われる。なお、冬の間は蕾を閉じている』

スボミーの特徴を聞いた後、ホワイトはスボミーの覚えている技を見る。

ホワイト「スボミーが覚えている技。すいとる、じんつつりき、タネばくだん、こうこうせい」

ブラック「このスボミー、じんつつりき、タネばくだん、こうこう

せいとか強力な技を覚えているな」

ホワイト「スポミー、よろしくね」

スポミー「スポッ！」

スポミーは、ホワイトに抱きついた。

ホワイト「かわいいわね、ホント」

そう言うホワイト。

そして、二人は再び自転車をこぎ始めクチバを目指した。

43 チケット

自転車でこいだブラックとホワイトは、クチバシテイに到着した。

ホワイト「ここが、クチバシテイか」

ブラック「よし、さっそくジムだ！」

そう言つて自転車をこいだその時、一人の老人が突然現れた。

ブラック「うわーーーー！！！！！！！！！！」

ブラックは、思わずブレーキをかけハンドルも動かし回避しようとしたが場所が悪くブラックの自転車は、ガードレールに激突しブラックは、海に放り出される。その後、ブラックは、ルリリとホワイトの活躍により救助される。

ホワイト「大丈夫、ブラック？」

ブラック「これが大丈夫に見えるか！時期が夏だったのが不幸中の幸いだ」

そうホワイトに言うブラック。

老人「本当にすまんことをした。このとおり許してくれ」

そう言つて老人が土下座をしてブラックに謝る。

ブラック「頭を上げてくださいよ。別に気にしていませんから。それより、おじさんは、何者ですか？」

老人「ワシか？ワシは、ポケモン大好きクラブの会長じゃよ」

ホワイト「ポケモン大好きクラブ会長！？また、どうしてイッシュ地方にからカントーに？」

大好きクラブ会長「お主達、イッシュから来たのか。お主達が言うイッシュのポケモン大好きクラブの会長はワシの親戚のそのまた親戚の人の分家さ。カントーのポケモン大好きクラブが本家なんじゃよ」

ブラック「そうなんだ」

そう言うブラック。

大好きクラブ会長「そうだ、お詫びの印と言つちゃ何だがこのチケ

ットをやるう」

そう言つて大好きクラブの会長が2枚のチケットをブラックとホワイトに渡す。

ホワイト「これは何ですか？」

大好きクラブ会長「これは豪華客船サント・アンヌ号のチケットじやよ。これをお前さんたちにプレゼントしよう。それにお主達にとつて得なパーティーじゃからな」

ホワイト「どう言う事ですか？」

大好きクラブ会長「実は、今回のパーティーは、結婚式が行われるんじゃ、その結婚式には各地のトレーナーはもちろんジムリーダー、四天王、チャンピオンまで参加する予定なんじゃ」

ブラック「こ、これはある意味得なパーティーだ！」

それを聞いて興奮するブラック。

ホワイト「それで、どうしてこのチケットを？」

大好きクラブ会長「実は、その結婚式の相手がワシの知り合いのオード博士と深い関わりでね。それでもらったんじゃがどうもワシはこう言うのが苦手でね。それでくれたんじゃよ」

ホワイト「そうなんですか、それで誰のけ……」

ホワイトが誰の結婚式か大好きクラブ会長に尋ねようとした時ブラック「よし、行くぞホワイト！」

そう言つてブラックがサント・アンヌ号に向かつて走り出した。

ホワイト「あ！待ってよ、ブラック」

ホワイトは、大好きクラブ会長に頭を下げてブラックを追い始めたのであった。

44 サント・アンヌ号

ポケモン大好きクラブ会長からサント・アンヌ号のチケットをもらったブラックとホワイトは、サント・アンヌ号の乗船口に来ていた。

受付「チケットを見せてください」

受付の人がそう言われてブラックとホワイトは、チケットを見せた。受付「どうぞ、お入りください」

そう言われてブラックとホワイトは、サント・アンヌ号に乗船した。ホワイト「サント・アンヌ号って思ってた以上に豪華だわ」

ブラック「それより、早いところ強いトレーナーと勝負するぞ!」

ブラックは、そう言って強いトレーナーを探し始める。

ホワイト「あ、待ってよブラック!」

ホワイトは、ブラックの後を追って行った。

その頃、クチバシティ郊外に建つロケット団の隠れ家にシヨウが到着した。そして、シヨウは玄関に立ちノックをする。

???「合言葉は?」

シヨウ「栄光あるロケット団!」

そう合言葉を言うと扉が開いて一人の女性がいた。

シヨウ「あなたは?」

???「私は、マトリです。サカキ様の秘書を勤めています。ボスのところまで案内いたします」

そう言ってマトリはシヨウをボス・サカキのところまで案内をする。そして、5分足らずでサカキのいる部屋に到着した。

コンコン

マトリ「失礼いたしますサカキ様。シヨウ様をお連れいたしました」

そう言ってマトリはサカキの部屋に入る。

サカキ「ご苦勞であった。もういいぞ」

マトリ「はっ！」

サカキにそう言われてマトリは、部屋を出て行った。

サカキ「さて、ゼーゲル博士に無事に特別な石を届けたようだな」

シヨウ「はい、サカキ様」

サカキ「さすがシヨウだ。今までの団員は、どこかマヌケで失敗することが多いがお前とロッシユは、違うな。それで今回の報酬だがこれをくれよう」

そう言つてサカキは、シヨウに1枚のチケットを渡す。

サカキ「これは、サント・アンヌ号のチケットだ。今は、各地の強いトレーナーやジムリーダーなどが集まっている。鍛えるにはとても好都合だ」

シヨウ「確かにそうですが、それだけですか？他にも何かあるのでは？」

シヨウがサカキにそうたずねるとサカキは、少し笑つて言った。

サカキ「さすがに鋭いな。実はあることをサント・アンヌ号で実行する予定だがシヨウは加わなくてもよい。君はゆっくりと楽しむがよい」

シヨウ「ちなみに決行時刻は？」

サカキ「ひとふたまるまる時に決行する」

シヨウ「そうですか。それでは、僕は、この辺で」

そう言つてシヨウは、サカキの部屋から出て行った。

さて、ブラックとホワイトは、サント・アンヌ号内でポケモンバトルをしていた。

ブラック「これで10連勝！」

ブラックは笑みを見せてそう言う。

ホワイト「それは言いとしてブラック、ポケモン達疲れているわよ」

ホワイトがそう指摘しブラックは、ポケモン達を見るとミジユマル、チラチーノ、ゾロアーク、ルリリ、イーブイは疲れていた。

ブラック「確かに。少し向こうで休憩しようか」

そう言っているとポケモン達は向こうの部屋で休むことにした。
ミジュマル「ミジュ」

するとミジュマルがみんなとは別の通路へ行ってしまう。

ブラック「あ！ミジュマルどこへ行くんだよ」

そう言っただけでブラックは、ミジュマルを追いかける。

ホワイト「ブラック！」

ホワイトもブラックの後を追いつける。ブラックのポケモン達もホワイトの後について行った。

45 研究員とポケモンコーディネーター

ブラックとホワイトは、ミジュマルを追って行った。

ブラック「こらっ、ミジュマル！」

ミジュマルに止まるよう指示するブラック。

そんな時だった。

ミジュマル「ミジユ!？」

曲がり角で一人の少年がミジュマルを捕まえた。そして、ミジュマルを追ってきたブラックとホワイトがやって来る。

ブラック「ミジュマル、ダメじゃないか！まったく。ありがと」「さいます捕まえてくれて」

???「いえいえ、どういたしまして」

そう少年が言った時だった。

???「シゲル!！」

そこに青髪のロングヘアのミニス力をはいた少女がやってきた。

???「あ、ごめんよヒカリ」

???「早くしないと披露宴が始まるわよ」

ホワイト「あの、もしかして彼女ですか？」

ホワイトが二人にたずねる。

???「それはその・・・ところであなたたちは？」

少女は話をすりかえるようにホワイトにたずねた。

ホワイト「私は、ホワイト。草ポケモンマスターを目指しているの」

ブラック「俺は、ブラックだ。よろしくな」

???「アタシは、ヒカリ。ポケモンコーディネーターよ」

???「僕は、シゲル。ポケモン研究員だ」

そう自己紹介するヒカリとシゲル。

ブラック「ところで披露宴が行われるって言ったけど誰の結婚式なの？」

ブラックがヒカリにたずねる。

ヒカリ「サトシとカスミよ」

ホワイ「あのハナダジムのジムリーダー二人がですか!？」

シゲル「そうなんだよ。二人とも先月婚約して今日結婚式兼披露宴を行っんだ。と言っても披露宴は、パーティーのようなものだけだね」

シゲルがホワイとブラックにそう言う。

ホワイ「それじゃあ、あたし達も行ってみる?」

ブラック「でも、俺達は招待客じゃないから・・・」

シゲル「そこは心配しないでくれ。僕は顔に効くから通してもらえよ」

ブラック「それじゃあ、お言葉に甘えて」

そう言ってシゲルがブラックとホワイを披露宴の会場まで案内する。

46 ライバル兼恋人

ブラックとホワイトは、シゲルとヒカリの案内で披露宴が行われている場所に案内していた時だった。

???「あれ？ヒカリじゃない」

そこに一人少女がヒカリに話しかけた。

ヒカリ「あ！ハルカ。久しぶり」

ハルカ「ヒカリこそ、久しぶりね。ミクリカップ以来かも」

ハルカがヒカリにそう言った。

ホワイト「あのヒカリさん。こちらは？」

ホワイトは、ヒカリにたずねる。

ハルカ「私は、ハルカ。ヒカリと同じコーディネーターよ」

ヒカリに代わってハルカが自身を紹介する。

ホワイト「ハルカちゃんね。私は、ホワイト。草系マスターを目指しているの」

ブラック「俺は、ブラック。よろしくな」

そう言ってホワイトとブラックは、ハルカに握手をする。

???「やれやれ、どこへ言ったかと思ったたらこんなところにいるのか」

そこに一人の少年がやって来る。

ハルカ「シュウ！」

ハルカが声をかける。

ホワイト「この人は？」

ホワイトがハルカにたずねる。

ハルカ「彼は、シュウ。私とヒカリと同じコーディネーターよ」

シュウ「初めまして、シュウと申します」

シュウがホワイトとブラックにそう紹介する。

ホワイト「私は、ホワイト。こっちは、ブラック」

ブラック「よろしく」

そうシュウに言うブラック。

ホワイト「ところで、お二人は、どういう関係なんですか？」

ホワイトがハルカとシュウにたずねるとヒカリが答える。

ヒカリ「ハルカとシュウは、ライバルでもあり恋人なのよ」

ハルカ「ちよつと、ヒカリ！」

ハルカは、赤くなりながらヒカリに言う。

ホワイト「そんな関係だったんですか。うらやましいわ、ライバル兼恋人なんて」

ホワイトがうらやましそうにそう言う。なお、ブラックは、恋愛に關しては、鈍感なため理解していないようだ。

シュウ「ところで、君たちはどうしてここにいるんだい？」

シュウがホワイトとブラックにたずねる。

ホワイト「私達、ポケモン大好きクラブの会長さんからサント・ア
ンヌ号のチケットをもらってここへ来たんです」

ブラック「そしたら、シゲルとヒカリがサトシとカスミが披露宴を
あげている言うことで行く途中なんです」

シュウ「そうなんだ」

シュウがそう言う。

そして、そのあと、ブラックとホワイトは、シゲルとシュウ、ハル
カ、ヒカリとともにサトシとカスミが披露宴を行っている場所へ再
び歩き出した。

47 披露宴への乱入者

披露宴の会場に着いたホワイとブラックは、シゲルと受付との交渉で特別に許可が下りて披露宴の中に入った。

ブラック「うわ、人がたくさんいるぜ」

ホワイ「ホントだ、有名人がたくさんいるわ」

シゲル「そうだろう、サトシとカスミちゃんは、ジムリーダーもそうだけど旅をしていた頃、いろいろな人と出会っているんだ」

ヒカリ「この会場にいるのは、サトシ、カスミの親類、親友は、もちろん、ライバルやジムリーダーや四天王、さらにチャンピオンまで招待されているんだ」

シゲルとヒカリがブラックとホワイにそう説明する。

ホワイ「ところで、肝心の本人達は、どこにいるの？」

ホワイがヒカリに聞く。

ヒカリ「あそこよ」

ヒカリが指を指すと、そこには、ドレス姿のカスミと清楚なタキシード姿のサトシがいた。

ハルカ「サトシ」

ハルカが大きい声で言うとサトシとカスミは、こっちを向いた。

サトシ「ハルカ、ヒカリ、それにシュウにシゲルまで、来てくれたんだ」

ハルカ「当たり前でしょ」

ヒカリ「サトシとカスミの結婚披露宴に欠席しないといけないのよ」
ハルカとヒカリがサトシにそう言う。

カスミ「それにしても、二人とも彼氏を持ったんだから、早く結婚したら？」

カスミがハルカとヒカリにそう言った。

ヒカリ「ちよっと、待ってよカスミ。アタシとシゲルは、そんな関係じゃ・・・」

ハルカ「じゃあ、どうしてよく、シゲルが家に出入りしているの？」
ハルカがそう聞くとヒカリは、真っ赤になる。

ヒカリ「だ、だ、だ、誰から聞いたのよ！！！！」

ハルカ「オーキド博士の助手のケンジだけど？」

ハルカが素直にヒカリに言う。

ヒカリ「（ケンジ！！！！）」

ヒカリは、心の中でケンジを恨んだ。

シュウ「そうだ、二人にお客さんが来ているよ」

サトシ「俺達に？」

シゲル「そうさ、こっちへ来ていいよ」

そう言われてブラックとホワイトは、こっちへやって来た。

サトシ「ブラック、ホワイト。どうして、ここに？」

ホワイト「実は、サントアヌ号のチケットをもらってここに入った
らシゲルとヒカリにばったりと出会って、この船で二人が披露宴を
行っていると聞いてシゲルの特別なはからいで来たの」

ホワイトがそうサトシとカスミに説明する。

カスミ「そうだったんだ」

サトシ「ところでバツジは、いくつ集まったんだ？」

サトシがブラックとホワイトにそう言う。

ブラック「今、5つバツジをゲットしたぜ」

ブラックがそう言うのとバツジケースをサトシとカスミに見せる。

???「ずいぶんと集めたね二人とも」

ホワイト「あ！あなたは、サンヨウジムジムリーダー・デントさん
じゃないですか！？どうしてここに？」

サトシとカスミの隣にいたのは、サンヨウジムジムリーダーでポケ
モンソムリエのデントであった。

デント「僕も結婚式に呼ばれたんだ」

ブラック「そうなんだ。ところでデントは、サトシとどういう関係
なんですか？」

ブラックがデントにそう聞く。

デント「昔、サトシとアイリスと一緒に旅をした関係なんだ」

デントがブラックの質問にそう答える。

ホワイト「アイリスって、ソウリュウジムのジムリーダーの？」

デント「そうさ、アイリスがまだ新人トレーナーの頃にサトシと出会って旅をしていたんだ」

デントがブラックとホワイトにそう説明する。

アイリス「あ。デント、サトシ、ここにいたのね」

噂をすればアイリスがこちらへやって来た。

アイリス「あら、ブラックにホワイト。久しぶりね」

ホワイト「お久しぶりですアイリスさん」

ホワイトが丁寧^{ていねい}にアイリスにあいさつをする。

サトシ「それにしても、育成でもバトルでも未熟だったお前がジムリーダーになったなんて、いまだに信じられないぜ」

アイリス「なんですって！いくら、先にハナダジムジムリーダーを務めているからと言って、先輩ずらししないでよ。ほっとくに子供ね」

デント「（君のほうがもっと子供なんだけどね・・・）」

デントは、呆れ顔で心の中でそうつぶやく。

エリカ「あら、ブラックさんじゃありませんか」

ブラック「エリカさん！」

そこへやって来たのは、タマムシジムジムリーダーのエリカがやって来た。

ブラック「エリカさんも結婚式に？」

エリカ「はい、ブラックさんも」

ブラック「ええ」

エリカの問いにそう答えるブラック。

エリカ「（こんなところでこんな早く再会できるなんて・・・）」

エリカは、心の中でそうつぶやく。

ブラック「どうかしたんですか、エリカさん？」

エリカ「なんでもありませんわ」

エリカは、ブラックにそう言った。

カスミ「ねえ、エリカさん。もしかして、ブラックに・・・」

アイリス「惚れているね。でも、ブラックは、ああ見えてサトシと同じくらい鈍感だからアプローチしてもそう簡単には、気づかないわね」

そう言つてアイリスは、リンゴをかじる。

デント「アイリス。物食べながら恋愛について語って欲しくないんだけど・・・」

アイリス「だって、恋愛の話をするとお腹がすくんだもん」

アイリスがデントにそうツツコンだその時だった。

突然、披露宴の会場の照明が消えた。

ホワイト「何が起きたの!」

ホワイトがそう言つと・・・

???「『何が起きたの!』と聞かれたら」

???「名乗つてあげるのが当たり前」

???「宇宙の破壊を防ぐため」

???「宇宙の平和を守るため」

???「恋と成熟の悪を貫く」

???「お茶目で恋の敵役」

???「カミオタイ」

???「ナカオタイ」

???「シモオタイ」

カミオタイ「ロケット団あるところ」

ナカオタイ「世界は」

シモオタイ「宇宙は」

3人「君を待っている」

そこに、登場したのは、かなりお久しぶりの。山線トリオであった。カミオタイ「。山線トリオじゃない!」

シモオタイ「そうだそうだ。ここ最近登場なしでかなり暇だったぜ」
すいませんね!

ホワイト「それより、何しに來たのよ!」

シモオタイ「もちろん、船の乗客からポケモンを奪うためにやって来たのだ！」

カミオタイ「ポケモンは、頂くぜ」

サトシ「そんなこと絶対にさせないぜ」

サトシがカミオタイたちにそう言うとき……

???「それは、無理だね」

ブラック「誰だ！」

ブラックがそう言うとき……

???「『誰だ!』と聞かれたら」

???「答えないのが普通だが」

???「まあ、特別に答えてやろう！」

???「地球の破壊を防ぐため」

???「地球の平和を守るため」

???「愛と誠実な悪を貫く」

???「キュートでお茶目な敵役」

???「ヤマト！」

???「コサブロウ！」

ヤマト「宇宙を駆けるロケット団の2人には」

コサブロウ「ショッキングピンク、桃色の明日が待ってるぜ！」

ラッタ「ラッター！」

ヒカリ「誰かと思ったらヤマトとコサンジじゃない」

コサブロウ「コサブロウだ！」

コサブロウは、いつものようにツッコム。

ハルカ「ところで無理って、どう言う事よ！」

ハルカの質問にヤマトが答えた。

ヤマト「この船は、我々ロケット団が占拠して船は、カントー湾の

かなり沖合いまで進んだわ」

シゲル「なんだって！」

シモオタイ「さあ、戻りたきゃあ、ポケモンを渡してもらおうか」

シモオタイがそう言うとき……

ホワイト「あなた達、バカ」

ヤマト「バカですって！」

ナカオタイ「どういうことだ！」

ヤマトとナカオタイの問いにホワイトは・・・

ホワイト「だって、この会場にいる人たちは、各地のジムリーダー、四天王、チャンピオン、それにかなり実力があるトレーナーやコ―ディネーターがいるのよ」

ホワイトの答えにロケット団は・・・

カミオタイ「しまった、すっかり忘れていた！」

コサブロウ「忘れるなよ！」

シモオタイ「どうするんだよ、四天王やチャンピオンまでいるんだ。俺達の実力じゃあ勝ち目なんてないぞ」

ナカオタイ「当たり前だよ、あそこにジョウトのチャンピオンでGメンのワタルやジョウトの四天王、カリンやシバ、カントーの四天王は、ミナキ、ダイスケ、シンオウの四天王、ゴヨウ、オーバー、キクノにジムリーダー面々に俺達が勝てるはずがない」

カミオタイ「こうなったら！やろうともであえであえ」

カミオタイが時代劇風の悪役のせりふを使って言うと入り口から大量のロケット団の下っ端がやって来た。

カミオタイ「数なら、我々のほうが多い。こいつらから力づくでポケモンを奪え！タンシオ博士のためにも！」

そう言う電話がかかってきて・・・

カミオタイ「はい、もしもし？」

タンシオ「ナンバじゃ。作者まで、間違えるでない」

すみませんでした（汗）↑by・作者

カスミ「よくも披露宴をめちやくちゃにしてくれたわね！」

サトシ「めちやくちゃにした分、たつぷりと仕返してあげるぜ」

ハルカ「私もよ！」

シュウ「僕もだ！」

ヒカリ「アタシも！」

シゲル「僕も！」

デント「同じく！」

アイリス「覚悟しなさいロケット団！」

ホワイ特「その通りよ！」

ブラック「やりますか、エリカさん」

エリカ「ええ」

サトシたちは、そう言ってボールに手をかける。

コサブロウ「やれるもんならやってみろ！」

シモオタイ「かまわん！こいつらからポケモンを力づくで奪え！」

シモオタイの声にロケット団の下っ端たちが一斉に襲い掛かった。

はたして、サトシたちは、ロケット団をやつつけることができるのか？

48 ショウとシンオウのチャンピオンマスター

ロケット団がサトシとカスミの披露宴に乱入する少し前の話、ショウは、サント・アンヌ号に乗船したから30人のトレーナーと対決し勝ち続けて30連勝する。しかし、当の本人は、満足できていなかった。

ショウ「手ごたえなしのトレーナーばかりだ。どこかに手ごたえのあるトレーナーはいないのかな？」

ショウは、30人目のトレーナーを倒したあと、手ごたえのありそうなトレーナーを探すため船の中を歩いていたら少し広い場所に出た。そこには、人の姿がなかった。

ショウ「誰もいないか。しょうがない、別の場所を・・・」

ショウは、その場を立ち去ろうとしたら、階段から女の人が降りてきた。女性はとんでもなく綺麗な女性だった。きわめて端正な顔立ちはもちろん、長い金髪は見る者を否応なく魅了するほど美しい。黒を基調とした暖かそうなコートも彼女によく似合っている。

ショウ「（あの人、てごたえがありそうなトレーナーだ。それに、このオーラ、サカキ様と同等かそれ以上ある。間違えなく、この人は、強い！）」

ショウは、心の中でそうつぶやく。

女性「あら？」

女性は、ショウの気配に気づきこちらを向く。

女性「君、もしかして、トレーナー？」

ショウ「はい」

女性の問いにそう答えるショウ。

女性「そうなんだ。君は、サトシ君やシンジ君とは、また違った瞳の持ち主ね。まあ、それは、いいとして、私は、シロナ。ポケモンの神話を調べることの大好きな考古学者よ」

ショウ「僕は、ショウです」

女性が自分から名乗ったのでシヨウも続いて自己紹介した。

シヨウ「（シロナ？どこかで聞いた事があるような・・・）」

シヨウは、シロナという名前にどこかで聞き覚えがあった。

シヨウ「（それにサカキ様と同等かそれ以上のオーラを持っている人物だ、ジムリーダーどこるかポケモンリーグの四天王クラスと言っても過言じゃ・・・）あ！」

シロナ「？。どうかした？」

突然、声を上げたシヨウにシロナがたずねる。

シヨウ「あなた、シンオウリーグ、チャンピオンマスターのシロナさん・・・」

四天王どころか、シンオウ地方での最強トレーナーであった。

シロナ「あれー？どうしてわかつちゃったの？」

心底意外だったのか、目を見開いて驚きの声を上げるシロナ。

シヨウ「前に、チャンピオン防衛線の試合の中継を見てたもんで・・・」

シロナ「そうなんだ」

シロナは、笑顔でそう答えた。

その様子は、とてもチャンピオンには見えず普通の女性そのもの。雲の上の存在だと思っていたが、今の彼女を見るといい意味で期待を裏切られた。

シヨウ「・・・ははっ」

シロナ「むっ、どうして私を見て笑うのかなー？」

シヨウ「いえ、その……チャンピオンなのに、随分普通だなんて・・・」

シロナ「当たり前です。私だってチャンピオン以前に一人の人間なんだから」

シヨウ「そうですね、すみません」

シロナ「いいのいいの。みんな私がチャンピオンだって知るとね、随分美化させて見てくるんだけど、正直そうやって見られるのは嫌なの。私はシロナっていう人間なんだから」

シロナは、シヨウにそう言う。

シロナ「そうだ、ここであつたのも何かの縁、私と勝負してみない？」

シロナがシヨウにバトルを申し込む。

シヨウ「（チャンピオンと勝負か。こういう機会は滅多にない。今の實力を試すチャンスだ！）」

シヨウは、心の中でそうつぶやいた。

シヨウ「お願いします」

シロナ「わかつたわ。それじゃあ、勝負は、1対1の一騎打ちの勝負でいいかな？」

シロナは、そう言うときシヨウは、頷いた。

シロナ「私はこのポケモンを出すわ。行きなさい、ガブリアス！！」
高らかと投げられたボールから飛び出したのは、マッハポケモンであるガブリアス。

シヨウ「いきなり、切り札ですか。それじゃあ、トゲキッス、行くんだ！」

シヨウが繰り出したのは、祝福ポケモンのトゲキッス。

シロナ「君も、トゲキッスを持っているんだ。いい勝負が期待できそうだね。それじゃあ、私から行くね。ガブリアス、かわらわり」

ガブリアスは、トゲキッスに向けてかわらわりを繰り出す。

シヨウ「トゲキッス、避けてしんそく！」

トゲキッスは、かわらわりを避けてしんそくを繰り出しガブリアスに当てる。

シロナ「なかなか、育てているわね。そのトゲキッス」

シヨウ「お褒めに預かり光栄です、シロナさん」

シロナ「それじゃあ、カブリアス、ストーンエッジ」

ガブリアスは、ストーンエッジをトゲキッスに当てる。効果は、抜群である。

シヨウ「なら、トゲキッス。エースラッシュ！」

トゲキッスは、ガブリアスにエースラッシュを繰り出す。

シロナ「カブリアス、避けてドラゴンダイブ！」

ガブリアスは、エスラッシュを避けてドラゴンダイブをトゲキッスに当てる。

シヨウ「さすが、チャンピオン。一筋縄じゃあ、いかないな。でも、トゲキッス、あさひのひざし！」

トゲキッスは、あさひのひざしを繰り出し、体力を回復させる。

シロナ「あさひのひざしを覚えているのね、そのトゲキッス。それなら、ガブリアス、かみくだく！」

カブリアスは、かみくだくを繰り出す。

シヨウ「トゲキッス、避けてげんしのちから！」

トゲキッスは、ガブリアスをうまく避けてげんしのちからを繰り出し、ガブリアスに当てる。

シロナ「強いよね、あなたのトゲキッス。なら、ガブリアス、りゅうせいぐん！」

ガブリアスは、りゅうせいぐんを繰り出した。トゲキッスは、避けることかできず命中してしまう。

シロナ「ガブリアス、ギガインパクト！」

ガブリアスは、ギガインパクトを繰り出しトゲキッスに当てる。

そして、トゲキッスは、戦闘不能となる。

シヨウ「さすが、チャンピオン。僕のポケモンを簡単に退けさせるなんて、まだまだ修行が足りないな」

シロナ「そんなことないわよ。シヨウ君のポケモンもかなり強かったわよ」

シロナがシヨウにそう言ってガブリアスを戻した。

シロナ「楽しい勝負をありがとう、こんなにワクワクしたバトルは本当に久しぶりだったわ」

シヨウ「シロナさん……」

シロナ「やっぱり貴方は素晴らしいトレーナーよ、きっといつか……そう遠くない未来、チャンピオンにだってなれるくらいに」

シロナは、シヨウにそう言う。

シロナ「それじゃあ、またどこかで会いましょう。早く戻らないと美味しいもの取られちゃうからね」

シロナは、そう言つて通路を歩いて行つた。

シヨウ「チャンピオンか。考えもしなかったよな、そんなこと・・・」

シヨウは、誰もいない場所でそうつぶやいた時だった。

???「チャンピオンになれるか。お前ならできるぜ」

シヨウ「ロッシユ！」

突然、シヨウの前に親友のロッシユが現れた。

シヨウ「いつから、ここにいたんだ？」

ロッシユ「お前とチャンピオンが一戦していたからいたよ。それにしても、相変わらずだなシロナは」

シヨウ「知っているのか？」

ロッシユ「昔、俺の親父がシロナの祖母と知り合いでな。よく、遊びに行つたもんだ。シロナは、バトルの実力とクールな性格を思わせる美貌を持っているけど性格は、正反対で尊大な面はなくて、温厚でお茶目な子供っぽく、少しだらしない所もある、ごく普通の女性でだからな」

シヨウ「そういえば、そんなこと言っていたな。それより、俺がチャンピオンになれるってどういうことだ？」

シヨウは、ロッシユにそうたずねる。

ロッシユ「お前の力は、まだまだ上がる。そうすれば、チャンピオンになれる力だってあるぜ」

ロッシユは、シヨウにそう言つた。

シヨウ「まあいいや。それより、いてだきのどうくつの任務は、どうだった？」

ロッシユ「もちろん、任務完了したぜ！あんな、簡単な任務、俺なら楽勝だから」

ロッシユは、シヨウにそう言つた時だった。

ドカーン

突然、爆発音が聞こえた。

ショウ「なんだ、今の爆発音！」

ロツシュ「どうやら、あいつら。エンジンルームを爆破したな。まったく、あとさき考えずに爆破するとは……」

ロツシュは、呆れ顔でそうつぶやいた。

ロツシュ「とりあえず、脱出するぞショウ。この船は、沈没するぞ」
ロツシュは、ショウにそう言った。

ショウ「しかし、トゲキツスが……」

ショウがそう言う、ロツシュは、げんきのかけらを取り出しトゲキツスに食べさせる。すると、トゲキツスは、元気となった。

ショウ「ありがとうな、ロツシュ！」

そう言ってショウは、トゲキツスにロツシュは、リザードンを繰り出してサントアンヌ号を脱出した。はたして、中にいる人物の運命はいかに……。

49 ロケット団四側近登場

サトシとカスミの披露宴を襲撃したカミオタイ達率いるロケット団だ。もちろん、サトシ達に返り討ちにされたのは言うまでもない。

シゲル「これで、お前達のポケモンはなくなった」

カスミ「人の披露宴をめちゃくちゃにして、覚悟はできてるわよね」カスミが怒り交じりでカミオタイ達に言う。

シモオタイ「どうするんだよカミオタイ！」

ナカオタイ「完全に追い詰められちゃったぞ！」

ヤマト「これじゃあ、いつもの」

コサブロウ「やな気持ち」

シモオタイとナカオタイが焦りながらカミオタイに言う。ヤマトとコサブロウは、いつものように飛ばされることを覚悟した。

万事休に立たされたロケット団。

その時だった。

シュウ「なんだ、急に頭がクラクラしてきた」

ハルカ「私も」

ヒカリ「同じく」

突如、頭がクラクラしてきたシュウ達。

アイリス「あたしも……」

アイリスが倒れるのをきっかけに、ジムリーダー、四天王、チャンピオン、船乗り、ポケモン達が、次々に倒れ眠りに落ちる。

サトシ「うつ、なんだ……」

ハルカ「なんだか……」

ヒカリ「……とても……」

カスミ「眠い……」

サトシが俯せに倒れ、ハルカとヒカリは、横に倒れて、カスミは、サトシの上に倒れてしまう。ホワイトとエリカは、ブラックにもたれ掛かり、まぶたをゆっくり閉じていく。他のメンバーも死んだよ

うに倒れていった。

シモオタイ「これは、一体・・・」

突然の出来事にカミオタイ達は、驚きを隠せないでいた。

???「これはこれは、パラセクトちゃん特製の睡眠胞子のエッセンスがこんなに効くなんてな」

披露宴の会場に突如、ひげの生えた男の人が入ってきた。

カミオタイ「これは、ラムダ様」

カミオタイは、頭を下げてそう言う。

コサロウブ「誰なんだあの人？」

シモオタイ「コサブロウ、知らないのか？あの方は、ラムダ様と言ってロケット団四側近の一人だぞ」

小さい声でコサブロウに言うシモオタイ。

ちなみに、ロケット団四側近とは、ボスと同様の権限を持つ最高地位である。

カミオタイ「ラムダ様、何故ここにいますでしょうか？」

ラムダ「ナラク博士の部下は、間が抜けていて作戦をいつも失敗しているやつばかりだから俺様が援軍として来たんだ。ったく、俺様が料理の中にパラセクトちゃん特製の睡眠胞子のエッセンスを入れなきゃお前たち吹っ飛ばされたところだな、俺様に感謝するんだな」それを聞いてヤマト、コサンジ、○山線トリオは、腹を立てたが相手が4側近の方のため我慢することにした。↑だからナンバじゃ！

byナンバ

ラムダ「とりあえず、眠っている間にこのガキのポケモンとそれからジムリーダー、四天王、チャンピオンのポケモンを奪ってささとずらかるぞ」

そうラムダが言った時だった。

ブラック「そうはいかないぞロケット団！」

ブラックは、そう大きい声でラムダに言う。そして、ボールからミジュマル、チラチーノ、ゾロアーク、イーブイ、ルリリを繰り出した。

ラムダ「あり？なんだいお前さん、料理を食つとらんのかい？もしかして中華料理は嫌いだったのかな？」

ブラック「いや、好きだけど、食おうとしたらその。山線トリオとヤマトとコサンジがやって来て食いそびれたのさ。まあ、今思えば助かったけどね」

ブラックがラムダにそう言う。

カミオタイ・ナカオタイ・シモオタイ「」。山線トリオって言うな！」

コサブロウ「コサブロウだー！ー！」

4人は、大きい声でブラックに言うが本人は、それを無視した。

ラムダ「しかし、お前さん。そこにいる5匹のポケモンは、さっきの戦闘でかなり疲れているようだぜ。人数の多い俺達にはたして勝ち目があるのかな？」

ブラック「それを言うなら、そちらこそさっきの戦いで。山線トリオとヤマトとコサンジに、そして下っ端達のポケモンは、全員戦闘不能にしました。お前たちこそ勝ち目が無いと思うぜ」

ブラックがラムダにそう言う。

ラムダ「確かに、お前さんの言うとおりだ。こいつらのポケモンは、全員使えない。だが、俺様がまだいる。そして何より人数は、形勢逆転でこちらが有利だぜ。そのまま大人しくしてた方が身のためだぜ」

ラムダは、ブラックにそう言う。

ブラック「それは、無理な話だぜ。だってあんたら、このまま眠った人達のポケモンとか盗むんでしょ？部屋の鍵を持ってたらその部屋へ行って金品を盗んだり・・・」

ラムダ「お、当たってる当たってる。なんだいお前さん、そういう発想出来るってんなら、俺達の仲間になんないか？出したポケモンも見たとこ、ぼちぼち鍛え上げられてるみたいだし・・・」

ブラック「悪いが俺は、こう見えて人一倍の正義感を持つ性格でね。無理な話だぜ」

ラムダ「確かにそうだな。なら、しょうがない」

ラムダがそう言うのとブラックの周りをロケット団の団員がいつの間にか取り囲む団員。

他の団員や。山線トリオとヤマトとコサブロウは、サトシ、カスミ達は、もちろん眠っているジムリーダー、四天王、チャンピオンや船員のポケモンや部屋の鍵を探して見つけては盗んでを繰り返している。

ブラック「……………」

それを見たブラックは、ポケモン達と目が合った。そして、ブラックが何かをポケモンたちに訴えて、それをどうやら理解しポケモン達は、ロケット団の団員に攻撃を仕掛けた。

ラムダ「おやおや、主人の命令無しで攻撃するとは、予想外なことしてくれるな」

ブラック「こいつらも俺と同じで正義感の強い性格だね。ほら、よく言うだろう。長く付き合ったポケモンは、トレーナーに似るって」
ブラックは、ラムダにそう言う。

ラムダ「確かに。お前さんのポケモンは、正義感があふれている。が、しかし、この人数でどこまで戦えるかな？」

ラムダは、ブラックにそう言ったがブラックには、ある作戦があった。

ブラック「ルリリ！」

ブラックがルリリを指名するとルリリは、ジャンプして団員や。山線トリオとヤマトとコサブロウ、そしてラムダが視線を上に向けた。ブラック「みずあそび！」

ロケット団下っ端A「ぐわっ！？」

ロケット団下っ端B「冷たっ！！」

ルリリは、口からスプリンクラーのように拡散して放出される水。真上を見上げていたが為に、鼻から勢い良く水が入って咳込む団員も。

ブラック「チラチーノ、10万ボルト！」

ルリリは、すばやく戻り、チラチーノが10万ボルトを繰り出した。
ラムダ「ぐおわあああ！」

下っ端達「ぎゃああああー!!」

○山線トリオ「あががが!!」

ヤマト・コサブロウ「うぎゃああああー!!」

濡れた身体に浴びせられる電気。あつという間に団員や○山線トリオとヤマトとコサブロウ、そしてラムダも力尽き、見事にロケット団を一掃する。

ロケット団下っ端C「きさまあ！」

ここで背後に飛び掛かる、眠っている乗客からポケモンを盗んでいた団員。

すると、襲ったとした団員をゾロアークが火炎放射を繰り出した。

ロケット団下っ端C「あっち、あっち、あっち」

火炎放射が服に命中して服が燃えて団員は、転げ回る。

ブラック「ありがとう、ゾロアーク」

ゾロアークに助けられてブラックは、お礼を言う。

ロケット団下っ端D「おいおい、やばくなって来たぞ」

ロケット団下っ端E「・・・こ、ここは俺達だけでも先に逃・・・」

状況がまぶくなってきたので一人の団員が盗んだポケモンや金品が大量に入り膨らんだ袋を抱え、そそくさと逃げようとする。

ブラック「逃がすか！イーブイ、たいあたり！」

ブラックは、盗んだポケモンや金品が大量に入り膨らんだ袋を抱えて逃げようとする団員の逃亡を阻止しようとイーブイにたいあたりを指示する。

ロケット団下っ端E「うぎゃあ！」

イーブイのたいあたりは、見事命中して盗んだポケモンや金品が大量に入り膨らんだ袋が団員の手から落ちる。

ブラック「今のうちに！」

ブラックは、盗んだポケモンや金品が大量に入り膨らんだ袋を拾おうとしたその時

???「ドククラゲ、その少年を叩きつける」

突然、ドククラゲが現れてブラックを叩きつける。

ブラック「誰だ！」

ブラックがそう言うのとラムダより若い男が現れた。

???「私は、ランス。ロケット団四側近の1人だ」

若い男——ランスは、ブラックにそう自己紹介する。

そして、ランスは、ラムダを見つめる。

ランス「まったく、ラムダさん。貴方がまさかこんな無様な姿を見せて、それでもロケット団四側近の1人ですか」

ランスは、ラムダにそう言う。

対するラムダは、言い返す言葉がなかった。

ブラック「チラチーノ、ハイパーボイス」

ランスがラムダに顔を向けている隙にブラックは、チラチーノにハイパーボイスを繰り出した。

ランス「ドククラゲ、避けてしめつける」

ドククラゲは、チラチーノのハイパーボイスを避けてチラチーノにしめつけるを仕掛けようとする。

すると、ミジュマルが横から入って来てシエルブレードを繰り出してドククラゲに当てる。

ブラック「ナイス、ミジュマル」

ブラックがそう言うのとミジュマルは、ホタチをポンと叩く。

ランス「むっ、やりますね。仕方ない・・・」

ブラック「よし、チラチーノ、10万ボ・・・」

ブラックは、チラチーノに10万ボルトを指示しようとした時だった。

ランス「おっと、これ以上のバトルは止めた方が良いですよ」

ブラック「・・・？」

ランスは、そう言うのがブラックは、理解できずにいた。

ランス「これをご覧なさい」

そう言うてランスは、ポケットから赤いボタンが付いた手帖てちょうサイズ

のスイッチを取り出す。

ランス「この船のエンジンルームに爆弾を仕掛けています。これを押すと・・・分かりますね？我々と共倒れで良いのなら・・・」

ブラック「・・・みんな、俺のところに来い」

ブラックは、これには手を上げてミジユマル、チラチーノ、ゾロアーク、イーブイ、ルリリを呼び戻す。

ランス「では・・・」

ランスは、そう言ってドククラゲの複数の触手が、10万ボルトでやられたラムダと団員と。山線トリオとヤマトとコサブロウとそのポケモン達、盗んだものが詰め込まれた袋を掴む。

ランス「フツ、では・・・」

スイッチを押し、足元に落として踏み潰す。

ランス「さようなら」

帽子を取るのをさよならの挨拶に去っていく。

ブラック「くそっ・・・」

ブラックは、粉々になったスイッチの元へ行く。

しかし、粉々のプラスチックだけで、部品のようなものやコードなどが一切無い。

ブラック「くそっ！騙された！」

ブラックは、そう言ってプラスチックをさらに粉々にした。

そんな時だった。

『おい、ブラック』

突如、ブラックの頭の中から声が聞こえる。

ブラック「ゼクロムか！」

ブラックにテレパシーで呼んだのは、ゼクロムだった。

ゼクロム『そのスイッチは、偽物らしいが爆弾の方はどうだ？』

ブラック「爆弾？」

ゼクロム『そうだ、そのスイッチが偽物でも爆弾は、遠隔式だけじゃない。時限式と言う可能性もある』

そう言われてブラックは、「そうだな」と心の中でつぶやきブラッ

クは、エンジンルームがある機関室に向かった。

50 ロケット団からポケモン達を取り返せ

ロケット団が去った後、ブラックは、機関室へやって来た。

ブラック「ここか・・・」

立ち入り禁止や注意事項が書かれている、灰色の重い扉が少しだけ開いている。

そっと中へ入ると、照明が着いている為に思っていたより明るいと思ったのもつかの間、赤白上下逆となった大きなモンスターボールがあった。

ブラックは、ポケットから図鑑を取り出した。

図鑑「マルマイン、ボールポケモン。電気エネルギーをためすぎてパンパンにふくらんだマルマインが風に流されて来る事がある。ちよっとした刺激で大爆発を起こす」

ブラック「だ、大爆発!？」

ブラックは、図鑑の説明文を聞いて驚くが逆に納得した。このマルマインが一つ爆発した程度では、エンジンに損傷する可能性は低いがマルマインが大量にいればエンジンを破壊するどころか壁に穴が開きそこから水が入ってきてサントアンヌ号は、沈没する危険もある。サトシたちや乗客、船乗りが眠っている今、この船を沈没させるわけにはいかない。そう思ったブラック。

ブラック「さて、こいつらをどうするか・・・」

ブラックがマルマインをどう処理しようか考え始めた時、1匹のマルマインがくると向きを変え、目を閉じて力み出すマルマインから丸い体が光り出す。

ブラック「まずい!」

ブラックは、マルマインが爆発することを察知してマルマインを蹴り飛ばしてコロコロと転がり、少し離れたところで爆発した。

ブラック「助かった・・・」

ブラックは、ホッと肩を落とすがそれもつかの間、他のマルマイン

も爆発しようとする。そんな時、1匹のポケモンがモンスターボールから出来た。

ブラック「ゼクロム!!」

モンスターボールから出て来たゼクロムは、クロスサンダーをマルマイン達に向けて放ち、それが見事命中してマルマイン達は、一撃で戦闘不能になり爆発を阻止した。

ブラック「ありがとうゼクロム」

ブラックは、ゼクロムにお礼を言ってモンスターボールに戻した。

その頃、サントアンヌ号から少し離れた上空をロケット団が保有するヘリコプターが旋回をしていた。

ヘリは、爆発の範囲外まで飛んだ後に、遠くの浮かんでいる船をじっと見ているランス。

ランス「・・・爆発がない・・・阻止された、か・・・」

爆弾がある、と見せ掛けて、偽物のリモコンで本当は爆弾は無い、と思わせ本当はあった裏の裏をかいたつもりだったランス。

ランス「（まあ盗れるものは盗れるだけ盗れたわけだ、成功で良いだろう。しかしあのマルマイン、アテナさんは使い捨てとは言ったが勿体ないような・・・フツ、貧乏性かな）」

ランスは、心の中でそうつぶやいたのであった。

ブラック「あそこか！」

ブラックは、機関室から急いでデッキに出ると「R」という字の書かれた1機のヘリコプターを発見した。しかし、ヘリコプターは、船から離れていてポケモン達の攻撃が届かない。また、追うとしても飛行ポケモンを現在手持ちに持っていないブラックには、追跡は不可である。

ブラック「くそっ、どうしたらポケモン達を・・・」

ブラックは、なんとかして取り戻そうと考えようとした時、再びゼクロムがボールから出て来た。

ゼクロム『ブラック、私ならあのヘリに簡単に追いつける、ポケモン達も奪え返せるが』

ゼクロムは、テレパシーを使いブラックにそう提案をするがブラックは、首を振った。

ブラック「それはダメだ。万が一、ロケット団がゼクロムの存在に気づけば絶対に君を狙ってくる。それだけは」

ゼクロム『心配するな。私は、そんなにへまはしないさ。それにあのサトシという少年のこともあるし』

ブラック「ゼクロム、サトシを知っているのか？」

ゼクロム『ああ、2度な。1回目は、カノコ空港で2回目は、アイントオークでな』

ゼクロムは、そんな昔話をブラックに言う。

ゼクロム『さあ、そろそろ行こうか。天気も良くないし』

ブラック「そうだな」

ブラックは、そう言ってゼクロムに乗りヘリコプターを追いかけていった。

その頃、ロケット団のヘリの中では・・・

カミオタイ「こんなにモンスターボールを手に入られるなんて」

コサブロウ「夢のようだぜ」

シモオタイ「しかも、こんなにことがうまくいくとは」

ヤマト「さすがロケット団四側近の中でイケメンのランス様だわ」

ナカオタイ「そうだな」

モンスターボールが入った袋を見てそんなことを言うカミオタイ達とヤマト、コサブロウ。

一方運転室では・・・

操縦士「ランス様、ラムダ様。天候があまり良くないので急いで基地へ戻りましょう」

ランス「そうしてくれ。それよりラムダさん、大丈夫ですか？」

ラムダ「大丈夫だよこのぐらいのケガ。傷のうちにも入らんよ」

若僧であるランスに助けられてそれが気に食わないラムダであった。

一方ゼクロムに乗っているブラックは、ヘリから気づかれないように後を追っていた。

ブラック「さて、どうやってヘリに近づいて盗んだポケモン達を取り返そうか・・・」

ブラックがヘリにどうやって近づこうか考えてた時だった。

ゼクロム『ん?』

ブラック「どうしたんだゼクロム?」

ゼクロム『何か入るぞ』

ブラック「え?」

ゼクロムが何か気配を感じてブラックにそう言ったが本人は、気づいていなくブラックは、辺りを見渡したその瞬間だった。

???「がおおおおー!!!!!!」

何かの泣き声が聞こえそれと同時に真っ赤な炎の塊がロケット団のヘリに襲う。

ランス「なんだあれは!」

操縦士「ぶ、ぶつかるー!!!!!!」

操縦士がそう言った瞬間、その塊がヘリに直撃した。

ドカーーーーーー

下っ端達・操縦士「ぎゃーーーーーあ!!!!!!」

ランス・ラムダ「うわああああ!!!!!!」

ヤマト・コサブロウ「やな気持ち」

○山線トリオ「やな気分」

キラーン

ヘリに直撃し中にいたランス、ラムダを始め下っ端達、ヤマト、コサブロウ、○山線トリオは、空のかなたまで飛んでいった。そして、ヘリコプターに積んであった盗んだポケモンや金品が大量に入り膨らんだ袋をブラックがキャッチする。

ブラック「今のは、クロスフレーム?!」

ブラックが盗んだポケモンや金品が大量に入り膨らんだ袋を抱えながらそう言う。クロスフレイムは、かなりの威力があり、さらにゼクロムのクロスサンダー直後に使った場合、威力が2倍となるのだ。この技を覚えているのは世界でたった一匹、イツシュ地方の伝説のポケモン——レシラムだけである。

ブラック「クロスフレイムは、レシラムしか覚えられない技。だとすると」

ブラックは、雲のほうを向く。するとそこに白い竜の姿が見えた。

ブラック「あれは、レシラム！ということは、あいつが・・・」

ブラックが言うあいつとは、元プラズマ団の王様——Nのことである。Nは、ポケモン解放するためレシラムを手持ちに持っていることをブラックは覚えていた。

ブラックは、レシラムを良く見るとそこには、見覚えのある姿があった。

ブラック「N！」

レシラムに乗っている人の姿は、間違えなくNである。ブラックは、そう確信する。

すると、レシラムは、どこかへ飛び出していった。

ブラック「N！」

ブラックは、そう言った時には、レシラムは、姿はなかった。

ブラック「N・・・。ありがとうな。また、どこかで会えるかな？」

Nの姿を見てブラックは、またどこかで会えるとそう確信した。

そして、ブラックは、盗んだポケモンや金品が大量に入り膨らんだ袋を持ってサントアンヌ号へ戻って行った。

51 無事に生還

サントアンヌ号はクチバシティに無事に戻ってこられて港では、ブラックをみんなが褒め称えてくれた。

サトシ「ありがとうブラック」

デント「僕達のポケモンを取り返してくれるなんて」

ブラック「そんなことはありませんよ」

ブラックは、サトシとデントにそう言う。

そんな時だった。

???「お姉ちゃん！」

???「みんな、無事か？」

ハルカ「マサト！」

サトシ「ケンジ！」

ブラックたちの前に現れたのは、マサトとケンジであった。

ホワイト「あら、マサトくん」

マサト「あ、ホワイトさんにブラックさん」

マサトは、二人がいることに気がつく。

ハルカ「あら、マサト。ホワイトとブラックと知り合いなの？」

マサト「うん。旅の途中で知り合って僕のライバルなの」

マサトがハルカにそう言う。

ケンジ「マサトは、ハルカの弟なんだ」

ケンジがそう説明する。

ホワイト「へえ、マサトはハルカちゃんの弟なんだ」

タケシ「ああ。マサトは、心優しくてかなりの頑張り屋さんなんだ」

ハルカ「あと、生意気で無邪気なところがあるのよ」

マサト「そんなことないよお姉ちゃん！」

マサトがハルカにそう言う。

ホワイト「そうなんだ」

ホワイトは、そう言う。

ブラック「ところで、マサトは今いくつバッジを集めたんだ？」

ブラックがマサトにそうたずねる。

マサト「僕は、今6個目だよ」

ホワイト「ということは、クチバジムを制したの」

ホワイトがそう聞くとマサトは、頷く。

そんな時だった。

???「サトシくん」

突然、サトシの名前が聞こえたのでサトシ達は、振り向くとそこにいたのは・・・

サトシ「べ、ベル!？」

そこに現れたのは、サトシがイッシュ地方を旅してた時に会ったトレーナー・ベルがこっちに向かって走ってきた。

ベル「久しぶりサトシく・・・あわわわわ!？」

サ「どわ!？」

ジャボーン

ベルがこっちへ勢いよく向かって来たがそのあまりにもスピードが速かったのでサトシと激突してサトシは、海へ落っこちた。

その後、カスミ達がサトシを救出したのは、言うまでもない。

ベル「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ベルが懸命にサトシに謝る。

サトシ「いいんだよベル。気にするな」

サトシがベルにそう言う。

ホワイト「ところでベル。どうしてカントーに?それとどうしてサトシと知り合いなの？」

ホワイトもブラックもベルがサトシと知り合いなことになんか疑問を感じる。

ベル「違うわよホワイトちゃんにブラック君。あなた達が知っているベルじゃないわよあたしは」

そう言うと二人は、ますます疑問を感じる。

ベル「あなた達が知っているベルは、あたしの従姉妹の方よ」

ブラック「従姉妹！？」

ホワイ「しかも同名なんて・・・」

ベルの答えにブラックは、驚きホワイはあっかんする。

アイリス「それはいいとして、ベル。あなたは、どうしてここに？」

ベル「それは、もちろんサトシ君の結婚式出席するためよ。空港についでのんびりやってきたの」

デント「相変わらずマイペースだね」

ブラック「しかも僕たちの知っているベルよりはるかにマイペースだ」

デントとブラックは、そうつぶやく。

カスミ「ねえ、サトシ。披露宴はロケット団のせいであちやくちやになっちゃったけど2次会は、ハナダでやらない」

サトシ「そうだな。そこで2次会しようか」

ハルカ「私もいくわ」

シゲル「僕もだよサトシ」

デント「デリッシャスな豪華料理を振舞うよ」

タケシ「なら俺も行くよ」

シュウ「僕も」

アイリス「あたしも」

ヒカリ「右に同じく」

ベル「あたしも行くわ」

マサト「僕も」

ハルカ以下のメンバーは、2次会へ参加を希望する。

カスミ「ブラックとホワイは？」

ホワイ「行きたいのは山々だけどジム戦したいしな」

ブラック「クチバジムのジムリーダーを倒して6個目のバッジゲットだ」

ホワイとブラックは、カスミにそういう。

サトシ「そうか。なら頑張れよ二人とも」

ブラック「もちろんだぜ」

ホワイト「マサト君。またどこかであつたらバトルしてくれる?」

マサト「もちろんだよ」

マサトは、そうホワイトに言う。

そして、サトシたちは、2次会を行うためクチバを後にしブラックとホワイトは、クチバジムへ向かうため歩き出した。

ホワイト「ところで、ブラック。どうやってロケット団からポケモンを取り返したの?」

ホワイトがブラックに聞く。

ブラック「実は、ロケット団のやつらヘリで逃亡したからゼクロムで追いかけていたんだ。そんな時、ヘリに向かってクロスフレイムが飛んできたんだ」

ホワイト「クロスフレイムが!?!」

ブラック「そして、ヘリに衝突しロケット団は空のかなたまで飛んで行ったんだ。そして、盗まれたポケモンが入った袋をキャッチしたんだ」

ブラックがそう言う。

ホワイト「飛ばされたロケット団は無事じゃあすまないだろうね」

ブラック「多分な」

ホワイトの問いに苦笑しながらそう言うブラック。

ホワイト「ところでクロスフレイムが飛んで来たって言うことは・

・・」

ブラック「ああ、レシラムがいたよそこに。そして、あいつの姿もな」

ブラックがホワイトにそう言う。

ホワイト「N・・・」

ホワイトは、心配しそうにつぶやいた。

ブラック「あいつのことを心配しているのかお前は」

ブラックの問いに思わず赤面になるホワイト。

ホワイト「そ、そんなことないわいよ!」

ホワイトは、そう否定するが顔が真っ赤であるがブラックは、それ

がなんなのか首をかしげる。

ホワイト「（よかったわブラックが鈍感で）」

ホワイトは、心の中でそうつぶやいた。

エリカ「あら、ブラックさんにホワイトさん」

ブラック「あ、エリカさん」

そこに現れたのは、タマムシジムジムリーダーのエリカさんである。
ホワイト「エリカさん、どうしてここに？」

エリカ「実は、先ほどの件でお礼を言い忘れたので」

ブラック「礼なんて、別にいいですよエリカさん」

エリカ「それでは、わたくしの気持ちが治まりませんわ。それでこれをブラックさんに」

エリカがブラックに手渡されたのはうしおのおこうであった。

エリカ「これは、うしおのおこうといひまして水タイプの技の威力が1・2倍になる効果があるんです。わたくしは草タイプのポケモンしか扱っていませんので持ってもしょうがありませんのでそれをブラックさんにお礼としてもらって欲しいのですが」

ブラック「わかりました、エリカさん。受け取りましょう」

そう言つてブラックは、うしおのおこうを受け取った。

エリカ「それからもう1つ」

ブラック「え？」

ブラックが何かを言う前にエリカの行動が早かった。

エリカは、ブラックの頬にキスをした。

エリカ「それでは、わたくしはこの辺で失礼いたしますわ」

そう言つてエリカは、去つて行つた。

ブラックは、何が起きたのか理解しておらず顔も真つ赤である。

ホワイト「ブラック、エリカさんにキスされるなんて顔も真つ赤になるなんて子供ね」

ホワイトは、アイリスの口調を真似したかのように、ブラックをからかった。

ブラック「さあ、クチバジムへ行くぞ」

ブラックは、ホワイトを無視するようにクチバジムへ向かって走り出した。

ホワイト「待ってよブラック！」

ホワイトは、ブラックを後を追うようにクチバジムへ向かったのがあった。

52 意地とプライドを賭けた一戦 ホワイトVSマチス（前編）

ブラックとホワイトは、6つ目のバッジをゲットするためクチバジムの前にやって来た。

ホワイト「ここが、クチバジムね」

ブラック「よし、6つ目のバッジゲットだ！」

そう言っただけでブラックは扉を開けた。

ブラック「頼もう！」

扉を開けた瞬間ブラックはいつもの台詞を言う。

すると奥から金髪の外人風の男性が現れた。

「???」「オー、クチバジムに挑戦しに来たトレーナーか」

ホワイト「ええ、そうですけど。あなたは、このジムのジムリーダー

」

「???」「そうデース。俺はこのジムのジムリーダー、電撃使いのマチスだぜ」

ジムリーダー・マチスはそう自分のことを紹介する。

ブラック「へえ、カミツレさんと同じ電撃使いか」

マチス「お、そのボーイ。カミツレを知っているのかい」

ブラック「ええ、カミツレさんとはライモンでジムリーダーとして

戦いました」

ブラックがマチスにそう言う。

マチス「と言うことは、ボーイとガールはイッシュ地方出身ですか？」

マチスがブラックとホワイトにたずねると二人は黙って頷いた。

マチス「そうかい。しかし、あのモデルで電撃使いのジムリーダーより俺のほうが数段上デース。それをユー達に思い知らせてやりマース」

マチスはカツミレより強いと強気な発言をブラックとホワイトに言う。

マチス「最初は誰から行きマスか？」

マチスがそう言うのとホワイトが前へ一歩出る。

ホワイト「私が最初に行きます！」

マチス「ガールからですか」

ホワイト「ええ、ここまでカミツレさんをバカにするなんて許せないわ。その言葉、私が勝つたら前言撤回してください」

ホワイトがマチスにそう言う。ホワイトは草好きだがカミツレのことをすごく尊敬していたのだ。それをバカにされたのでホワイトがブラックより先にジム戦をしようとする。

マチス「OK。ユーも男です。いいでしょう」

マチスはホワイトの提案を受け入れてジム戦が始まった。

審判「それではこれよりジムリーダー・マチスとチャレンジャー・ホワイトによるクチバジムジム戦を行います。使用ポケモンは3体、どちらかのポケモンが全て戦闘不能となった時点で試合終了となります。なお、試合中、ポケモンの交代はチャレンジャーにのみ認められます」

ホワイト「絶対にこの勝負私が勝って見せるわ」

マチス「ガール、それはこっちの台詞だぜ。俺が電撃使いナンバー1だ。やれるもんならやってみな」

ホワイトの勝利宣言に対してマチスは自分が電撃使いで1番だと言いき張る。

審判「それでは、バトル開始！」

ついにクチバジムジム戦が幕を開けた。

マチス「行け、ライボルト！」

ホワイト「行くのよ、エルフーン！」

マチスはライボルト、ホワイトはエルフーンを繰り出した。

マチス「ライボルト、でんじは！」

ライボルトは、でんじはを繰り出す。

ホワイト「エルフーン、避けてはっばカッター！」

エルフーンは、でんじはを避けてはっぱカッターを繰り出す。
はっぱカッターは見事ライボルトを命中する。

マチス「ライボルト、ほうでん」

ライボルトは無差別攻撃に等しい技、ほうでんを繰り出した。
ほうでんは、エルフーンに命中するが草に電気は効果はあまりないのでなんとか持ちこたえる。

マチス「なかなか、育っているじゃないか。そのエルフーン。だが、これはどうだ！ライボルト、オーバーヒート！」

ライボルトはほのおタイプで2番目に強いオーバーヒートを繰り出した。

これが命中すればエルフーンは大ダメージを受けてしまう。

ホワイト「エルフーン、まもるでオーバーヒートを避けるのよ」

そう言つてエルフーンは、まもるを繰り出してオーバーヒートから難を逃れた。

ホワイト「エルフーン、ソーラービーム！」

そう言つてエルフーンは、ソーラービームを貯め始める。

マチス「ライボルト、エルフーンのソーラービーム発射させるな！でんじは！」

ライボルトはでんじはをエルフーンに向けて繰り出そうとする。

ホワイト「発射！」

しかし、エルフーンのソーラービームのほうが早く繰り出し、ライボルトにそのまま命中する。

ソーラービームをまともに受けたライボルトは、倒れてしまう。

審判「ライボルト、戦闘不能！エルフーンの勝ち！」

マチス「オー、ガール。なかなか、やるじゃないか。しかし、次はどうかな？いけ、エレキブル！」

マチスが次に繰り出したのは、エレキブルだった。

ホワイト「エレキブルね。でも、どんな相手が出ようが私は負けないわ！エルフーン、エナジーボール！」

エルフーンは、エナジーボールを繰り出した。

マチス「エレキブル、エナジーボールを避けてれいとうパンチ！」
エレキブルは、エナジーボールを避けてエルフーンにれいとうパンチを繰り出す。エルフーンは、避けようとしたが間に合わず、れいとうパンチをまともに受けてしまう。

マチス「続いてクロスチョップ！」

エレキブルは、さらにクロスチョップを繰り出しエルフーンに当てる。

エルフーンは、力つき倒れる。

審判「エルフーン、戦闘不能！エレキブルの勝ち！」

マチス「ヘイ、ガール。これが俺様の实力だ。そんなことじゃあ、俺様には勝てないぜ」

マチスがホワイトにそう言う。

ホワイト「勝負は、まだ始まったばかりです。そして、私は絶対に負けないわ！行くのよ、ドレディア！」

ホワイトの2匹目は、ドレディアである。

はたして、ホワイトはマチスを退けてオレンジバッジを手に入れるのか？

53 意地とプライドを賭けた一戦 ホワイトVSマチス（後編）

クチバジムジム戦は、激戦であつた。

ホワイトはドレディアを繰り出す。

ホワイト「ドレディア、マジカルリーフ！」

ドレディアは、マジカルリーフを繰り出す。

確実に当たる技のマジカルリーフは見事エレキブルに命中する。

マチス「エレキブル、れいとうパンチ！」

エレキブルは、れいとうパンチを繰り出す。

ホワイト「ドレディア、はなびらのまい！」

ドレディアは、はなびらのまいを繰り出しエレキブルのれいとうパンチを退けさせる。

はなびらのまいは、げきりん同様続けざまにエレキブルに襲い掛かる。

マチス「エレキブル、耐えるのデース」

エレキブルは、はなびらのまいを受けながらも耐えようと必死になる。

マチスは、はなびらのまい使用後の混乱を狙っている。

そして、ドレディアのはなびらのまいを使用を終えた。しかし、ドレディアは混乱しなかった。

マチス「オー、何故混乱しないのデース」

ホワイト「この子の特性はマイペースなの。だから混乱はしないの」
ホワイトがマチスにそう言う。

マチス「しかし、俺は負けませーん。エレキブル、クロスチョップ！」

ホワイト「ドレディア、リーフストーム！」

エレキブルはクロスチョップをドレディアは、リーフストームを繰り出した。

ドレディアのリーフストームはエレキブルに命中して倒れた。

審判「エレキブル、戦闘不能！ドレディアの勝ち！」

マチス「オー、追い込まれまシタ。しかし、俺様は絶対に負けません。俺様の最後のポケモンはこいつデース。行け、ライチュウ！」
マチスが最後に繰り出したのはライチュウだった。

ホワイト「ピカチュウの進化系ね。でも、私だって負けないわ。ドレディア、エナジーボール！」

マチス「ライチュウ、電光石火！」

ライチュウは、ドレディアのエナジーボールを避けてドレディアに電光石火を当てる。

マチス「ライチュウ、10万ボルト！」

ライチュウは至近距離からドレディアに10万ボルトを仕掛ける。
ドレディアは避けることもできず命中する。電気技は草タイプには効果はいまいちだが運悪く急所に当たりドレディアは倒れてしまう。
審判「ドレディア、戦闘不能！ライチュウの勝ち！」

ホワイト「ご苦労様、ドレディア。ゆっくり休んでね」

優しい言葉をドレディアにかけてモンスターボールに戻すホワイト。
マチス「さあ、これでお互い1体ずつとなりまシタ。次は、誰ですか？」

ホワイト「私の始めてもらったポケモンで絶対的エースのこの子よ！行け、ジャローダ」

ホワイトの最後のポケモンはジャローダである。

マチス「ライチュウ、くさむすび！」

ライチュウはくさむすびを仕掛ける。

くさむすびは、体重が重ければ重いほど大ダメージを与える技である。

ホワイト「ジャローダ、避けてメロメロ！」

ジャローダは、メロメロを仕掛けてきた。

メロメロは、そのままライチュウに直撃してメロメロとなる。

マチス「ライチュウ、しっかりしろ！」

ホワイト「ジャローダ、連続でリーフブレード！」

ジャローダは、リーフブレードをライチュウに何発も当てる。

ライチュウはメロメロ状態で攻撃できず倒れてしまう。

審判「ライチュウ、戦闘不能！ジャローダの勝ち！よって、勝者チヤレンジャー・ホワイト！」

ホワイト「やった！」

ホワイトは、ジャローダに抱きつく。

マチス「オーノー！ユーの強さトウルース！つまり本物ネー！OK！オレンジバッジやるヨ！そして、カツミレをバカにしたことを謝るマース」

マチスがホワイトにそう言ってオレンジバッジを渡す。

ホワイト「ありがとうございます！」

ブラック「よかったな、これで6つ目バッジだな」

ホワイト「ホント。さあ、次はブラックの番ね」

ホワイトがブラックにそう言う。

マチス「ブラック？」

マチスがブラックの名を聞いてびっくりする。

マチス「もしかして、サント・アンヌ号の乗客たちのポケモンを取り返したのはブラックですか？」

マチスがブラックにたずねるとブラックは、すかさず頷く。

マチス「そうですか。実はあの船はこの町に寄港している間は俺の管理の担当でして、その時俺は用事でいない隙に船を奪われてしまいまシタ。これは俺のミスデース。ですから、船を取り返してもらったお礼としてこのバッジを受け取ってくだサーイ」

そう言つてマチスは、ブラックにオレンジバッジを与える。

ブラック「ジム戦無しでバッジをもらうなんて、気が引けるな」

ホワイト「いいじゃないの。あの時は私は何もできなかったんだから。ポケモン達をロケット団の手から奪い返せたのはブラックのおかげなんだから。受け取ったら」

ホワイトはブラックにそう言う。

そして、ブラックはオレンジバッジを受け取った。
こうして、6つ目のバッジを手にしたブラックとホワイト。
彼らの冒険はまだまだ続く。

54 5の島でミッション（前書き）

久しぶりにシヨウに視点を与えます。今回は久しぶりのロケット団のミッションです。果たして、どんな任務なのか？

54 5の島でミッション

ブラックとホワイトがクチバジムを制した頃、シヨウはヤマブキシ
テイのポケモンセンターで休んでいた時に1本の電話がシヨウのポ
ケギアにかかって来た。

シヨウ「もしもし、シヨウです」

サカキ「シヨウか。サカキだ」

シヨウのポケギアに入って来たのはロケット団のボス・サカキであ
った。

シヨウ「サカキ様。僕に電話をかけてきたと言うことは何か僕に任
務ですか？」

サカキ「さすがだなシヨウ、その通りだ。お前に任務だ」

サカキがシヨウにそう言う。

サカキ「実は、5の島のゴージャスリゾートである物を盗んできて
欲しい」

シヨウ「僕にですか？そんなことなら下っ端達でもできるでしょう」

サカキ「確かにそうだ。ただあそこは格の高い人ばかりで警備も
厳しい下手に進入して捕まれば警備がかなり厳しくなるだろう。だ
から、トレーナーであるお前にこの任務をやって欲しいんだ」

サカキがシヨウにそう説明した。

シヨウ「わかりました。それである物とは・・・」

シヨウはサカキに電話でそう聞くとある物を教えた。そして、ポケ
ギアを切った後、シヨウはポケモンセンターを出てトゲキッスを繰
り出して飛んで行った。

空を飛んで2時間半後、シヨウは5の島のゴージャスリゾートに到
着した。

シヨウ「ここが、ゴージャスリゾートか。アオブルコに負けず観光
客が多いけど格式が高い人ばかりだな。さて、こんなことしてい

れないぜ。まずは下見でもするか」

シヨウがそう言つて下見しようとした時だった。

ロツシュ「お、シヨウじゃないか」

シヨウ「誰かと思つたらロツシュじゃないか。どうしてここにいるんだ？」

ロツシュ「この間の件で手柄を立ててな、褒美にゴージャスリゾートのホテルのスイートルーム無料券を手に入れてな。休暇を取つてゆっくり休んでいるのさ。そう言うシヨウは、どうしてここに？」

シヨウ「ミツシヨンさ」

シヨウがロツシュだけに聞こえるぐらいの声で言う。

ロツシュ「そうか。まあ、こんなところじゃあなんだから、俺が泊まっているスイートルームで話そうか」

そう言つてシヨウはお言葉に甘えてロツシュの泊まっているホテルのスイートルームへ向かった。

ロツシュ「それで、任務つてなんだ？」

スイートルームに入った後、ロツシュがシヨウに聞いた。

シヨウ「実は、サカキ様の命令でこのゴージャスリゾートのとある別荘に「にじいろのはね」があるらしいんだ」

ロツシュ「にじいろのはねって、伝説のポケモン・ハウオウに会うことができると言われてる羽だよな。サカキ様は、ハウオウを捕まえるつもりか？」

シヨウ「いや、そうでもないらしいんだ」

ロツシュ「どういう事なんだシヨウ？」

ロツシュがシヨウにそう言う。

シヨウは、紅茶を一口飲んでシヨウは口を開いた。

シヨウ「実は、最近幹部の一人であるアポロ様がナンキン博士とその部下達と一緒に前に失敗したルギア捕獲しに行ったんだ。だけど、前と同じく邪魔が入リルギアの捕獲には失敗したがその代わりぎんいろのはねを手に入れたらしいんだ」

シヨウがそう言う。

ちなみにナンキン博士とはナンバ博士のことである。

ロツシュ「ぎんいろのはねとにじいろのはね、それを手に入れてどうするんだ？」

シヨウ「多分、サカキ様はGSボールを作る気だよ」

ロツシュ「GSボール？」

聞いたことのないモンスターボールの名を聞いて首をかしげるロツシュ。

シヨウ「GSボールは、大昔のモンスターボールらしいんだがその謎は多く今だに解明されていないけど、最近GSボールは、にじいろのはねとぎんいろのはねで作られた物だと発表されたんだ」

ロツシュ「けどよ、そのボール今だに謎の多いボールだろう。そんなボール役に立つのか？」

シヨウ「ああ。実はある古文書がシラヌイ博士によって見つけている調べた結果、GSボールのことについて書かれてあったんだ。そして、解読した結果、このGSボールはセレビィを捕まえるボールだと判明したんだ。しかも、ある場所に置けば確実に捕まえらるマスターボールよりすごいボールらしいんだ」

シヨウがロツシュにそう言う。

ロツシュ「そんなボールなんだGSボールって。それで材料となるにじいろのはねがどうしてゴージャスリゾートの豪邸にあるんだ？」

シヨウ「それが俺にもわからないんだ。まあ、とにかくその別荘からにじいろのはねを盗むのが俺の与えられた任務さ」

ロツシュ「それで、そのにじいろのはねをどこへ持っていくんだ？」

シヨウ「にじいろのはねを手に入れた後、同じく5の島にロケット団倉庫に持っていけと言う指示さ」

ロツシュ「そうか。手伝おうかシヨウ？」

シヨウ「任務だからあんまり手を貸して欲しくないけどゴージャスリゾートは別荘なんてたくさんあるからな。探すだけでも一苦労だ。それじゃあ、頼むよロツシュ」

ロツシュ「ああ。手柄は全部お前にやるよ」

そう言つてロツシュはシヨウと握手をしてさつそく実行に移すためにじいろのはねがある別荘地へ向かった。

シヨウ「さて、着いたは、いいけどどこにじいろのはねがあるんだろう。それに見つけてどうやって別荘に忍び込んでじいろのはねを盗むか」

シヨウがそうつぶやいた。どうやら予想以上に別荘があつたという風に探すか、それと見つけたらどうという風に別荘に進入するかを考えていなかったらしい。

ロツシュ「とりあえずは、しらみつぶしにを探しますか」

ロツシュがシヨウにそう言つた時だった。

とある別荘の影からオレンジ髪で服装は普通の子供が着ているような服でメガネをかけた少女が見えた。

シヨウ「どうしたんだロツシュ？」

ロツシュが何かを見つめていたことに気づいたシヨウがロツシュに聞いた。

ロツシュ「ああ、あそこに少女が・・・」

しかし、そこには少女の姿がなかった。

シヨウ「いないじゃないか」

ロツシュ「おかしいな。さっきまでいたんだが・・・」

ロツシュが首をかしげながらそう言つた。とりあえず二人は、にじいろのはねを探すために別荘地一帯を探し始めた。

シヨウ「ところで、ロツシュ。さっきお前が見た女の子ってどんな子だ？」

シヨウがロツシュにそう聞いた。

ロツシュ「ああ。オレンジ髪で服装は普通の子供が着ているような服でメガネをかけた女の子であの人気アニメシリーズ、『スイートプ。キュア』のミュ。ズの正体。コちゃんにかなり似ていたぜ」
シヨウ「ロツシュ、お前その年で『スイートプ。キュア』を見てい

るのか？それに女物なのに恥ずかしくないのか？」

ロツシュ「稀だよ見ているの」

ロツシュは、シヨウにそう言った。

すると歩いているときれいは花がたくさん咲いていた。

ロツシュ「バラにヒマワリ、チューリップか。かなり手入れしてあるな」

シヨウ「それにこの家。別荘というより屋敷だなほとんど」

シヨウが敷地に建ち建物を見てそう言った。

ロツシュ「見るよシヨウ。花の中かなりの草ポケモンがいるぜ」

シヨウ「ホントだ。キマワリ、ポポッコ、ワタッコ、タマタマ、コノハナ、チェリム、モンシヤラ、クレイハナ、リーフィアなどたくさん草ポケモンがいるな」

シヨウが庭を見てたくさん草ポケモンがいるとそう言ったその時だった。

???「キヤーーーーー！！！！」

突然、悲鳴声が聞こえた。

シヨウとロツシュが悲鳴が聞こえた場所へ急いで行くと若い女性が数人の男性に囲まれていた。

男性A「いや、グラシデアのはなはどこにあるんだ！」

男性B「ださいと痛い目に遭うぜ」

男性C「いやいや、兄貴。こいつはかなりのお金持ちのお嬢様だぜ。どこかに売り飛ばして金にした方がいいと思うぜ」

男達は、女子を囲みながらそう言った。どうやら、男性たちの話を聞くと女性はかなりのお金のある家のお嬢様らしい。ロツシュとシヨウは路地の陰に隠れながら様子をうかがっていた。

ロツシュ「どうする、シヨウ。俺達は、ロケット団だけどあの子を助けるか？」

シヨウ「助けようか。その方が知らないふりをして怪しまれるよりまだいいぜ」

ロツシュ「なら、決まりだな」

そう言つてロツシュとシヨウが路地から現れた。

シヨウ「おい、お前達。そこのお嬢さん一人を数人でよつてたかるとは恥を知れ！」

男性C「なんだと！」

男性A「てめら、ケンカ売っているのか！」

男性D「兄貴、誰か呼ばれたら面倒だぜ。やっちまいましょう！」

男性A「そうだな」

そう言つて男達は、マタドガス、スパアー、ウツボット、ドクロツグを繰り出した。

シヨウ「行こうかロツシュ」

ロツシュ「ああ、もちろんだぜシヨウ」

そう言つてロツシュはプテラをシヨウはトゲキッスを繰り出した。

男性A「お前達、あいつらを叩いてやれ！」

リーダーらしき男がマタドガス、スパアー、ウツボット、ドクロツグをプテラとドケキッスをおそいかかる。

ロツシュ「プテラ、ストーンエッジ！」

シヨウ「トゲキッス、じんつうりき！」

シヨウとロツシュが指示を出してプテラはストーンエッジ、ドケキッスはじんつうりきを繰り出してマタドガスとスパアー、ドクロツグは一撃で戦闘不能となる。

ロツシュ「プテラ、ウツボットにドラゴンクロー！」

そう言つてプテラはドラゴンクローを繰り出してウツボットをこれまた一撃で戦闘不能にさせた。

男性C「つ、強いぜ兄貴！」

男性A「だが、ポケモンバトルでは負けても格闘戦なら負けないぜ！」

そう言つて男達が一斉にシヨウとロツシュを殴りかかる。

シヨウ「トゲキッス、エアスラッシュ！」

トゲキッスはエアスラッシュを繰り出して男たちに命中して男達は一人残らず気絶した。

シヨウ「勝手にケンカを売ってきたやつに格闘戦はしない主義だよ」
シヨウが気絶している男たちに向かってそう言った。

女性「ありがとうございます。おかげで助かりました」

ロツシュ「なんのなんの」

ロツシュがそう言う。

女性「助けてもらって、お礼がしたいのでぜひ私の屋敷にお入りください」

そう言って女性は門を開ける。

ロツシュ「もしかして、お嬢さんはこの屋敷の人ですか？」

女性「はい。私はこの屋敷の娘です。あ、紹介が遅れました。私、キヨウコと申します」

ロツシュ「俺は、ロツシュ。こいつは、俺の親友のシヨウだ」

シヨウ「シヨウです」

キヨウコ「そうですか。ところでお二方は観光でこちらに？」

シヨウ「はい。親友がスイートルームのチケットを手に入れたのでここへやってきたんです」

シヨウがキヨウコにそう言った。

そして、二人はキヨウコの案内で屋敷へと入った。

キヨウコ「お茶ですがどうぞ」

キヨウコがお茶を二人に出す。

シヨウ「どうも。それにしても、珍しいですねお嬢様自らお茶出すなんて」

キヨウコ「いえいえ、お父様は考古学者で世界中を旅をしているので滅多に家には帰らないので現在はお母様とメイドさん三人で暮らしているんですけど今は、お母様は仕事でメイドさんは買い物で留守しているんです」

キヨウコがシヨウにそう言った。

すると、お茶を一口飲んだロツシュがカップをテーブルに置くと口を開いた。

ロツシュ「ところでどうしてこんなやつらにゆすられてたんだ？それにグラシデアのはなってかなり珍しい花だろう、それがどうしてあいつらに襲われるんだ？」

ロツシュがキョウコにたずねた。

キョウコ「はい、実は私の屋敷の庭にはたくさんの花が咲いているんです。草ポケモンたちがとつても手入れしてきれいな花を毎年咲かせているんです。私が丁度12才の時に知らない間にグラシデアのはなが1本咲いていたんです。それから私はその花を懸命に育てて今は毎年5本ずつ咲くようにはなりました。けれど、グラシデアのはなはかなり高価で裏ルートで売られていてそれを知った男達が私の家に押しかけてきたのです」

シヨウ「それがさっきの連中か」

シヨウがそう聞くとキョウコは頷いた。

ロツシュ「とりあえず、外で伸ばしている連中はあとでジュンサーさんに引き取ってもらって、しばらくは警備してもらえるように言つといた方がいいな」

ロツシュがそう言う。

シヨウがリビングを見渡すと1個の羽が目に入った。その羽は、虹色をした羽だった。それは、間違えなくシヨウが求めていたにじいろのはねである。

シヨウ「あのキョウコさん。あの羽は？」

シヨウがキョウコにたずねた。

キョウコ「ああ、あの羽ですか。あれは、先日お父様が家に帰ってきて私にプレゼントだと渡してくれました。あ、この羽よろしければもらっても構いませんよ」

キョウコがシヨウに言った。

シヨウ「でも、お父さんがくれたプレゼントだろう。俺みたいなやつに上げるなんて・・・」

キョウコ「いいんです。私はお父様がどんな宝物を持ってこようと私の宝はお父様一人ですから」

キョウコがそう言うてがくに入つてあつたにじいろのはねを手に入れた。

キョウコ「ああ、それとこの玉よろしければ受け取ってもらいませんか？」

そう言うてキョウコが渡したのは混合色をしている石だった。

シヨウ「これもお父様が持ってきた物ですか？」

キョウコ「いえ、これは先日閉館した館長さんがお世話になったお礼として私たちにこれをくれたんですがあつても邪魔になつたのでこれも受け取ってもらえませんか？」

キョウコがそう言うつとロッシユはその石を受け取った。

そして、しばらくしてシヨウとロッシユはキョウコの家をあとにした。ちなみに気絶していた男たちは、そのあと、ジュンサーさんに連行されたのは言うまでもない。

シヨウ「それにしてもこんなにも簡単に手に入るなんて・・・」

シヨウはにじいろのはねを眺めながらそうつぶやいた。

ロッシユ「家に忍び込んで窃盗をするよりナンボかマシだろう」

ロッシユがシヨウにそう言った。

シヨウ「そう言うつロッシユこそ、ちゃっかりグラシデアのはねをもらいやがつて。それ、本部に渡すか？」

ロッシユ「いいだろう、これはお礼でもらつたんだ。それにこの花は本部に渡すつもりもないさ。それよりこの石どうする？」

シヨウ「一応本部にお土産代わりに持つていくか」

シヨウが混合色をした石を受け取った瞬間、

ロッシユ「そこにいるのは誰だ！」

突然ロッシユが大きい声で言った。後ろを向くと誰もいないがしばらくすると木の陰からオレンジ髪で服装は普通の子供が着ているような服でメガネをかけた女の子が現れた。

ロッシユ「お前は、あの時の！」

シヨウ「もしかして、こいつか。『スイートプ。キュア』のミユ。

ズの正体。コちゃんにかなり似ている女の子って？」

シヨウがロツシュに言う。

ロツシュは黙って頷いた。シヨウは、スイートプ。キュア自体を見ないのでそのキャラがどんな人か分からないので首をかしげるだけだった。

ロツシュ「それにしても似ている、いや、似すぎだぜ」

シヨウ「でも、こんな世の中に2次元キャラに似ている人がいるなんてありえない。絶対にポケモンだなこの仕業は」

シヨウがロツシュにそう言った。

ロツシュ「とすると、ゾロアかゾロアーク、またはメタモンか・・・

」

ロツシュが女の子の正体を考えた時だった。女の子の腕から塊が放たれた。シヨウとロツシュは慌ててかわした。

ロツシュ「人間の姿のままでポケモンの技を出すなんて・・・」

ロツシュが言ってモンスターボールに手をかけた時だった。

シヨウ「ロツシュ、わかったぜあいつの正体！」

ロツシュ「え！わかったのかシヨウ！」

シヨウの発言に驚くロツシュ。

シヨウ「ああ、世の中でゾロアやゾロアーク、メタモン以外にも人に化けるポケモンがいたぜ！」

そう言ってシヨウがミジュマルを繰り出す。

シヨウ「ミジュマル、れいとうビーム！」

そう言ってミジュマルはれいとうビームを繰り出して女の子に当てる。すると女の子からポケモンの姿に変わった。

ロツシュ「こいつは！」

ポケモンを見てロツシュは驚いた。

シヨウ「そう。ゾロアやゾロアーク、メタモン以外に人に化けるポケモン、ラティアスとラティオスだ。そして、先撃つたのは、ミストボール。その技を使えるのはラティアスだけだ！」

そう女の子に化けていたのは伝説のポケモン・ラティアスであった。

ロツシュ「でも、どうしてこんなところにラティアスがいるんだろう？」

そう疑問に思った時、ラティアスが目を覚ました。

ショウ「さっきは、すまないな。君が突然、ミストボールを撃ってきたのでこっちも反撃でれいとうビームを撃ったけど大丈夫か？」

そう聞くとラティアスは首を振った。

話は分からないがどうやら遊び半分で俺達を影からこっそりつけたり、攻撃したらしい。

すると、ラティアスとロツシュが目が合った瞬間、ラティアスがいきなりロツシュに抱きついた。

ロツシュ「おい、なんだよいきなり！」

突然の出来事に混乱するロツシュ。

ショウ「はは、さてはラティアス。ショウのことが気に入ったな」
そう言つとラティアスが思いつきり首を縦に振った。

ショウ「だって。どうするロツシュ。ドラゴン使いのお前ならラティアスは持っていて損はないと思うが・・・」

ショウがロツシュにそう言った。

ロツシュ「確かに、ドラゴン使いに俺にしてみればラティアスは手持ちにしたいな」

ロツシュはそう言つて懷からモンスターボールを取り出す。するとラティアスがそれに触れてボールの中に入りあっさりとゲットしてしまう。

ショウ「さてと、俺はロケット団倉庫へ向かうけどおまえはどうするロツシュ？」

ロツシュ「俺はもうしばらくゴージャスリゾートでのんびり過ごさよ」

ショウ「そうか」

そう言つてショウはトゲキスを繰り出して背中に乗りそして飛び去りゴージャスリゾートをあとにした。そして、ロツシュはホテルへと帰って行ったのであった。

55 幽霊騒動

オレンジバッジを手に入れたホワイトとブラックは、7つ目のバッジがあるグレン島を目指すためグレン島直行の船が出ているセキチクへ再び向かうためクチバシティをあとにしようとした。

ブラック「おい、ホワイト。セキチクまで自転車勝負だ！」

ホワイト「えー、なんでセキチクまであんたと自転車勝負しなきゃいけないのよ！」

ブラック「いいじゃねえか。さあ、行くぞよーい……」

ブラックはホワイトの意見を完全に無視した形で自転車勝負を始めるようにした時だった。

???「あ、ホワイトさんにブラックさん」

ホワイト「あ、アンズちゃん」

ブラックとホワイトに声をかけてきたのは、セキチクジムリーダー・アンズであった。

ホワイト「久しぶりねアンズちゃん。ところで、どうしてここに？」

ホワイトがアンズに聞く。

アンズ「忍びの仕事です。実はここ最近、シオンタウンで幽霊が現れるという噂があつて、あたいが直々に調べに行くところよ」

アンズがホワイトに言う。

ブラック「（忍びに関する仕事をこつとも簡単に話すなんてアンズちゃん、忍び失格だぜ……）」

ブラックが心の中でそうつぶやいた。

ホワイト「幽霊ね。面白そうだから行ってみないブラック？」

ホワイトがブラックにそう言う。

ブラック「な、なに言っているんだよほ、ホワイト。おおお俺達は、グレン島へ行って7つ目のバッジを手に入れないぜ。よ、寄り道している暇はないぜ」

ブラックは、震えながらそう言った。

ホワイト「相変わらずだねブラック。顔に分かりやすいわよ、大の男が幽霊を怖がってどうするのよ」

ホワイトがブラックに言う。

アンズ「ブラックさん、幽霊ダメなんですか？」

ホワイト「ええ。昔幼馴染と一緒に肝試しした時にゴーストポケモンにかなり驚かされて気絶する始末でおまけに怪談話であまりにも怖すぎて漏らしちゃうこともあってね。それ以来、幽霊とゴーストポケモンがダメなのよ」

ホワイトが笑みでアンズに言う。

ブラック「そ、それは幼い頃の話だろう！い、今は大丈夫だぜ！さあ、行こうかシオンタウンへ」

そう言ってブラックは自転車をこいでシオンへと向かった。

ホワイト「相変わらず無理に張っちゃって」

そう言ってホワイトもブラックを追うようにシオンへ向かった。そして、アンズも忍びらしく木から木に飛び移りながらシオンへ向かって行った。

ホワイト「到着！」

1時間、自転車をこいだホワイトとアンズはシオンへ到着した。そして、ブラックもホワイトとアンズに追いつきシオンに到着した。

ホワイト「ブラック、遅いわよ。先につっぱして行ったくせに・・・」

ブラック「途中でバテたんだよ！」

ブラックはホワイトにそう言う。

かなりの見苦しい言い訳であった。

ホワイト「とりあえず、まずは情報収集ね」

アンズ「その意見にはあたいは賛成です」

ブラック「俺もだ」

と言うことでホワイトとブラック、アンズは幽霊騒動の原因を調べるためまずは、情報収集をすることにした時だった。

ホワイト「ねえ、ブラック、アンズちゃん。あの人、怪しくない？」
ホワイトはブラックとアンズに言う。ホワイトが指を指した方角にはある街灯に茶色いコートを着た30代くらいの長身の男性が街灯の後ろに隠れていた。それも黒くて細い棒の上にランプがついているエレガントな街灯に。いくら細身の男性だからって街灯に隠れるには無理がある。どうみても丸見え。ブラックやホワイト、アンズでさえ隠れきらないだろう。

ブラック「よし、声をかけよう」

相変わらず無計画的なブラックはその男に近づいた。

ブラック「あの、おじさん」

ブラックが男の人に話しかけた。

???「ナヌー!!」

男は驚いて街灯から離れた。

???「なぜ私が国際警察の人間だとわかってしまったのだ!？」

男はなぜか動揺していた。

ホワイト「あー、普通に話しかけただけですけどー」

ホワイトが小さい声でそう言った。

???「・・・へっ?普通に話しかけただけ?」

男は目をパチクリさせた。

???「いや。私をただ者ではないと見抜いて話しかけたのだから?」

う?その眼力恐るべし・・・!」

ホワイト「は、はあ・・・」

どうやら男の人は勘違いをしていたようだ。

???「ところで、君達の名前は?」

ブラック「俺は、ブラック」

ホワイト「私は、ホワイト」

アンズ「あたいは、アンズと申します」

???「ブラック?おー、聞いたことがあるぞ。君は、確かプラス

マ団を解散させた少年だな」

ブラック「そうですけど、どうして知っているんですかおじさん?

！

???「おじさんではなくお兄さんと呼んでほしいね。まあ、それはいいとして私は世界をまたに駆ける国際警察のメンバーである。名前は・・・いや、君たちにはコードネームを教えよう」

ホワイト「コードネームですか？」

???「そうだ。コードネームはハンサム！みんなはそう呼んでいる」

ハッサムはそう言う。

アンズ「ところで、国際警察がどうしてこんなところにいるんだ？」
アンズがハッサムに聞く。

ハッサム「実はカントーを中心に活動をしているロケット団がここ
のところ活発的に動いているということで警視庁と共同で活動して
いるんだ。しかし、ロケット団は我々警察ではとても対応はできな
いからポケモンGメンにも協力しながらロケット団を解散させよ
うとしているんだ」

アンズ「そうなんだ」

ハッサム「そして、シオントウンで起きている幽霊騒動にロケット
団がどうやら一枚噛んでいるようなんだ」

ハッサムが3人にそう言った時だった。

???「ここにいましたか」

ハッサム「お、右京さん」

ホワイト「あの誰なんですかハッサムさん？」

ハッサム「彼は、警視庁特命課で私の高校時代の親友・杉下右京だ」

杉下「始めまして警視庁特命課の杉下右京です」

ブラック「俺は、ブラックです」

ホワイト「私は、ホワイトです」

アンズ「あたいは、セキチクジムリーダー・アンズと申します」

杉下にあいさつをする3人。

ハッサム「ところで、右京さん。何かありましたか？」

杉下「ええ、実は数日前にフジさんが行方知らずでそれを調べよう

と来たヤマブキジムのジムリーダー・ナツメさんがポケモンタワーで行ったきり帰ってこないんです」

ホワイ特「ナツメちゃんが!？」

杉下の言葉を聞いて驚くホワイ特。

杉下「はい。それでハッサム君と一緒に調べようと思っています」

ハッサム「分かりました右京さん。早速調べましょう」

そう言つて杉下とハッサムが捜査しようとその場をあとにしようとした。

ハッサム「あ!そうだ」

ハッサムは何かをいい忘れたかのようにホワイ特とブラックの方へ向いた。

ハッサム「これは、今回の件とは関係ないんだがプラズマ団の王様であつたNの本名が分かつたんだ」

ホワイ特「Nの本名が!？」

ハッサム「ああ。彼の本名は、ナチュラル・ハルモニア・グロピウス。Nはそのナチュラルの頭文字から取つたものと推測している」
ハッサムがブラックとホワイ特にそう言う。

杉下「ハッサム君」

ハッサム「今行きます。それじゃあ失礼するね」

そう言つてハッサムは、今度こそこの場をあとにした。

ホワイ特「ナチュラル・ハルモニア・グロピウスか・・・」

ホワイ特がそうつぶやいた。

アンス「しかし、ナツメ姉さんがポケモンタワー行つたきり帰つて来ないなんて・・・」

ホワイ特「そうね。とりあえず、ナツメさんが探そうとしていたフジさんと言う人の家に行つてみよう。何か手がかりがあるかもしれないからね」

アンス「そうですね」

ホワイ特「そうと決まれば行くわよブラック」

ブラック「ああ」

そう言つて3人はフジが住んでいる家を探し始めた。

30分、シオンタウンでフジ老人の家を探していたら、ある人からポケモンハウスに住んでいるということを聞いてホワイトとブラック、アンズはポケモンハウスへ向かい到着した。

ホワイト「ごめんください」

少女「はい」

玄関を開けたのは小さな女の子だった。

少女「どちら様ですか？」

ホワイト「私達はね、幽霊騒動について調べに来たトレーナーよ。入ってもいい？」

少女「どうぞ、中へ」

そう言われてホワイト、ブラック、アンズが中に入った。

中に入るとそこには、たくさんのポケモンがいた。

ブラック「ところで、ポケモンハウスってなんだ？」

ブラックが少女にたずねる。

少女「ポケモンハウスはね、フジ老人がポケモンが捨てられたり飼えなくなつたポケモン達を見つけて、ここで預かつて世話しているのよ」

ホワイト「そうなんだ」

ホワイトがポケモン達を見てそう思う。

アンズ「ところでフジ老人が行方不明になっているってホント？」

少女「そうなの。数日前、フジ老人はポケモンタワーに墓参りしに出かけたきり帰ってこなくてそれでたまたま遊びに来たナツメお姉ちゃんがフジ老人を探しに行くってポケモンタワーに行つたけどなかなか帰って来ないのよ・・・」

少女がそう言う。

ホワイト「フジ老人もナツメちゃんも帰ってきていない・・・」

ナツメ「共通点はポケモンタワー」

ホワイト「何かあるわねあのタワーに」

「???」その通りじゃよ小娘」

老婆の声の方を振り向くアンズとホワイト。

ブラック「な、何だよ婆さ・・・」

ビシッ

老婆は持っていた杖をブラックの首にぴたりと突き付ける。

「???」あたしにやキクコって名前があるんだよ」

ブラック「(・・・い、いつ杖が首に・・・)」

ブラックが心の中でそうつぶやいた。

アンズ「あれ、誰かと思ったらキクコさんじゃないですか？」

キクコ「誰かと思ったらあの毒使いの忍者の娘じゃないか」

キクコがアンズにそう言う。

ホワイト「あの、アンズちゃん。知り合いなんですか？」

アンズ「あれ、知らないの？カントーリーグ四天王のキクコさんよ」

ブラック「・・・え？」

ホワイト「四天王!？」

アンズの言葉に驚くブラックとホワイト。

ブラック「この婆さんが四天王!？」

バシッ

キクコ「誰が婆さんだ!あたしは還暦迎えたばかりだが婆さんではない!」

ブラック「いや、還暦迎えた時点で婆さんだろう」

バシッ

キクコ「婆さんではない。あたしは、まだまだ若いんじゃない」

キクコがブラックにそう言う。

ホワイト「それより、おばあちゃんはどうしてここに?」

ビシッ

今度はホワイトの首に杖を突き付ける。

キクコ「人の事はちゃんと名前で呼びな。それとおばあちゃんって呼んでいいのは、あたしの孫だけじゃ!」

ホワイト「ご、ごめんなさい・・・」

ブラック「その杖を下げてください。」

キクコ「ふん、かしこまったりへりくだったりすりや良いとも思ってる甘いお坊ちゃまかい？」

ブラック「・・・じゃあ言い方を変えて・・・その杖をとっと下げる棺桶かんおけに片足突っ込んだ老いばれ婆！」

まさかの言葉に、キクコを含め呆氣に取られてブラックを見る。

ゆっくり杖を下げると、大きな声で笑い出すキクコ。

キクコ「そんな言葉をあたしに放つ度胸もあるとはねえ、ますます気に入ったよ」

ブラック「気に入られても嬉しかねえよ」

キクコ「ふふっ・・・」

ブラックがそう言うときクコは笑う。

アンズ「ところで、キクコさんはどうしてここに？」

キクコ「あたしの故郷がずいぶんと騒がしいことになっていて聞いてね。静かな街を騒がすやつらを懲らしめに来たんじゃない」

キクコがそう言う。

ホワイト「そうですか。四天王がいれば百人力だわ」

アンズ「それじゃあ、さっそくポケモンタワーへ行こうか」

ホワイト「そうだね」

そう言ってホワイトとアンズ、キクコがポケモンハウスを出ようとした。

ブラック「俺は、ここで留守番するからポケモン達を世話しながら待っているから。ホワイト達はそっちをよろしくな」

ブラックがホワイト、アンズ、キクコに言う。

ホワイト「ブラック、どうしてそう言うの？」

アンズ「男のくせに幽霊やゴーストを怖がってどうするのよ！」

ホワイトとアンズがそう言う。

キクコ「なんじゃ、この坊やゴーストがダメなのかい？」

キクコがホワイトに聞くとホワイトは黙って頷いた。

ブラック「と、とにかく俺は行かないぜ！ぜっーーーーー」

たいにな！」

ブラックがそう言う。

キクコ「そうかい。わかった、それじゃあここへ残るならあたしのゲンガーを預かってほしいんじゃないが」

ブラック「ゲンガーですか？」

ブラックがそう言う。

アンズ「ああ、言い忘れたけどキクコさんはゴースト使いの四天王よ。キクコさんのポケモンはほとんどがゴーストタイプよ」

アンズがそう言うと言とブラックが震え始める。

ブラック「ごっこ、ゴーストタイプ!？」

キクコ「そうじゃ。もし、嫌ならあたし達と来るんじゃないな。あたしのゲンガーはイタズラ好きでね、どうなるかわからんがね」

ブラック「行きます。連れてって下さい！」

ブラックは、キクコにそう言う。

ホワイト「始めっからそういえばいいのに」

アンズ「それじゃ、ポケモンタワーへGO！」

こうしてブラック、ホワイト、アンズ、キクコは、ポケモンタワーへ向かった。

はたして、4人は解決することができるのか？

55 幽霊騒動（後書き）

今回の話しどうでしたでしょうか？

ハッサムさん、あんなキャラなので賢いキャラとして相棒の杉下右京を登場させました。なお、Nの本名は、ゲームフリークの増田順一さんのブログで公開されたものをそのまま設定したものです。

詳しいことはこちらのアドレスでアクセスしてください。←

<http://www.gamefreak.co.jp/blog/dir/?p=539>

56 タワー内での再会

幽霊騒動で騒がれているシオンタウン。その騒動にまぎれてフジ老人とナツメがポケモンタワーにいったきり行方不明である。その真相を調べためホワイト、ブラック、アズ、キクコは、ポケモンタワーの前までやってきた。

ホワイト「ここがポケモンタワーね」

キクコ「そうじゃ。ここにはたくさんの死んだポケモンたちの墓があるじゃよ」

キクコがホワイトにそう言う。

アズ「それじゃあ、行きますか」

アズはそう言うてポケモンタワーの扉を開けて中へ入って行く。それに続いてキクコとホワイトも入って行く。

ホワイト「ホラ、行くわよブラック」

そう言うてブラックは無言でホワイトに引きずられながらポケモンタワーに入った。

入った後、タワーの1階部分は墓はなく、受付を除いて何もなかった。

ホワイト「ここは？」

キクコ「ここはタワーの1階じゃ。1階部分はフロントみたいなところじゃ。そして、あそこにある階段から上がポケモンの墓がある階じゃよ」

キクコがホワイト達に説明する。

アズ「それじゃあ、2階へレッツゴー！」

そう言うてアズは階段を上り始める。

ブラック「嫌だな」

ホワイト「そんなこと吐かないの。男でしょう！」

ホワイトがブラックに喝を入れて階段を上った。ブラックは何も言わず階段を上って行った。キクコも後に続いて上って行った。

ブラック達が2階到着する。

そこには、たくさんのポケモンの墓があった。それをホワイト、ア
ンズが辺りを見渡した。

そんな時だった。

ブラック「な、何か聞こえなかったか、ほ、ホワイト！」

震えながらブラックがホワイトにそう言う。

ホワイトは耳をすますと確かに何かが聞こえた。

「・・・ふし・・・はっ・・・ター！」

ブラック「ゆ、幽霊だ！」

そう言つてブラックがその場を逃げようとしたがキクコが杖でブラ
ックを押さえた。

キクコ「騒ぐんじゃない。あれはポケモンに指示を出しているトレ
ーナーの声じゃよ」

キクコがブラックにそう言う。

ホワイト「こんなところでポケモンバトルするなんて・・・」

そう言うのとホワイト達はその声が聞こえるところへ向かった。

そこには男子と女子がポケモンバトルをしていた。

「???」「くそ！まさか、俺がお前に負けるなんて」

「???」「私だつて成長したんだよ。いつまでも、負け続けるわけに
は行かないからね」

女の子が男の子にそう言う。

ホワイト「あ、グリーン君。リーフちゃん」

リーフ「あ、ホワイトさんにブラックさん」

リーフはそう言つてホワイトに抱きつく。

ブラック「バトル、強くなったのか？」

リーフ「はい。ホワイトさんやブラックさんのおかげであれ以来順
調にジムバッジが集まっています」

ホワイト「そうか」

グリーン「ところで、その二人は誰だ？」

グリーンがそう聞く。

ホワイト「えっと、忍者の服を着た人がセキクジムのジムリーダー・アンズちゃんて杖を持った人がカントーリーグ四天王のゴースト使いのキクコさんよ」

リーフ「ジムリーダーと四天王!!!!!!!!!!!!!!」

グリーン「ジムリーダーはともかくこの婆さ・・・」

ピシッ

キクコは持っていた杖をグリーンの首にぴたりと突き付ける。

キクコ「婆さんって言うな、あたしはまだまだ若いんじゃないよ」

そう言うときクコはジロジロとグリーンを見渡す。

グリーン「な、なんだよ」

キクコ「あんた、あいつになんか似てるね」

グリーン「あ、あいつ？」

グリーンは、首をかしげながらそう言う。

キクコ「・・・ふんっ、気に入らないね」

キクコはそうつぶやいて杖をゆつくりと下ろす。

グリーン「（はあ？なんなんだよ、このババア、くそっ・・・）お

いリーフ、もう行く！俺はかなりいいそがしいからな。それじゃあな」

そう言つてグリーンは、1階へ降りていった。

リーフ「気にしないでください。あいつはいつもこうなので」

リーフはホワイトとブラックにそう言う。

アンズ「でも、気に入らないわねあいつ。あいつ、ジムへ来たらコ

テンパンにしてやるわ！」

アンズがそうつぶやいた。

リーフ「ところで、ホワイトさん達はどうしてここに？」

リーフがホワイトに聞く。

ホワイト「私達はこの幽霊騒動とフジ老人を探しに来たのよ」

ホワイトがリーフにそう言つてさらに、リーフに説明を付け足す。

リーフ「そうだったんですか。なら、私もやりますわ」

ホワイト「ありがとう」

アンズ「人が多ければ多いほどいいからね」

リーフ「それじゃあ、上へ向けて出発！」

そう言つて少女達は上へと向かった。

キクコ「ふん。あの子達を見ていると孫を思い出すな」

キクコはそうつぶやいて階段へ向かった。

ブラック「孫か。あの婆さんの孫の顔を見てみたいぜ」

ブラックはキクコに聞こえない程度の声で言つて階段へと向かった。

57 幽霊の正体

タワー内でリーフと再会したホワイト達はタワーを順調に登って行くはずだったが……

祈祷師A「ノロツ……テ……ヤル……」

祈祷師B「コロ……シテ……ヤル……」

祈祷師C「タマシイ……オイテケエー」

祈祷師D「ミチツレチャアア！」

途中で何かに取り付かれた祈祷師と戦うはめとなっていた。

ホワイト、アンズ、キクコ、ブラックはポケモンを出して祈祷師達を気絶させた。

ブラック「なんなんだよ！コイツらは！？」

キクコ「どうやら、ここにいる祈祷師達は怨念によって皆取り付かれたようだね」

キクコがそう言う。

するとそこに別の祈祷師達が現れた。

リーフ「また、祈祷師が来たわ」

ホワイト「こんなにいっぱい来たらキリがないわ」

アンズ「ここは、逃げるのみ！」

アンズがそう言うってホワイト、ブラック、リーフ、キクコもその場を逃げた。

そして、しばらく走って祈祷師をなんとか振り切った。

ホワイト「疲れたわ」

アンズ「こんなに祈祷師の人達に取り付かれているなんて……」

リーフ「ホント、どれだけ怨念が強いんだろうここは」

ホワイトとアンズ、リーフは疲れた顔でそう言う。

ブラック「もう嫌だ！！」

ブラックは本音を吐く。

キクコ「情けない男子だね。ヒビリまくるとは、これじゃあ、アタ

「シには勝てんな一度も」

キクコが挑発的なことをブラックに言う。

ブラック「そんなことないぜ！さっさと進むか！」

ブラックはそう言って階段へと向かった。

アンズ「単純ですねブラックさん」

ホワイト「まあ、あいう性格だからね」

リーフ「ファイア、そっくりだわ」

アンズとホワイトがブラックを見てそうつぶやいた。

ブラック「よし、登るぞ！」

ブラックが階段があるところへ行くこととしたその時！

「立ち去れ……ココカラサレ」

突然声が聞こえた。

ブラック「で、で、で、出た――――！！」

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

ブラックが大声を出してホワイト達のところへ行く。

ホワイト「どうしたのよ、大きい声を出して？」

ブラック「幽霊が出たんだよ！」

そう言つと幽霊が現れた。

アンズ「どうしますか？」

ブラック「幽霊に効くはずがないぜ」

ブラックがアンズに言う。

リーフ「それは心配しないでください。このシルフスコープなら幽

霊を見破り攻撃が当てることができます！」

リーフがバックからシルフスコープを持ってブラック達に言う。

ブラック「は、早くしてくれよ！取り付かれる！」

ブラックがリーフに抱きながらそう言う。

リーフ「まかせてください！行くわよ、ニヨロボ！」

リーフはニョロボを繰り出した。

そして、シルフスコープを付ける。

リーフ「わかりましたわ、幽霊の正体！」

アンズ「幽霊の正体は何なの？」

リーフ「幽霊の正体はガラガラです」

リーフがそう言う。

リーフ、「ニヨロボ、みずてっぽう！」

ニヨロボはみずてつぽうを繰り返してガラガラに当てる。

リーフ「ニヨロボ、もう一度みずてっぽう！」

ニヨロボは、もう一回みずてつぽうを繰り出してガラガラに当ててガラガラの霊を弱らせる。

そして、ガラガラは笑顔でその場から消えた。

キクコ「成仏したようだね」

キクコがそう言う。

リーフ「ええ。でも、どうしてガラガラが怨念が残ったんだろう？」

ホワイト「その答えは上にありそうだよ」

ホワイトがそう言う。

ブラック「よし、上へ行くぞ！」

ブラックがそう言うて階段を駆け上がった瞬間だった。

ブラック「うわっ！」

ブラックは、何かにつまずきこける。

ブラック「いてててて、何だ何だ？」

そう言ってブラックは足元を見る。

ブラック「き、き、き、き、き、ギャー――――！！！！！！」

! ! ! ! ! ! ! ! !

ブラックは足元を見て悲鳴を上げる。

はたして、ブラックは何を見たのか？

その真相は次回明らかとなる。

58 救出と救助と決戦

前回、ガラガラの亡霊が現れてリーフが見事撃退、成仏させた。そして、ブラックが最上階の階段を登ろうとした時悲鳴を上げた。

ホワイト「どうしたの、ブラック！」

ホワイトがブラックにたずねる。

ブラック「か、階段のところに死体が……！！！」

アンズ「死体！？！」

アンズが驚く。

すると、キクコが階段のそばに近寄った。

キクコ「これ、坊主。こいつはまだ生きているよ」

ブラック「本当ですか！？！」

キクコ「ああ。それにこの子は確か、ヤマブキシティのジムリーダーじゃあないか」

ホワイト「ウソ！？！」

キクコの発言に驚いたホワイトはキクコのそばまで近寄ると確かに血まみれのナツメがグッタリして倒れていた。

ホワイト「ナツメちゃん、ナツメちゃん」

ナツメを必死で揺らすホワイトだが返事はなかった。

キクコ「おい、坊主。このエスパ―娘を担いで病院へ運んでやれ。

このまま血が止血できなければ大量失血で死ぬぞ」

ブラック「わかったよ、ばあさん。ナツメを近くの病院まで担いでいくぜ」

そう言つてブラックは笑顔でナツメを背負つてシオンタワーを降りて行った。

ホワイト「それにしても、どうしてナツメちゃんがあんなに血を流して倒れていたんだらう？」

リーフ「さっきのガラガラの幽霊の仕業じゃあないし」

アンズ「となるとナツメ姉さんをここまで痛めつけたのは」

ホワイト・リーフ・アンス「『ロケット団！』」

口をそろえてそう言うホワイト、リーフ、アンス。

そして、3人は急いで階段を登り始めた。

キクコ「やれやれ」

キクコはそうつぶやきながら階段を登った。

その頃、最上階では・・・

コジロウ「ゼーゲル博士。これで、よろしいでしょうか？」

ゼーゲル「ああ。ずいぶんデータが集まった」

ムサシ「それで、このフジ老人はどういたしましょう？」

ムサシがそう言うのとゼーゲルがフジに近づいた。

ゼーゲル「とりあえず、フジ博士。例の取引考えてくれたかな？」

ゼーゲルがフジにそう言う。

フジ老人「その取引ならお断りじゃよ。ワシは、研究者から足を洗い、今の生活をしているんじゃないよ」

ゼーゲル「捨てられたポケモンたちなんて拾ったって一門も特にならんぞフジ博士。私たちの研究と協力せぬか？」

フジ老人「絶対に嫌じゃ。死んでもやらん！」

フジが強気でそう言った時だった。

ロケット団下っ端A「なんだ貴様ら・・・ぐは！」

ロケット団下っ端B「ぎゃあ！」

ロケット団の下っ端達が悲鳴を上げて倒されて行く。

コジロウ「誰だ、ロケット弾に刃向かうのは！」

コジロウがそう言うところにはホワイト、リーフ、アンスが姿を現した。

ホワイト「ロケット団、よくもナツメさんをあんな目に合わせたわね」

アンス「絶対に許さん！」

リーフ「フジ老人もおとなしく解放させなさい！」

ムサシ「誰が解放するもんですか」

コジロウ「こうなったら、ロケット団の力、思い知らせてやるぜ！」
そう言つてムサシは、ココモリ。コジロウは、デスマスを繰り出した。

アズ「クロバット！」

リーフ「ピジョット！」

アズとリーフがクロバットとピジョットを繰り出した。

リーフ「ピジョット、かぜおこし！」

ムサシ「ココモリ、エアスラッシュ！」

アズ「クロバット、どくどくのキバ！」

コジロウ「デスマス、シャドーボール！」

4つの技が同時に当たる。

その際にホワイトがフジを助けに行く。

ロケット団下っ端C「ここは通さん！」

下っ端がホワイトの前に立ち塞がる。

ホワイト「ジャロータ、つばめがえし！」

ジャロータは、つばめがえしを繰り出して下っ端をあっさり倒してしまう。

そして、次から次へとやって来る下っ端をコテンパンに倒していった。

ゼーゲル「このままでは、全滅じゃ！ムサシ、コジロウ、この場合は撤退する」

ムサシ・コジロウ・ニヤース「了解しました（ニヤ）」

そう言つてムサシ達は、けむり玉を投げた。

ホワイト「しまった！」

そして、けむりが晴れたときには、倒れているロケット団を除いていなくなっていた。

リーフ「逃がしたわ」

リーフがそう言う。

ホワイト「あの、大丈夫ですか？」

フジ老人「大丈夫じゃ。それより、助けに来てくれてどうもありが

とう」

フジがそう言う。

キクコ「おやおや。どうやら、アタシの出番なしのようだね」

キクコがそう言う。

フジ老人「おや、誰かと思ったら四天王のキクコじゃないか」

キクコ「相変わらずじゃなフジ老人。ところで、ガラガラのことな
んじゃが」

フジ老人「わかっておる。その彼女達のおかげでガラガラは天国
に向かったようじゃ。そうじゃ！せっかくここまで来てくれたお礼
をせねばな」

ホワイト「別に礼なんて・・・」

リーフ「そうですよ」

アンズ「あたいは、任務のついでにやったことですし」

フジ老人「ほっほっほ。ずいぶんと謙虚な少女達じゃのう。だが、
それではわしの気がすまん。どうじゃ？この年寄りに礼をさせてく
れんかの？」

ホワイト「わかりました」

ホワイトがそう言うアンズとリーフも頷いた。

そして、3人はフジとキクコとともにシオンタワーをあとにした。
もちろん、お縄にかけたロケット団とともに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8532o/>

ポケットモンスターBW 白き少女と黒き少年

2011年11月15日13時36分発行